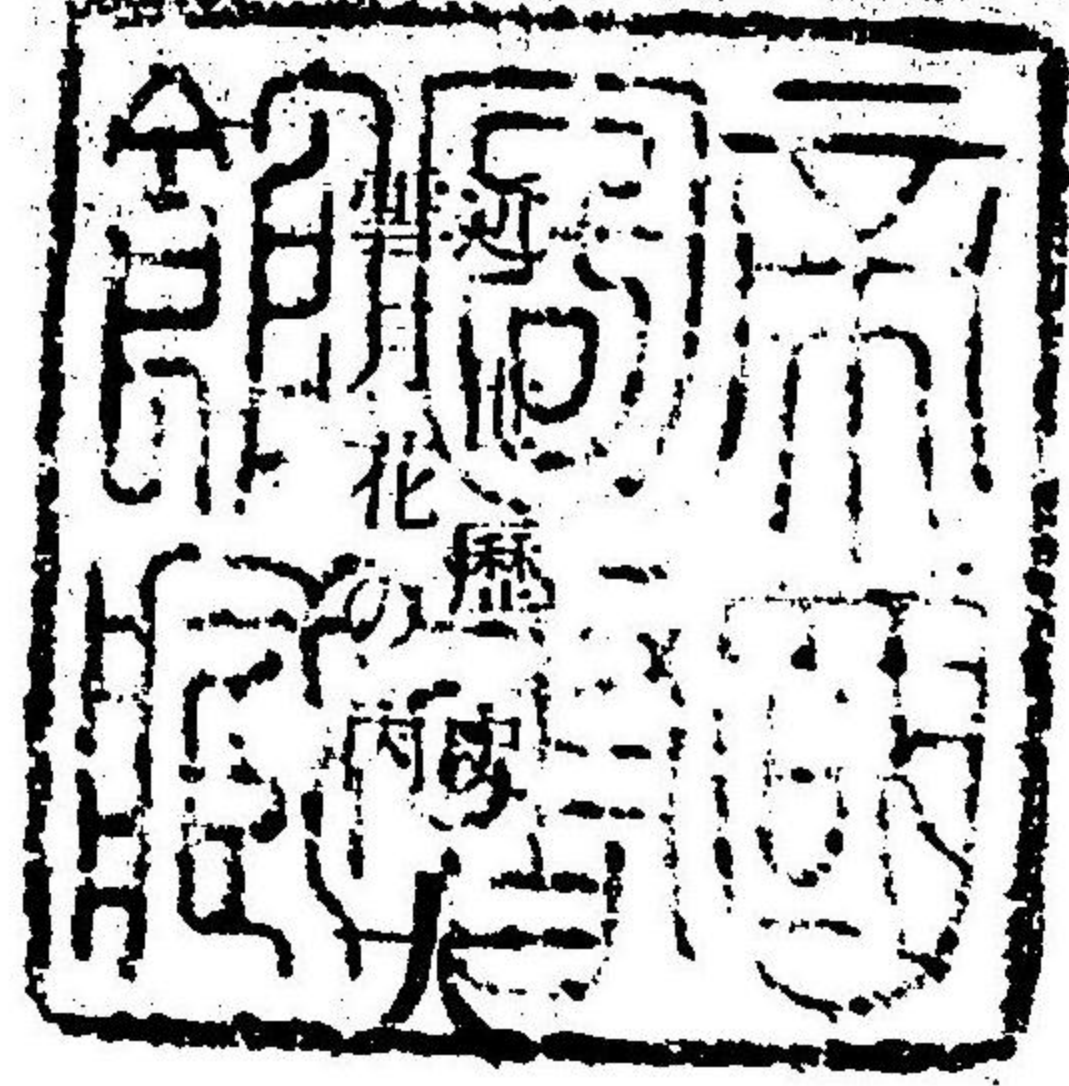


大木の木

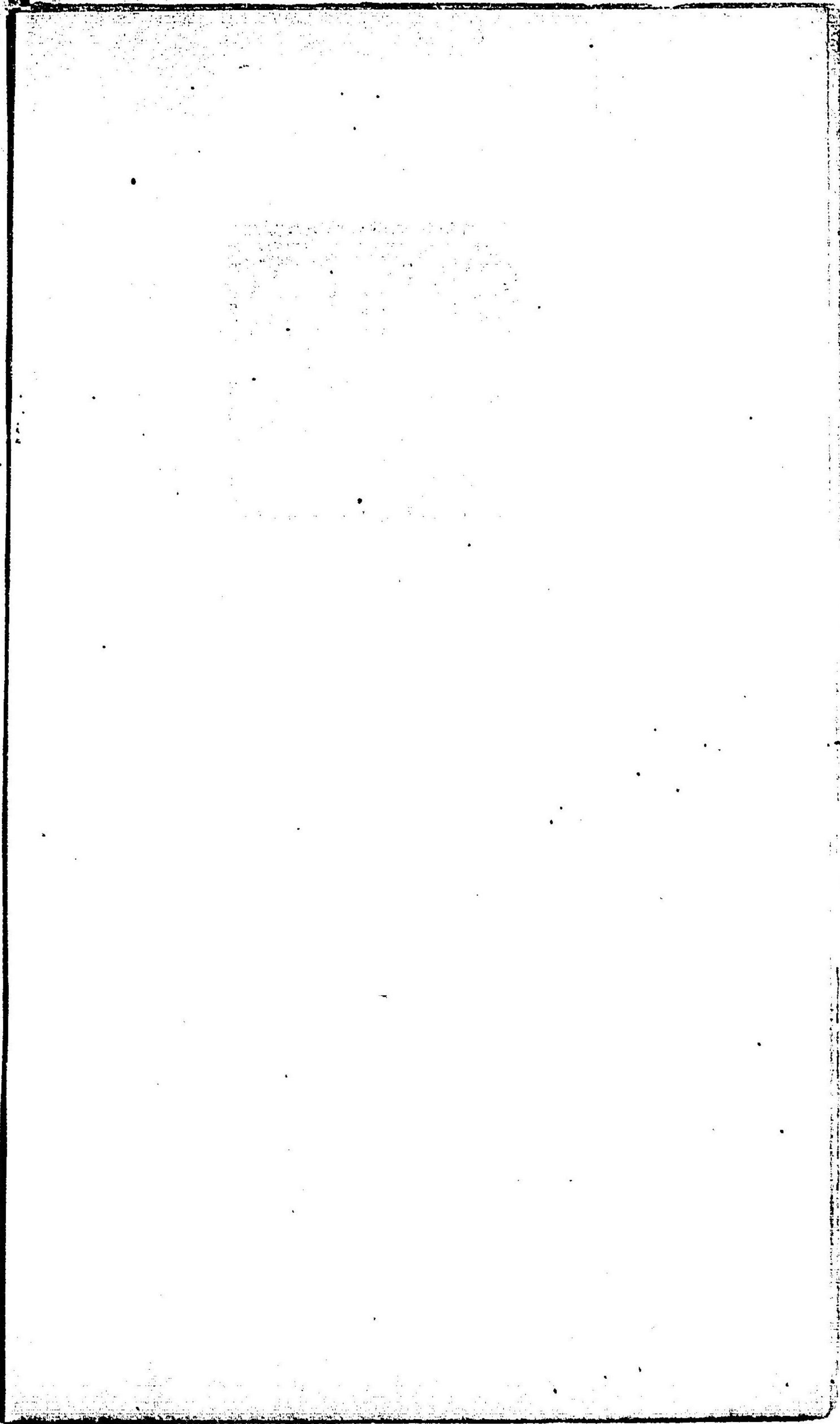
後天著

257
353



和
の
花
微笑
小史
著

明治
41 3 26
内交





439
580

近世歴史
雪月花の内
大和の花



中山家の事

微笑小史著

前は口上を以てお約束致した通り近世歴史雪月花の内大和花と名付ますのを今
回より掲ひます。茲に前申し上ました櫻田雪は實に其時全く雪降であつたの
みならず、それ迄になる催しが暫く有り又後の片附迄中々手間のかかりました
る處、どうしても雪の體でございませうが此大和の方に至つては何も花の時節と
いふではないに花とは無理だと思召しませうが、イヤ又其花の處が有るので
先づバツと一時に開き又忽ちばらくと散て仕舞ひ誠に花々敷奇麗で有て香
は永く後世へ遺り且は花の名所の大和でございませうから右の如く名付ました

でございませう。
安政の末より文久元治に至るの頃尊王攘夷といふ辭が盛んに流行致しまして、何
でも外國と張合ふには朝廷が立派でなくては不可、さうするには間に威張て居る
徳川幕府といふものを打倒して仕舞なければ何につけても不都合であると、取り
に説が起つて参りました、然し是皆口で論じ筆で辯するだけに止り、實際に兵を擧
げ釋ではないのでございませう、是を實際に始たのは即ち此大和の連中、相駢
んで但馬の徒でございませう、然るに事は十分に行なかつたが、王政復古の元祖明治
維新の開店を致したのは大層な功績でございませう、因て今日より其大和事件を
申し上げ附録として但馬をもお話し申す事と致します、さて其大和に突然義兵
が起りました次第は、どうして左様相成たといふに、伏見寺田屋騒動といふのが
崩れて、それから大和になりましたので然し其寺田屋を委しく申しますと大層面
倒になりますから、極其大略を申し上げそれから大和にかゝりませう。
文久二年四月廿七日伏見寺田屋といふ宿屋に於て薩州藩士のエライ切合があり

ました、之を寺田屋騒動と申すので、是はごういふ譯だといふと、前回櫻田で
申し上りました通り、水戸の藩士は約束の如く大抵出ましたが、薩州藩士は有村
の外間に合ひませんでした、之を薩人ひごく遺憾に思ひ、どうかして旗揚を致さ
うと、有馬新七武満、田中謙助盛明などいふ豪傑が寄合ひまして、西郷吉之助
大久保市藏などに説き、段々味方を集めて居りました、すると此へ京都中山家
の家臣で、田中河内助と申す人が参りました、中山家と申しますのは、中山大
納言忠能公で、其お子が中將忠愛卿、其忠愛卿の御兄弟が男女二人、男の方は
侍従忠光卿と申して、即ち大和一擧の總大將に爲る方、女の方は慶子様と申し
て、先帝の御寵愛をお受になり 祐宮陸仁親王をお生になりました、是が即ち
獻聖文武なる當今の 主上でございませう、さて先帝の皇后九條夙子様に、御子
がございませんから、此祐宮様をお育てになりましたので、それゆゑ當 主
上其實は皇太后夙子様のお腹ではなく、中山慶子様のお腹でございませう、申送
もなく慶子様は至て御聰明な方で、先達御業去遊ばした中山一位局と申すは、

この慶子様の御事でム升、是等は一體うかと申し上げては相済ん、勿論ないやうなお噂でございませうが、筋のよく分る様に申し上げるので、よくお聞取を願上ます、さて此山中侍従忠光卿と申すは、御年未だ幼なき頃より、御勇氣活潑に表らせられました故、お附申して居た諸大夫田中河内助といふ人が、此君を一番大将にして、旗揚を仕様ものと思ひ、先然らば九州へ下つて薩藩を説付やうと、中山公御父子に御相談申し上、早速九州へ参りまして、かの有馬田中及び肥後の宮部鼎藏などいふ豪傑等と、一所に酒を飲み「さて各々方、拙者がかく参つても別段彼是申す迄もござらん、是を一つ御覽下されば下向の趣意も分りますサ御一讀爲さいまし」と田中懐中より一枚の短冊を取り出し、人々の前へとひろげました、何が認めて有りますかは次回。

(其二) 浪士の集會

中山忠愛公より賜はつたる短冊、如何なる事が書てあるかと、宮部鼎藏首を延

して見ると「武士の矢竹心の梓弓、引發すべき時は來にけり」としてあるで、さては最早京都邊には勤王の士共が追々集まり旗揚の支度に見えわた、よし諸君早速上京に及ばうではござらんか」「ウム、それようがッしよ」と忽ち皆同意したから、鼎藏大に打喜び然らば己共も歌を作つて藩の若者を引立やうと『いざ子共馬に鞍をけ九重の、御階の櫻散ぬ其間に』といふ歌を作つて國へ送り、一同京都へと上つて参りました、そこで先づ京都邊に集まつた人は大層な人数でございませうが其内屈指の人と申しますれば、肥後の人では右の宮部鼎藏、京都の人ではかの田中河内助、筑前の人では海賀宮門、土州の人では吉村寅太郎、備前の人では藤本津之助、江戸の人では安積五郎、出羽の人では清川八郎、長州の人では久坂儀助、入江九一、前原八十郎是は後に兵部太輔一誠となつた人で、次に山縣少輔即ち只今の陸軍大将、それから品川彌次郎是は其後でも彌次郎でございませう、此外薩人では、かの有馬、田中の外橋口壯助、橋口傳藏續いて柴山愛次郎、西田直五郎、森山新五右衛門、弟子丸應助などといふ名代の人々、是で和

泉守久光殿が上られたら、すぐ旗揚に及ばうと、手ぐすね引いて待捧へ、皆それ
それ其邸へ這入りましたが薩摩の連中は邸の者とは論が違つて居りますから、伏
見の寺田屋といふ宿屋に籠つて居りました、其内間もなく島津和泉三郎久光公上
京とあひなつたが、此方の實際は世間で皆思ひ違つて居りますので、世間では
大層活潑な方の様に思つて居る様子ですけれど、實際はさういふ方でない、寧ろ
因循に近い方で、旗揚などいふ様な事はお嫌ひの流儀でございませぬ、それ
も一向有馬等の言はお採用になりませぬ、そこで此方は意地になつて野々
亂暴を働らく様な工合、或日の事で其薩摩の若手が案内を致し、吉村寅太郎、
安積五郎、海賀宮門、清川八郎なんぞ、藝妓をつれて船遊をやり、天保山の下
の處ろへ参ります頃は、三絃を弾く鼓を拍つ謠を唄ふ時を吟ずるといふさむぎ
で、ヤヤン／＼ワイ／＼、エライ響きもある天保山番所の役人立出て参り「是々
御番所の前も押らす其さむぎは何事ぢや上つて一々姓名を申せ」といふと吉村
寅太郎、安積五郎、清川八郎の三人がひらり／＼と飛上り、番所の前へ突立上

り「何だと姓名を申せと、よし然らば名乗て聞さうよく覺わて居らなければ不可
ぞ拙者は加藤虎之助清正といふ者」「デ、吾輩は福島市松正則としやう」「そんな
ら僕は片桐助作且元ごでも」「是々左様な出任せを申すな此處を何處と心得居る
神妙に致さんと其分に差置んぞ」「何だ其分に差置んと生意氣な事を申す奴だな
福島市松正則の腕前を見たいか」といひながら安積五郎いきなりスツリ引抜た
で、ソいといふて役人連中のこらす裏から逃出したもある「ござまを見る木葉役人
めら、口ほごもない腰抜だて」と笑つて皆又船に這入り大遊びをやって行まし
た、そこで其日はそれで済だが、役人方の連中では思々敷てならんから、其邸
々へ掛合てごうかしてやり度と考へましたが、姓名が一向分らんには因る、加
藤福島片桐なんぞと、そんな人が今ある譯はなし表向き掛合う事がどうしても
出来ない、つひにぐづくにして仕舞ましたで、役人連の方は手を拍て笑ひ、
どうだ諸君愉快ぢやないか吾々の勢力もこう爲てくれればしめたもの、退々伏見
の時機に近よつたのであらう、と益々勢力を振つて荒るもある、島津和泉三郎殿

大に困られ、ア一皆疎暴過激では仕様がな、如何に愛國の餘りでも、あれでは事を破って仕舞ふ、どうかして取銀めたいものであると、頼りに考がへて居られます内、こちらは浪人追々集って來ましたも、早速兵を擧やうとかゝる此處でつひに大騒動の起るお話しは次回で詳しく判ります。

(其三) 寺田屋評議

追々同志が集って参りましたから、一評議に及ばうと、のこらすを寺田屋の奥二階に集め、有馬新七ツイと進み、「さて各々方かやうに人も集りましたにより一舉に及ばうと存じますが、和泉守殿の同意を待て居ては、いつの事か分りませんにより、近々に先づ討て出で、所司代をば擒に致し、九條殿は押込やうと思ひますが、各々是は如何でござらう」といふと、一同同音に至極妙々異存ござらんと、のこらす同意して仕舞た、此時此席中一番の年寄に永田佐一郎といふ者がある、是は極和泉殿信仰の者でありますも、是は大變と思ひましたな

れど、此處で論しても徒事と思つたか、其坐は黙って居りましたが、どうも氣になるから、當地の藩邸へ歸り、何分此一舉には同意し兼ね、然らばといつて命を惜むのではない、其證據には死で持論を示さうと、スツカリ思ふ所の書置を認め忽ち切腹して仕舞たとは、随分短氣の人でございます、サア藩邸では大さわざになり何で永田が死だのだらうと、段々調へると書置が有たも、高崎佐太郎(即ち今の正風君)いそぎ京都へ参り、之を和泉守殿に告げたで、和泉守殿大に驚ろかれ、御近臣の奈良原幸五郎を呼で「イヤ困った事が出來た、こんな事を今初めては誠に困る其方達是から参って差押へてくれまいか、仕義によれば是非に及ばん、打果してよろしいから早速に行てくれ」といふ命令でございますから奈良原スツ其坐を下り(是は今の男爵で)「委細承知仕つりました」と、くつけふの士七人を選び、伏見寺田屋へと乗込で参りますと、てうど今人数割最中の所で、有馬と田中とが筆を取り「先づ吾輩等八人が、夫と聲をかけさへすれば、スツ藩邸から來る者がザツと四十人は分つて居る」「それから真木

和泉殿の部下が六人、小河一敏殿の部下が五人、田中河内助殿の手が十七人、先づ是で六十餘人、「久坂義助殿のお話しては、いざとなれば長州郡から二百人は直出るといふ事」「そんならもう構はずと早速支度に取り掛らう」と是から皆皆樂まり刀の身を拭く、鎮帷子を繕ふなどといふさわざ、そこへとうと道入て参つた八人、有馬殿にお目にかゝりたいといふから、有馬新七を初め田中謙助、橋口壯助、柴山愛次郎、下へ降て見ますと、奈良原幸五郎、道島五郎兵衛、江夏仲左衛門、山口金之進、鈴木勇右衛門、森岡善助、鈴木正之助、大山格之助等一列に并んで居りました、中にも奈良原高「何と有馬殿面倒な事はいへん、先づ早い話しが和泉殿の仰せを聞いて思ひ止ればそれでエーが、若し止らんとはいはれよば氣の毒のこつちやが上意打ちや」上意打といふのは君命で人を切る事だそうぞ有馬此時嘲笑ひ「イヤ今に爲ては早止られん、此處に至つて止たと云れては、何分諸藩の士に對して薩摩男兒の面目が立ん」といふと道島一膝進まし「どうでも止らんけりやア只は歸れん、是非ないこつちやが歸

負する」「チー是非ないのう、サ勝負せう」と田中が答へるや否や「ウー構辨せい」といふ聲が早かつたか、抜た方が早かつたか、道島五郎兵衛すら引抜くと、いきなり田中へ切付た、田中心得て一足下が、下る方が間に合なかつたか、眉間を一つやられた處、急所に當た者と見へ横にさうと倒れました、それと見るより有馬新七「をどれかたき」と叫ぶと同時に同じく抜打エイト来た、てうと今道島は刀を引く所だつたから受やうとしたか受損じ、梨割にやつつけられ同じくさうと打倒れ是で双方一人づゝ死にました。

(其四) 壯士の決闘

浪人組の方では田中、討手の方では道島と双方一人づゝ死人が出来た、それと聲を掛て奈良原、江夏、抜つて立かゝつたから此方は橋口と有馬とが迎へ合せてナヤンナヤンと受る、すると此時奇妙であつたは後に立て居る柴山愛次郎上意打といふ聲を聞くと、大小ガラリと前へ投出し「サ打ッ」といつて坐る處

を鈴木正之助大刀振上げ「よか覺悟だ」といふ辭と共に柴山の首は前へ落たと
 は潔よき死方であつたと、後に皆譽たさうで、此時森山新五右衛門に西田直五
 郎といふ二人は打つれて臺所へ参り水か何か飲で歸つて來ると、てうど今此さ
 わぎ、是はッと思つたが刀はない、然し此時分の事だから臺所へ行にも、小刀
 は差して居ります、そこで二人共小刀の柄へ手を掛るや否や、左右より森岡善助
 大山格之助「上意打く」といひながら切てかゝるを「何已等が」と二人共小
 刀を引抜て防ぎ止め、火花を散して渡り合しました、然し何分にも小刀の事と思
 ふ様に働けない、烈しく打込大山の刀を受損じて、西田直五郎縁端へ切倒され
 た、森山は其間無二無三に森岡の手元へ切付け十ヶ所餘り手を負はせたが其身
 も七八ヶ所手を負て双方眞赤になつて戦ひ居る内、何といつても小刀と大刀で
 創の淺深が違ひますから、森山つひに精神盡きバツマリ倒れて其儘となる、此
 時餘り下のさわぎがエライで橋口傳藏、弟子丸龍助の二人がバツ／＼と階子を
 降りて來ると、鈴木勇右衛門いきなり飛込み、エイと一つ拂つた刀で傳藏足を

まともに斬られ、思はず踏ばづしてごろ／＼と落る處を、たゞみかけて遂に打留
 めました、其内飛下りた弟子丸龍助抜くと其まゝ身構へたから、山口金之邊迎
 へ合せ忽ちまちあちこちで、チヤンチヤンと初まつた、さて又大將有馬新七は猶ま
 だ江夏仲左衛門と頼りに打合て居りましたが、有馬の勢ひ猛くして中々容易な
 らん體だから、鈴木正之助横合から有馬の肩へ切付た、有馬怒つて横に拂つた
 一刀、したゝかに打たると見れば鈴木どうとそれへ倒れた、其代り亦運の盡き、餘
 りつよく打たせいか、有馬の刀中頃からぼつきり二つに折れた、得たりと江夏
 が正面から來た一刀眞向を割付たが、やられながら流石は有馬、折た刀で江夏
 が胸元はッしと切て、自分は其まゝバツマリ倒れて息絶ました、此間に弟子丸
 龍助は山口と烈しく打合て居たが、やツといつて延した一刀、山口の腦天へ一
 打入れたけれど、十分にきかない様子であつたから、いらつて又一足進み打直さ
 うと振上げた時、鴨居へザツ／＼切込だから、仕舞たといつて引うとする間に
 山口の爲めに胴を拂はれ、遂にこれも打れました、さて酒のこつて居るは橋口

壯助、最初から奈良原幸五郎と只二人人雜もせず打合て居たが、何分足場が悪いので下るとたんに躓いてよろ／＼とよろめく處を附入て打た奈良原の一刀、欄れむべし橋口けさかけに打放され「参ッた」といふ聲共ござりと仰向に倒れたが、スグひよいと起直り「ヤ奈良原スツカリ参ッマ、水を一杯くれんかのう」といひますから、流石に此方も氣の毒と思ひましたか、縁端の手水鉢から柄杓に一杯酌で来てやると、それをゴツくり飲み終ると、其ま／＼グウと思を引いて仕舞たが、如何にも剛膽の姿で有た、誠に惜むべき人物を殺したと一同感心したさうでございます、是で先づ果し合は終り、アトは其まどめ方の紛紜是はゆるりと申し上ませう。

(其五) 田中の終り

下座敷の切合また／＼く間に八人盡々く打果されましたが、二階に居た十餘人の者共なせ是を助太刀しなかつたといへば、全く其間がなかつたので、最初有馬

田中等が降て一言二言論じ合て居るかと思ふと、忽ち戦かひ初めた様子、そこで又二三人降るや否や、ヤ、エイといふかけ聲、チャンチャンといふ太刀音がするかと思へば、ばかりごとりと倒れる音「それ初まつた助太刀に行く」と音々刀を取て立つ時分には、もう相済みに爲て仕舞たので、そうこうする内、階子段を、どん／＼と上つて來たは奈良原幸五郎、それつと見て皆々が四方から取圍まうとする、奈良原忽ち両肌推ぬぎ大刀ガラリとそこへ投出し「各々マア聞てくれ、みだりに手向ひしない證據は此通り大小を捨て居る、殺すなら殺してもよか、此通り肌をぬいで居るけんに、然し一つ話がある何とそれを聞てくれるか、それ共直殺すといふか」「ウーよか言分だ、ちやア先づいつて見い」「そんならいはう、和泉様だつて知ての通り勤王のお志ざしは固よりだが時を待て居られるのだ、然るに有馬の連中は、はやり通てそれを聞んから、ついにつまらん同志打に爲て實に残念千萬ぢやないか、各々方は他邊の方ぢやに因て、拙者共は敢て構はん、但し和泉様に遇て論じたいといふなら、拙者と共

に邸へ来られい」と段々説諭致しましたもゑ、皆々も其膽力に服したものか、荒立もせず事納まり、それぐ散亂して仕舞たが、田中河内助父子と海賀宮門との三人は猶思ふ所有たか、奈良原の説に従つて薩摩邸へ参ると、薩摩邸では色々評議に及び、河しろ是等を邸へおいては幕府への聞にも悪いから、國へ送つて仕舞うと爲た、其時又留守居方などの説で、どうも彼等を國へやると又國の若者を煽動するだらうから、途中に殺して仕舞がよかと、ひどい説を出しました所、かの寺田屋に死だ人の親族共、「イヤ吾々の一族が空く死だも、彼等の嘘喝に起つた事だから、宜うござる殺して仕舞ませう」と怒まぢ相談のついたはなさけ無釋、そこで三人を別々の船に載せ九州指て下りました、其中田中河内助の乗た船、長州稻瀬といふ所にかゝつた節、柴山龍五郎といふ男と其弟の忠次といふのがツイと進み（此弟の名を忠次と申すのは少し當になりません、何でも忠次とか何とかいつた様で有たか或人が申すから、さうしておきますが間違つて居たら跡で直します）龍五郎此時聲を張上げ「お氣の毒のこつ

ちやが田中殿、お命を今申し受ます、尋常に覺悟をして下され」といふと河内助少しもさわがず「大方そんな事で有うと、大抵は覺悟して居たが、果して思ふ所に違はん、男子志しを遂げずして反獲の者の手に死す事、限り無の恨ではあれど、今に至つて是非に及ばん、後に報のあるかは知んが、ヤア殺すなら直ぐ殺せ」と言様兩肌腕で腹を突出した、其構幕物凄い程でございましたから、皆少し氣味悪くなつたか何となく引色であるもゑ、是では成んど柴山龍五郎とイと前へ進む時、河内助大音に「ながらへて變らぬ月を見んよりも死して拂はん世々のうき雲」と辭世の一首を口ずさみ、眼を眠つて死を待つ體、龍五郎思ひ切て一刀引抜き、脇腹へ一つグサと突込、同時に忠次が吭の所を、ぶつり向へ刻切たから、さすがの田中もうんといつたざり此世の暇と相成たは、誠に惜しい事で有たか、柴山兄弟も氣の毒に思つたそふで、此氣の毒に思つた一念が後神經病を引起しましたのでございます、さて此折子息の左馬助が乗て居た船でも、矢張り此様な事で有たらしい、先づ何しろ是で早、田中父子の最期は相済

み、是より海賀官門の最期と相成りますが是は次に申し上げます。

(其六) 海賀の終り

田中父子の乗て居た船より少し後れた船に居った、海賀官門直求といふ人は筑前秋月の藩士でございますが、代々起倒流の柔術師範をして居る家で、宮門も若年より指南をして居りましたし、殊に剣術にも達して居りますで、見た所より何となく非常の勇士と見えますから、さすが薩摩男子も少し怖れたか一寸手出しを致し兼ねて、中国路を過る間は、つひに取掛る景色もなく豊前豊後も無事に通り、日向の沖へと参りました折、もう此等でやらなければなるまいと、細島といふ小島へ船をつけ、酒肴など取出していゝかげんに酔して仕舞ひ、夫ツと各々目くばせに及ぶと、ばら／＼と集つて来た内、池上、富田、森山、西山といふ四人、つか／＼と側へ来り、いきなり池上某が後ろから組付と、酔ては居てもさすが海賀で、後ろ様に手を差のべ、池上の胸元引攫みヤツといふと、

背負投に船の真中へ投出した、其間に富田左りの方から、やにはに攫みかゝつて来るのを、左りの手で引抱は是も同じく取て投た、すると續いて森山、西山前後から組付て来るを立上り様、足を擧て先づ森山をどうと蹴倒し片手を以て西山を、エイと一當めてた其間に、以前投られたる、池上、富田起上り、又前後から組でかゝる、又森山、西山も足と手とへからみ付、五人一所に倒れる處へ十人ばかり折重なつて、どう／＼ぐる／＼巻に繩をかけ、皆で擔いで細島の土へ持て行て仕舞ました、是から大方皆な掛りで殺したのでございませうが、そこは誰も見た者が無い、此船中の立廻りは船頭が跡で話した所から、こう職す事も出来ませぬけれど、島での事を知て居る者は、一人でもございませぬ、こいふのは是からのお話し、さて一同は是で先づよかつたを、皆其所を山帆致すと、時の工合でございましたらうか、遽かに大風吹起り船はグル／＼一つ所を廻つて、後へも先へも参りませぬ、是は不可とさわぐ内雨も盛んに降て来る、さうこうする内日も暮れたで真黒闇で咫尺も見えん「ヤ是は少し變だぞ全く海

賀の怨念だらうせ」といつて居る内富田と池上が「ヤ宮門怨だな」なるほど海賀出て来たわへ」といふや否若へでも當つたか、ごつ／＼がら／＼といふ聲と俱に船は四つに打砕け、乗込で居た十有餘人盡く海底に溺れ死したは、全たく海賀が怨念の致す所るか、僅かに其内船頭だけが漸く細島へ遊ぎ歸つて、土地の者に此話しを致しましたから、土地の者も大いに驚ろき早速そこらを探しますと、大きな立木に縛り付た一の死骸がございますから、改めて見ると其腹巻に、筑前秋月藩海賀宮門直求、と姓名が記して有たから早速これを其所ろに葬り、かういふエライ人だから、何か願かけもきくであらうと、雖となくいひ初め後には一の祠を建て、直求明神といふ名をつけ年々祭を致しますが、只今以て其祠は現在致して居るそうにございます、さて生残つた船頭は漸く外の船へ頼んで乗り、日を経て薩摩へ歸つて参りますと、かの田中を載た船は早先達て歸つて居りますから、色々其事を物語り「イヤ實に凄いな事であつた」と其怪談を致しますと、柴山兄弟顔色を變へ思はずぶ／＼と身震ひして「勇士の一

念といふものは其位の事があるかも知ん」と人間が正直だけに一寸心經にさわりました處ろ、一人風邪にかゝると一人負傷をするといふやうに、ちよい／＼顔ふ者が出来ましたで兄弟愈々氣にしはじめました。

(其七) 怨念の祟り

世に怪物だの怨靈だのといふ類は有るべき譯の物でなく、皆それは其人の神經に、ア一悪い事をしたな、と感じる處から、其感じが空気に映つて、ぼうと見える様な氣がするので有る、とかやうに説が定まりましたが、全く是はさうでございませう、然しさう爲て来る所が、不思議といへば不思議にもなります、柴山龍五郎が田中河内助を殺した事、何分神經にさわつたと見わまして、よらぶらと病付たが始終悪いといふ譯ではない、誠に逸者な時もあるのです、何か一つ事を仕様と心掛ると病が出る、元來勇氣の薩州男子には是が何よりつらうございます、殊に弟の忠次と來ては發狂だから堪りません、折々どうも飛た事を

やる、其内龍五郎又病初めて風疾の様な工合になり、手足がろく／＼利なくなつたで、ぢり／＼致して居りますと、忠次ぶら／＼やつて参つたが、忽ち眼を瞶らして「是柴山よく聞けよ、行く可き所もいくらもあるに、わざ／＼薩州迄行くといつたは薩州男子が義侠の心を十分此方で信じたからだ、士は己を知る者の爲めに命を差出すといふ位なもの、己も其位な事は心得て居るに、それを遂に殺すといふは何だといふ不義な事だ、因て今日は先づ弟の方を殺し、己の方はわざと殺さずに置て、長く此世に苦しませてやる」といひ乍らきらりと抜たから「ヤア田中殿勘辨せい、マア其刀は收めてくれ」と止めやうとしたが手が利ないで「嗚呼残念な」といつて居る内、忠次の刀は自分の脇腹へぐさど突込み「サ、さうしておいで咽喉を切たらう」といふ聲諸共、アツツリ吭を鋭切て前へどうと倒れ、つひに其まゝとなつて仕舞ました、龍五郎大に驚いたが、どうも早仕方がない是から段々年も立ち、御維新と相なりましたが、矢張り龍が利ないので、天晴武勇を持ながら、つひに世の中へ出る事もならず、鬱々として暮し

居るで東京へでも出て見やうと出附して見たが、別にいゝ事もなく不平の餘り、山岡鐵舟先生の所などへ参つて、厄介になりつゝさんげ話しを致したさうにございます、末路はどう爲て終りましたか、いづれつまらなく終つて仕舞たので有りませう、編者少年の頃山岡先生の所へ度々参つては、其話しを聞ましてございますから、是は至くのお話しに相違ありません、イヤ永々かゝりました寺田屋騒動、漸くかたが付まして、是から本題の大和事件と爲ります、シテ見れば是迄の所ろは誠に餘けいな事の様でありますが、此勝れが即ち大和の一擧と爲たのでありますから、先づサツト述來つたので御座います。

さて寺田屋の一件スツカリ打破れ、有志の徒多く横死して仕舞ましたもへ道々後れて上り來つた薩藩士等、大に皆失望致し、是はトウモ面白からん事だ、然し其内には何か亦愉快の事も出來やう、マアそれ迄の休み仕事に、断好でも仕ながら待て居やうと、サアそれから半年ばかりの間は、彼地でも断好、此地でも断殺と、毎日人殺しが流行たと申す事で御座います、そこで心ある頭分の人

が寄つて「只無益に一人や二人斬て居たつて何にも成ん、それよりは一大快挙をして、十分に志す所をやるがよい」「サ其快舉が無いものだからア、もなるので、最も關殺の大將も今居ないもへ、そろく大舉にかゝつても宜しからう」と此で急に大和一擧を初めたのであります、テ此關殺の大將と云話が少し御座います、本文に餘り關係は無いが、大に世の中を驚ろかした所と、櫻田一件に少し續いて居りますから、彼の補遣と思召せば宜いのです。

(其八) 斬奸の計畫

關殺の大將斬奸の名人など、云名を取たるは何人だと申ますれば、薩摩の藩士で田中新兵衛と云人で云います、此人中々の豪傑で有たのだが、なせそんなに關殺を初めたと云と、最初櫻田へ出たかつた處、出損じて残念に思ひ居ると、かの櫻田主謀の一人たる、有村雄介兼武より、言れたことに感激して初めたのです、少々御話は跡へ戻りますが、有村雄介の末路から申上ませう、さて彼有

村雄介に於ては、伏見の邸より藩の役人に圍まれ、國元へ差送りと相なりました時、途中で考へ付ましたは是で國へ往けば直に刑せられる、其位なら今一度逃て見様と、つひに道中から出奔に及び諸方より付て見た處、中々もう嚴重で、至る所危ふくなりました也へ此で自分も覺悟に及び、然ば早是非に及ばん、又捕へられて辱を見るより、潔く割腹して仕舞つた方がよか、然しあとくの事だけは、誰かに話しておかうものと、かやう心附ました也へ、平生子分の如く致しおいた、田中新兵衛と云者の家へ、そつと忍でやつて参り「田中どうだ内に居るか」「やは有村先生、今頃此等へは危いぢやありませんか」「ウー實は己共もの、とても志は遂られんにより、何處ぞで割腹せうと思ふ、附ては頼でおく事がある、外でもなかな安政以來、多くの豪傑を罪に處したは、第一が井伊大老だから、是は舍弟等にやらして仕舞たが、京都の方で諸名士を陥れた、島田左近や長野主膳、又其下に使はれた奴等、皆殺しにして諸名士に手向やうと思つて居たが、どうもそこ迄手が届かん、テ貴様上京して、此仕事をやつてくれ」

「よかく己共の大好な事、必づ皆やつて仕舞」
 「そうかそれでは何分願ひぞ」と言
 て此で雄介は、出水郷鯖淵村と申す所へ参り、そこで切腹して仕舞ました、是
 から新兵衛奮發して、京都に關殺の流行を初めたのでムいます。
 御話變て是より前、かの安政の大獄に彦根方の爲め大働きを爲したる、高田左
 近、長野主膳、宇津木六之丞の三人は、首尾よく諸名士を捕へましたる所から、
 大に其勢を得て、長野宇津木は掃部頭殿より、百石づゝの加増を賜はり、島田
 は九條關白より、莫大の御褒美金をいたゞき、あまつさへ左兵衛大尉と云ふ、
 大層巾の利く役名を賜はり、從て其下に就て働きました、渡邊金三郎、大河原
 十藏、森孫六など等も、それぐ褒美を賜はりまして、愈々暴威を振て居りま
 した、其内にも島田に於ては關白殿の側に付て居る所より、賭方からの賄賂も
 並大抵の事ではなく、頗る有福の身と相成り、金びらを切る事夥い、或日の事
 で又例の手先に使う、文吉と云男を連まして、鴨川べりの茶屋へ参り、裏りに
 飲で居りますと、隣座敷から一寸出た藝妓、見ると天晴美人でありました故「チ

イ、文吉、人間と云者は妙な者だ、此間迄は水戸と彦根の争ひに、片方へツ
 と肩を入れて居たので、酒も女も忘れて願で居たが、さてこう泰平に爲て仕舞う
 と、又酒も飲度なるし、いゝ女も欲くなるな「妙な事を御言出しですが、何か
 御目に當つたのですかへ」「御目に當るの當らないのつて、直に隣りに居るぢや
 ヤア無いか」「エー彼ですか彼は其、君香と云て、當時流行の品ですがね、中々
 ちつとやそつとでは、自由にどうも爲りませんよ、旦那御恩召があるのですか」
 「ちつとやそつとでは行くまいが、澤山出せば成るのだらう、千両迄なら一つ出
 して、自分の者に仕たいものだ」「千両御出しに爲やアどうか行くでせう、ぢや
 ア一つ話して見ませうか」ト是から文吉が、其君香を抱へて居る新町の三升屋
 と云へ参つて、早速これを掛合つけました。

(其九) 奸人の大膽

サアこうなると三升屋の方も、足元を見て中々に氣強く「へー二千兩なら手を

打ちませうが、二千兩下では何分どうも」と随分愁の張た辭です、所が此地も目明し文吉だ「そんな事を言ないで今少し引ねへ、引なけりりヤ此方にも了簡がある」と強面に談じつけましたので、此人に憎まれては大變だと、さすが三升屋が怖く爲たと見へ、とう／＼千八百兩で直が出来、君香つひに島田の持物となりました、此時分の千八百兩と申ては、今の相場に直せば大變なもので、此頃朝廷の御暮し向など申すものは、乍恐餘ほどひどいもので有た御様子或時祇園祭禮の形に製へた、人形を御覽に爲た節御慰みがてらに御買上遊ばしたいと仰せ出されました處、御物入りが多いから相成りませんと、幕府から御止め申して仕舞たと云位、然るに今公卿衆の家來の島田ばかりは、藝妓一人を引せるのに忽ち千八百兩擲たと云は、實に大變違つた話し、是でもう島田の黨が、どの位な私を爲して居たかと云は、大抵想像のつく位なものでムいませう、さてそこで島田は大に喜び、木屋町二條上ると云所に小奇麗な妾宅を新築致し、始終來ては遊で居りました、然る處其榮華も夢の如く、かの櫻田一件以來、

と世の中が變つて参りましたもへ、こりや少し氣を付なければならんと、内々恐れて居りますと、ぶらりとやつて來たは長野主膳で、「此頃はひどく鬱いで居る様子だが、そんな弱い事では如何、何と今一度奮發して、猶此頃當地へ進入て來た、有志家慷慨家など云双原を片端から引捕へてやらう、それが何より宗觀院様への追善に爲るで有う」と言れた時はさすがの島田も、其長野が度胸の深さが、何處迄あるのだから數の知らないに、あきれ果てたと申す事、然し中々世の中もさうは間屋でおろさない、其次第は是から追々述立ますが、島田此時少しく考へて居つて「そりや少し先づ待た方がよい、江戸の方の様子を聞くのに、此正月安藤殿も、切付られた一件から、とう／＼けちが付て押込と爲り、あとを嗣ぐほどの老中は出ないと云事、殊に此京都の地へは、水戸人の代りでもあるまいが、薩州が大分入込で居るから、めつたに今手出しは出來ない、少し引込で様子を伺ひ、隙を見て又初めたらどうヤ」成程それならそれでもいい、然らばこうもう事に仕様、此には貴殿が居れるから、萬事差支へのある氣づかひ無

し、國の方には又宇津木が居るから、是も先づ心配いらす、只此京都へどんな
奴が這入るか、夫を認める者がなくては成ん、拙者大津に止宿して居て、双方
の取次兼見張りを勤めやう」「夫なら大に都合がい」と此で兩人手を分ち、長
野は大津に陣を張り、島田は不相變京都に居たが、少しはけんのんに思ふ所か
ら、餘り外出致しませずに、九條殿の御邸へ引籠り、用心致して居りましたゆ
へ之を窺ふ者と雖も、暫く控へて居りました、所へてうご上て来たのが、即ち
前申す田中新兵衛、助力として一所に付て居るのは、井上孫八郎、志々目蔵吉
と云二人、テ是等が都へ這入るを、素早く認めれた長野主膳、ソラ怪い奴がやつ
て来たぞと、早速島田方へ使を出し、薩藩が二三人這入たから用心被爲と注意
に及だ、島田之を開て愈々驚たがまた中々の曲者でムいますから「よしそれな
らば此方はまた、一つ敵の裏を欠てくれやうか」と伏見通ひの船に乗て、わざ
わざ伏見へと参りましたは、どういふ計策でムいませうか。

(其十) 十河の盡力

こちらは例の田中新兵衛等、どうかして島田を討て仕舞度と、頻りに様子伺
て居ると、其頃矢張り有志の開へ高かつた、豊後の人で十河彌右衛門と云者が
ある、是が或日尋ね参て「ヤ田中殿貴公は島田を探して居るそふだが、島田は
此に居りはせんぞ」「そうかデは何處に居るのだ」「さればさ、此間中拙者は伏見
に居たが、二三日前此地へ歸て来た、其時此地の方から出た船が、行違ひに豊
後橋へ着くと、其船から出る御客の中に島田の顔がたしかに見へた、島田の顔
と言つても婦人ぢやア無いよ」「冗談言ちヤアかない、然し何しろ、デハ伏見へ行
て見様」と是から田中は直ぐ伏見へ出かけ、頻りに探索致しましたが、どうし
ても見付らない、見付らない筈是が島田の計策なので、其頃多くの人が乗る、
伏見通ひの船へわざく乗て、伏見へ行た事を多くの人に知らせ、そうして其
夜の内にそつと又京都へ歸て来て居る、是で己が伏見へ行たと云評判を立させ

れば、己を窺て居る薩藩の奴等きつと、伏見へ探しに行くに違ひない、其間此地で十分に手配りし、奴等が探し飽て歸つて来る所を、召捕へてくれやうと、如此計策を構へましたは、實に大膽不敵な者でういます、さて此島田と云男も、才氣は十分有た者だから、此等でツ、と心を改め、身を引く様な計畫をしたならば、或は助つたかも知れませんが、何分慈心が勝て居るので、今少し仕事をして又儲けやうと再び手を出しかけたのが、矢張り身の破滅を招く原因でういましたらう、そこでかの十河彌右衛門は、田中を勸めて伏見へやつた後、猶いろく一周旋して居つたが、或日の事で外の歸りに、二條邊をぶら／＼歩きながら、今日あたりはもう田中が、島田の首を取ら頃だらうなどと考へながらやつて来た時、不思議にかつた一軒の家、イヤ此家はシカ島田めが、日頃愛して居る妾の内だごんな様子だかと思ふ、探の隙間から一寸窺くと、こはそも如何に庭の隅で、植木に水をかけて居るは、正しく島田左兵衛大尉だからヤ島田は此に居るぞ、して見るといつの間にか、伏見から

此地に歸て来て居るのだ、大方田中はそれ共不知、矢張り彼地を尋ねて居るのだらう、それ共もう戻て居るか知んど、サア心配に爲り初めたから、早速其足のまゝで、田中のいつも宿る内へ、大急ぎで来て見ると、田中新兵衛は今歸つたと云様な體で、奥の坐敷で膳を引寄せ、井上志々目を相手とし、一杯やつて居る所だから「ヤ田中氏歸られたか、島田は彼地に居なかつたらう」「居なかつたらうぢヤア無いで、君が居ると言から行て見たのだ、メがどうしても向には居ないから、マア一度此地へ歸て、君と相談しやうと考へ、今飯を食てから君の所へ、押掛やうと思つて居たのだ」「サ其事で實は何だ、謝罪しやうと思つて尋ねて来たのだ、然し先づ其償ひもする、全く島田の奸賊め、此方の計畫の裏を搦て、何か企てるつもりだつたのだらうが、まだそこ迄手が届かないのらしい實は今彼奴の姿を見て、不意と胸に浮だから、是は此地も早くしなければ、又前年の水戸連の様に計られると思つたので、大急ぎにやつて来た、即ち例の妾宅に居るのさ」「さうかそれなら今直ぐに行て、首を土産に持て来やう」「何斬て

仕舞さへすれば、首の土産なんぞはいらない、拙者は又是から外に用もあるで、明日もつくり其話を聞う」と十河は是で別れました、以上皆編者が少年の頃十河が直に話しましたのを、聞覺へておきましたのですから大抵間違は無いつもり、ついでに申し上げておきますが、田中は是より二三年後故有て切腹して仕舞ました、其主意は未だによく分りませんが、十河は編者が少年の頃迄生きて居て、最初は美任官でゐましたが、晩年非威に爲て終つた義に覺へて居ります。

(其十一) 奸人の末路

島田左兵衛斬殺一件と云は、色々な物に出て居る事、大道徳の看判にも見る位、名高い事で御座いますが、其前後の委しき所は餘り不傳、且其殺した方の姓名は誰も知んと見へ、只浪士とばかり書てある様な譯、因て今此に委しく申します、即ち其擔當人は田中新兵衛、同行者は志々目蔵吉、井上孫八郎、文久二年七月廿一日の夕方の事で、右三人は十河に教へられた通り、塚の間から窺い

て見ますと、椽側の所へ蒲席を敷して、島田は湯上りと云體裁、浴衣一枚に細帯を巻き、焼酎か何かを、獨りちびく飲で居る様子、其脇に奇麗な大形の單衣を着て、絹張の小團扇を持って居ります一人の眞白な女は、即ち彼酒香と云者で御座いませう「イヤ居るくたしかに居る、然し此からは通入れない表へ廻つて尋常に這入う」「マアく静にせい、悟られて逃しては詰らん」「宜しい待て、僕が關東辭で旨くやるからと、井上孫八先に立て、妾宅の表にと廻り、「アイ御免よ、少し頼み申す」と言と奥の方から一人の下女出て参りますを見て「ア、拙者共は島田様にナ、是非御目にかゝらなければ成ん用が有て、御邸の方へ伺つたらば、此方にだと云事で、わざく参上致した様な譯、どうか取次を頼みます」「へい貴下様は何と御仰方で」「イヤさう言へば分る」「アは少々御待被遊まして」ト女中は奥へ参ると、最前からの應接が、手に取る様に聞へますで、ハテ何者が尋ねて来たかと、島田が考へて居る處へ、女中が参つて其通り取次ぐから「さうして何云風を致して居るか」「へい、エロー剛らしい御方です、

「夫は少し否な客だな」と立上る處へ早上つて来た島田、見るより吃驚して、やにはに庭へ飛で下りる、君香はブル／＼震へて臺所の方へ逃込で仕舞。其内此方の三人は早既に引抜で、奸賊島田逃さんぞよと、同く庭へ飛下りたから、島田は急いで堀へ上り、忽ち向うへ乗越た様子、一體島田と云男、口の叙は中々達者で、餘多の葉傑をも殺しましたが、尋常に立合など云事は、一向出来る者で無いから、あとをも見ずに逃出して、河原の所迄やつて参り、一寸後ろを振向と、もう間近に三人が逼つた、是はと思つたが橋は無し、仕方が無いから川の中へ、ザブリつと飛込所を、追附たる田中新兵衛、切先下りに切附た一刀、肩先へザツクと行たから、驚ろいて岸の杭へ操まるを、得たりと田中が引すり上げると、井上孫八馳來つて腰へ切附た、それでも未だ逃げる心か、ヒエロ／＼と向うへ駆け出すを、又もや志々目献吉が、突出したる一刀に、腹を十分貫かれて、トウと倒れたまゝ、早起つ事が出来ません、そこで三人莞爾と笑ひ「サア是を何處かへ持て行て、隠物に仕様ぢやないか」「隠すなら矢張り四

條河原が佳からう」と是から御苦勞様にも、四條迄持て参り、青竹を切て首を貫き、安政五年以來餘多の名士を陥れた次第、委しく罪狀書の様に認めた木札を、其脇に建てました也へ、翌日に爲て皆之を見附、四條河原の鉄門と言て、其頃大層評判で有たさうに御座います、さて是が手初めで、かの梅田源次郎の召捕に功有た目明吉文は固よりの事、頼三樹三郎や、小林民部大輔などに纏をかけた渡邊金三郎、大河原重藏、森孫六などと、皆盛く殺されました、又彼長野の妾萩野、是はツツト後に隠し物にされましたが、ついで也へ一寸此に申上げておきます。

(其十二) 同上

島田以下数人の殺されましたより、サアどうも大變に間殺が流行り、昨日向横町に生首が轉げて居たといへば、今日は此地の辻に片腕が落ちて居た杯と云様な次第、春風匂ふ花の都と言た所が、血腥い風の吹く修羅の都と爲て仕舞ました、

然し奇體だつたは長野主膳が大津に居ると云事を、誰も知た者が無つたか、此人だけ暫らく窺はれずに居りましたが、島田が此度殺されたと云事を聞て、夫では最早此には居れんと、さすがの主膳も始めて恐れを懐き、早速彦根に逃歸り、宇津木六之丞に面會致し「さて御同前に困つたね、先度水戸武士の京都へ集つた時は、堂々と事をやつて居たから、むやみに闇殺などは仕なかつたが、今度這入込で来た薩摩武士は、やたら闇殺と来るから油断が爲ん、且彼頃は此方にも、大隈云親玉が有たので、所司代町奉行などが働いてくれたけれど、今度中は左様に參らん」と言ふと宇津木も歎息に及び「成程世の中は何時も同じでは居ない、此様子では吾々共が、榮華も大抵是で終りだらう」と兩人も斷念して居ると、果して此頃彦根藩の家老達、段々と評議に及びまして、先大殿様が彼様に、世間の恨を御受なされたも、皆此宇津木と長野の仕業だから、どうでも彼等を罪さなければ、此後諸藩へ顔出しが出来んと、段々次第を取調へ、此年八月の末に至り、先づ長野主膳をば、牢屋敷外の廣場へ引出し、豊多共の

手にかけて、つひに打首と致しました、奸人とは申しながら、亦一個の榮傑で御座いますから其時少しも恐るゝ體なく、落附拂つて最期を遂げたと申します、間もなく亦宇津木六之丞も、同く死罪と云事に相成り、兩人共其死骸は取捨られる事と爲た處、宇津木は重役の家柄でもあります也へ、其後引取て葬つた者も出来ましたが、長野の方は成り上りで雖も親類と云ふ者も無いので、空く處捨場すてばの片隅で、埋められたと申しますが、是も亦多くの名士を陥れた、其罪惡の報ひと思へば、亦是非も無い次第、此主膳等の爲めに陥された方の、頼三樹三郎などに至ては、其骨迄も人が祭つたと云ふに、此主膳の末は如何で御座います、大層な違ひでは御座いませんか、右の如く故彦根黨の皆取れて仕舞ましたるより、是も偏へに斬奸の功能だらうと益々殺人が流行します也へ、心ある所の頭分等ははごうも無益な事だと、可成鎮撫に心を盡して居る内、又半年ばかりは夢の如く過ぎて、文久三年夏の末と爲たる時、かの寺田屋のさわぎの節、二階に居たので決闘に出なかつた、中國

の有志藤本津之助、土州の浪士で吉村寅太郎、或日一つ所に出遇ひましたから「ヤ君とは去年寺田屋で遇たぎり、久しく御眼にかゝらなかつたな」サ彼時の一件は、餘り詰らなく破れたでないか」「夫と云も未だ本心の知れなかつた和泉殿を、餘り信仰し過たからだ」「さうだ共如何にも未だよく遇た事の無い、大名を大將に仕様としたは、少し迂濶を免がれなかつた、夫よりは誰か公卿の内で氣概のある方を見附、夫を大將に推立て、吾々共が指揮をすれば、却て面白い事が出来やう」と藤本が始めて持論の説を出すと、吉村も大に賛成致し「成程我輩共が思ふ通りにして、他人の箝制を受けん方が佳い」と話し込で居る處へ藤本の書生で福浦元吉と云男、表の方より参り、只今かやうの名の人が、藤本様は此方ですかと是を出しまして御座います」と半紙に書た名刺を見せる、見ると、松本謙三郎としてある「ヤよい人が来た、早速是へ通してくれ」と又此へ一人の豪傑が参る、所謂大和の三總裁會合の一席。

(其十三)

吉村と那須

大和一擧の三總裁が計らずも出遇と成る處ろを伺がひましたで是から直ちに一擧の旗揚でございしますが、さう眞直にやつて行てはあつたなふございすも一寸此處で此三人、及び之に次ぐ處ろの豪傑傳を、二三席伺ふ事と致してそれから旗揚に取り掛りませう、さて此三總裁の中で最も名高い豪傑は吉村寅太郎重郷であります、一體本陣に在て軍配を取り謀を帷帳の中に運すのは藤本、松本の方でございしますが、先自ら陣頭に進んで三軍の勇士を勵さうといふのは此吉村に限りました、それも或一説では吉村といふ男は一方の頭にはよいが大將といふ大きい格ではなかつたなど、いふ人もございすけれど、とも角剛勇には相違ございせん、此人元は土州の郷士で、名主を勤めた者の子でございす、幼年の頃より武藝を好み、天晴一箇の先生様となりましたなれど、文學も少し出来なくては人に長たる譯に行んと、同藩の間崎哲馬に就き學問を

も致しました、此間崎といふは名高い先生で、土州藩の薩長と並ぶ様になつたは、此人の方が大層にあるさうで、九段の靖國神社祭神の中、最も初めに此人の名のごさいますのが、其エライ證據でございませう、さて吉村は此人の處ろで、頻りに勉強して居りますと、此處に妙なお話しが出来ました、此吉村の居る橋原村の百姓に、源右衛門といふ男がございしましたが、或時知合ひの者の儀に招かれ、終日大層御馳走になり、夜になつてから歸る事と致し、歸家の作男と二人つれ立ち、橋原村の方へ歸つて参りますと、もうすつかり日は暮れて居るので、作男に借た提灯をつけさせ、頻りといそいでやつて参りましたが、一體此男ひどい臆病なので、中々夜中歩けるのではないが、酒の勢ひと速を依頼にして、怖々ながら参りましたのでオイ／＼さう先へ行てはいけな、成丈一緒に歩いてくれ、どうも此長い路で一人も人に遇ないといふは、随分凄いなア」人う「さうよ源右衛門殿のいふ通り、此あんばいぢやア人間には遇ないなア」人間に遇ないといへば何か外の者には遇へるかへ「ヤ遇へるかどうだか知んねへ

が、此先の原の中では時々天狗を見る人があるさよ「こら／＼そんな怖い冗談はいひなさんなよ、若し天狗に遇たらどうするへ」「どうもこらもねへ先づ逃るばかりよ」「逃る位なら黙つて往きねへ、話しをするとは怖くならア」と源右衛門怖いから小さくなつて、かの原の處ろへ通りかゝりますと、行手は茫々たる草生茂り右の方はズツと雑木林がある、其林から斜に道が有て向ふの山へ登るやうになつて居ります、此處へ來ると作男が「オイ／＼源右衛門殿あの山から天狗が出るのださよ、さういへば何だか見ゆるやうだせ」といはれて又怖い者見たさに源右衛門、ひよいと見ると、何だか斯う白い物が林の間からひら／＼見ゆる、歩くのでも無く飛ぶのでもなく、先づどつちかさいへば飛ぶ様な體、是は變だと思つて居る内、ひよいと消て仕舞ましたから「ヤア是は愈々妙だぞ、近くへ出てくれなければよいが」といつて居る内、何處から出たか、より向く後へすつくと出た、源右衛門よせばよいに又すかして一寸のぞくと、身の丈は六七尺餘、鼻の高い事一尺計り、身に白の淨衣を着け、足に一本齒の下駄を

履き、三四間もあらうといふ矛を突立て、ぬつと其處うへあらはれたので「キヤツ」といって源右衛門ごさり倒れると、其まゝに忽ち氣絶して仕舞た、作男は一生懸命跡をも見ずどんく逃て村へ歸り「サア大變今かうくで天狗に出られた、定めし今頃は源右衛門殿大方引裂れて仕舞たらう」といふから皆驚いて、そりやアどうも大變だ、何しろ捨てもおけぬわへと、一同に大さわぎと相なりました、そこで是から吉村寅太郎が、よしそんなら己が一番天狗退治に出かけやうと、立出るといふ一席は次回のお楽しみ。

(其十四) 同上

源右衛門殿が天狗に食れたさうだ、それは早大變だと人々大いにさわいで居ります處ろへ、源右衛門ふらりと歸つて来たから、作男は早くも見附て「ヤ源右衛門殿歸つたな、それ共又幽霊か」「幽霊ちやアねへ生返つたいよ、實は己氣絶しちまつてね、何の事も知らなかつたが、誰か知んねへが、酒の様な物を飲し

てくれた人があつて、それで漸やく氣が付たのよ、大方天狗の親方め一旦驚ろかしは仕たものよ、氣の毒でも思つたかして、靈藥か何かをくれたんだんべい「ウー成程さうかも知んねへ、天狗も中々奇特な物だ」なごつまらぬ評判が立ますと、之を聞た吉村寅太郎、天狗なごいふは當にならんが、或ひは格闘の所爲か、又は盜賊なんぞでもあらうか、よし一つ見届けてやらうと、源右衛門によく其場所を聞き、日暮頃から出かけまして、例の原と森の間に参り、たい待て居るも退屈だと、頼りに詩などを考へて居て、思はず天狗の方を忘れて居ると、突然ばたくと音が致しますから、ひよいと見ると、向ふの處ろに白い大きな物が飛で参るから、ヤ是だなと思ふまゝ、鐵扇を以て飛で出で一打に致さうとすると、ひらりとかはしたかの怪物、三間餘りの槍を取て、ピウと突て参りましたも、吉村すかさず鐵扇投捨て大リ抜てはつしと拂ひ、目を定めてキツと見ると、槍は槍だがたんぼ槍だから「待てく少し待て怪物でもなく盜賊でもないな」「是はけしからん、何だつて左様な言を」「ヤ先づ槍を引たま

へ、實は少し譯がある」と一伍一什を働語り「かやうな事で見届に参った時、イヤまだ姓名を申さなかつた、拙者は吉村寅太郎といふ者」といふと、かの天狗先生「イヤ左様でござつたか、どうもそれは可笑なお話し、然らば拙者の事をお話し申さう、マアそこへ腰をかけられい、拙者は此向ふの津野郷に居る、那須真吾重民と申す者でござるが、高知御城下の日根野先生方へ参つて、毎日武藝を修行致します處ろが、御存知の通り津野から高知迄は、十何里とござるのに、稽古を仕舞て又歸つて参るもゑ、どうしても日が暮れますで」それでは廿餘里日返りなされて、其上に又稽古されるのか、イヤどうも恐入つた、然し甚だ失禮ながら、其出立の異様なるは少しおかしく思ひますがな「イヤへ是は其簡略を主として、道具を始終着たまへで居る、さうして其上へ代りの稽古着を引かけて居りますので、遠くから見ますと、白くひらく見わたのでござらうハ、ハ、ハ、又此一本齒の下駄かな、是は早く歩くに妙でござるから手前手製に作りました、殊に拙者の顔色は御覽の如く鼻高もゑ、天狗と見たは無理もご

ざらんで」と話しを聞て見れば、さまで不思議な事もないから、吉村も大いに打笑ひ、其晩は直立別れ、是から二三度往復などして、色々談論をして見た處ろ、よく論が合ひますもゑ、つひに非常な別惡と相成りました、すると其内京都の方に、色々容易ならぬ事が出来たで、間崎先生の命を受け、吉村寅太郎上京となつたが、少しあとの事に氣がよりもあるから、乃はち那須真吾を呼んで、くれぐれあとの事を托し、上方へと参ります、此處であとへのこつた那須真吾よし此處で一つ腕前を顯はし、それから緩りと上つて行くと、是から那須が頼好の一席次に申し上ると致しませう。

(其十五) 同上

吉村が立退く時、跡々の事を頼だといふは、此頃土州藩の重役に、吉田元吉といふ者がありましたが、是が非常の才子でございまして、辯舌業に勝れて居るといふ處ろから、願ぶる君公のお氣に入て居ります、是で勤王の心でもあらう

ものなら、それこそ立派な名が出るのでございませうが、惜いかな此人佐
 藤藤で、ひどく勤王の黨を悪み、藤藤家は國境より成べく出さぬ様に工夫を致
 し、間を見ては皆召捕へ、半に入れて仕舞ふといふ巧み、ア吉村等はどうかし
 て之を斬て往たいのだが、京都の事をいそぎますから、其事を委細那須に任し
 たので、さうして其身は大急ぎで支度に及び、出奔しやうと考へた、たゞ困
 のは國境の處ろに、川口の番所と云があつて此處にあるは皆吉田の黨、嚴重に
 相固めて居る、此處をどうか詐つて通つて仕舞へば何の事もないのだが、此處
 を通り越す迄が面倒なので、吉村頼りに考へて居たが、大膽にも一の計策を思
 ひ付き、僞使者とならうと決しました、此時分はとうと土州藩と備前の池田侯
 との間が、極親しい事でありました、折々お使者の往復がございませう、此
 ほども何か御用筋でお使者が出るといふ話しもある、川口番所の者共もお使者の
 通る其前後は、みだりの往來は許されんなどいふ事やかましい事をいつて居ります
 と、或日供揃いかめしく槍持篋箱を先に立た一組の士参りました、そらお

使者のお通りだと、皆々そこへ出迎へますと、大膽にも吉村寅太郎怒々と通り
 かゝりますから「エー貴下は備前様へのお使者で」如何にもお使者仰せ付られ
 た吉村寅太郎と申す者でござる「へー御苦勞様でございませう、と皆々頭を下る間
 に、づん／＼通つて仕舞ましたは、全たく誠のお使者の先を越す詐りの計策で
 ございませう、それから二三日立て全たくのお使者が來ると、番所役人驚いて其
 話しを致しました、サア是から大さわざになり、愈々嚴しく相成りました、
 嚴しくなつたに就て那須真吾は、平生親しく交はります處ろの安國嘉助、大石
 剛藏といふ二人を呼んで「さて兩君先んずる時は人を制し、後るれば人に制せ
 らるといふが、かの奸臣吉田元吉をあのまゝに差置ては、必らず諸君の身に及
 ぶもある、斬て仕舞ふと思ふが如何でござらう」至極宜しい、殊に妙なのは通奴
 いつ迄も事務を取て居るで「成程退出はいつでも夜もある、今夜是非やつて仕舞
 ませう」それ宜らう」と一決に及び、待構へて居りました、此方は執政吉田元
 吉、相變らず夜になつて退出、少し雨上りでございませう、傘を持ち高足駄

を履き、若徒一人、提灯持一人をつれ、そろくどやんで参り、帯屋町といふ片側町へかゝりますと、突然として横合より飛で出たる大石圓藏、提灯ばッさり切落すと同時に、安岡嘉助の一刀若徒の肩先を胸打にやツたから、ソツといふと兩人共、雲霞と逃して仕舞、其間に那須真吾重民、奸臣覺悟と一聲かけて後ろから切かけたで、吉田元吉持て居た傘を取直して受たが、とても叶はん傘骨ばらりと切放され、餘れる刀肩口へ来たが、吉田もさすが素傑だ、傘を向ふへ投付てすぐ抜合せナヤリ、と合せる其内、若徒等を追散した大石安岡左右から、ヤ聲をかけて切かゝる、何分吉田も素傑だが三人に一人では叶はない、終に其處へ斬倒され、あへなく命は終りました、三人得たりと刀を收め、悠々と其處を立去り、其翌日さむぎに紛れ、つひに出奔して仕舞ひ、同じく京都へと上ッて参りました、是からが全たくの大和一擧でございます。

(其十六) 松本と池

土州の素傑吉村那須等、京都に上つて参りました處折よくてうど矢張り同素傑で池藏太定勝といふ男、久しく江戸に出て居たのが歸つて来て居ましたもへ、是の周旋で旅宿も定まりますと、池藏太二人に向ひ「さて君達に遇せたい此處に一人の素傑がある、江戸で久しく一所に居て、今度も同道して江戸を出たが、其人の故郷は三河であるから、一寸故郷へ立よるといふので三河路で別れたが、最早ほどなく入京するであらう」「それは一體何人なのだ」「チーまだ姓名をいひなかつた、三州刈谷の人松本謙三郎といふ人さ」と是から其人の話しを初めました、然し是を談話體に書きましては、如何にも面倒になりますから、池に代つて並に此處へ記しませう。

大和三總裁の一人、松本謙三郎は三州刈谷の藩士で、父の代から文武両道を師範致して居りました、謙三郎少年の頃より父に代つて教授を教し、天晴の評判でございしましたが、或時稽古場へ参つて見ると大勢若手が集まつて、頼りに突合て居りますから「是々各々方のやるのは、ほんの一本か二本の勝負を争つて

居るので、太平の時の御前試合に褒美を取うといふにはよいが、彈丸の下をかくいくつて亂軍の中を突立やうといふには、そんな事では行ないな、全く實地に當つた時の用に立てるには、縦横無盡にやらなければ如何」ト是から謙三郎の稽古と來たら其手荒いので皆恐れを爲したと申す事で御座います、其内ある時刈谷藩の若侍等が寄集つて、大試合を催はす事に爲て、謙三郎も早くより出席致し、段々勝負の有た後、自分の番と相爲ると、此時其相手に當つたらは、刈谷藩中で可なり名の聞へた、林九兵衛といふ男、互に一戦して道具を着け、双方共にナンボ鎗を取り、やゝと云ふ聲諸共に、烈しく突合ひ初めたる中、エイと一聲突出したる、謙三郎の一本は、十分に九兵衛の吹輪へ行だが、赤九兵衛の突出す鎗も、謙三郎の面へ來た、スルト如何なるはづみで有ましたか、面の格子が折れた爲め、謙三郎の左の眼、ナンボの先が當つたから堪らん、つひに一眼潰れる事に爲た、そこで九兵衛大に驚ろき「是はどうも飛だ落ち、何卒御容赦被下度、ト詫入るのを謙三郎「イヤ」決して御氣にかけられるな、稽古と

思つて油断した、即ち拙者の過ちで、戦場ならば此位の事は、少しも不思議とするに足らん、詩を一つ作つたから御覽に入れやう、ト書しるした時の末の二句に、『如今何厭斯微恙、武士本來皆戰場』とありますは、どこ迄も眞の戦場を忘れぬと云ふ心、又發句も一つ出來たから、と同く書附たるは、『眼一つけつく芳野の觀花かな』といふ句で、人皆其氣象のよいのには驚ろきあきれたと申す事で御座います。

先づサツトかやうの人でありましたるゆへ武藝では最早及ぶ者がございませぬ、そこで是からは學問專一に仕様と、頻りに勉強致しましたが、何分田舎では不可から、江戸の聖堂といふへ出かけ、十分に修行をして見たいといふ志を起しまして三州刈谷を出立致し、東海道を段々下つて参り、諸所名高い所を觀へば、廻り道をしても巡覽致し、つひに駿州久能山に廻り、あの邊の名所を觀るついで、例の東照宮へと参りました處ろ、如何にも立派でございます所ろから、性質の勤王心より、覺えず憤ほりの心を生じ、此處に一つのお話しがござ

いますが、次に申し上る事と致しませう。

(其十七) 同上

松本謙三郎久能のお宮を見て、覺えず憤はりの心が出たといふは、此人一體勤王の心深く、それに就て北條、足利、徳川等皆憎いと不斷罵し居た位、然るに今其徳川の廟が、斯の如く立派でございますと、もう肝癢が起つて来た處ろ、況てや賽銭箱など大きな體を見て堪り兼ねたか、其處へ突立上り「是家康、世の俗人は物を辨へんから、神佛の如くに其方を尊むが、吾々の眼より見る時は、一向に尊ぶ處ろはない、先づ第一豊臣秀吉から、彼程秀頼の事を顧まれたのもある、如何にしても後見してやらんければ、武士の義理が濟んではないか、然るに之を滅すとは何だ、假令先より事を起したといつても、鎮める心ならば何とでも成うに、いゝ幸ひと大人氣なくも七十餘で、自ら大坂迄出張するとは、心が見えすいて淺ましいぢやアないか、マア〜然し其等の事は臣下同志の事

であるが、朝廷をあの様に小さくして仕舞たは、是其方が違命でないか、マア此罪は洗へまい、いひたい事は幾らもあるが、追て幕府でも覆へした時はよといひ終つて懐中から矢立を取出し、賽銭箱の脇の柱へ、何かさら〜と樂書して、其まゝに立去た、此時向ふに居た宮番の男、をかしいと思つて役人に告げたで、役人二人出て参り「何だそれはマア狂人でもあるまい、大方平田源の和學者でもあるだらう」「何だと樂書をしたと、ハテ何を書たか知ん」と下へ降りて見ると、書てあるのは七言一首だが、仕舞の處ろに「鐵錘入九泉底、知是祖龍埋骨山」といふ二句があるで「マ是は怪しからん昔し秦始皇帝祖龍が、韓の家國を滅た事を憤り、張良が鐵錘を投付た故事がある、今吾も家康へ鐵錘を投付てやりたいが、九泉の底では仕様がな、空しく祖龍の骨を埋めた山だけを見ると譬へた句、悪い云分だ引捕へてやれ」と追かけたが追付なかつたと申す事、探謙三郎は江戸へ参り其頃の大學聖堂へ道入て頻りと勉強致して居りましたが、或日安井息軒先生の處ろへ、質問の爲に参りまして、小座敷の處ろに休息して居

ると、隣り座敷に居ましたは、土州藩士池藏太といふ男、朋輩の瀧川波木戸某などといふ人と頻りに話し込で居る様子瀧川其時木戸に向ひまして「今日君は淺草の本願寺を抜けて来たか」「ウム抜けて来たそれがどうしたの」「イヤあの中の圓照寺といふのに新井白石先生の墓があるといふが君参詣して来たか」「そりや知なかつたで残念した知て居れば拜するのだッけ」といふと藏太スイと進み「君達は白石の御親類か」「何親類でも何でもない」「親類でもなけりやア拜するにも及ばんでないか」「だッて君有名の白石先生、身匹夫より出て筑後守に任じ、つひに將軍家の師範と迄なり、名四方に聞え業百世に傳ふ、實に學者の手本ではないか」「だまれ〜失敬極まる、そこが白石の悪むべき處、それに墓を拜す何のといふから、親類でもあるかと疑ッた」「ひとを白石先生を惡むのは、そりや一體どういふ譯で」「どういふッて先づ彼白石なる者は將軍家の師範役となつた者然らば學ぶ處ろ悉く行はれる地位に立た譯因て此處ぞ多年衰微の皇室を恢復する事を計るかと思へば何ぞ圖らん幕府を以て王號を唱へる様に仕かけたれど、

實に逆臣といッてもいゝ位の其墓を拜するとは何の辭儀が其墓を通りかゝつたならば、杖を以て鞭ッてくれるは」「こりやア驚ろいた暴論だ」「何暴論だと、今一言いッて見たまへ其分には差おかれん」と大變なけんまくで詰かけた様子でございます。

(其十八) 藤本と眞木

此の時、隣座敷に居た松本謙三郎、此様子を見まして、眞どうの議論にならん内、なだめやうと思つたそうで、がらりとそこへ遁入込み「今隣りで伺ひました、面白さうなお話しもある、お仲間入を願ひませう」と是から色々雑談になつたで、つひに議論にもならず仕舞ました、然し其池のいッた論は、己が久能山でいッた論と、結局同じ様な趣意でございますもある、こりや中々話せるわいと、色々話し込で見る處、議論がすッかり合しましたもある、サ勤王の兵を擧げやうと、打連て東海道を上ッて参り、池だけ先へ入京致して、吉村等に先づ此

話しを致す、そこで吉村大に感じ、それは是非其人に遇て見たいと、想像致して居ります内、備前の人藤本津之助に遇た、是が亦非常の豪傑也、其事は話しを致すと、藤本固より久しく江戸に居た也、其松本といふ人はよく知て居る、中々壯んな男だつたといふから、吉村愈々過度思ひ居る内、かの寺田屋一件が破れて、其跡相談をやつて居ると、とうと其松本といふ名刺が来たので、喜んで與へ通しました、是からが第七回の續きになるのでございますから、左様御承知を願ひ上ます。

さて、斯の如く皆京都へ集つて参りましたがまだ、直に事を起すといふ機会に至りません也、それ／＼思ひ／＼の處ろに居を定めました、そこで又、かの吉村より、一足後れて京都に参つた那須真吾重民は、大和の五條に少し知人があつた處ろから、そこへ赴きふら／＼致し居たが、少々醫者の心得があるといふので、先づ取敢へず醫者を初め、どうか／＼か開業して居ました、是ぞ即ち、近日五條に旗揚をする發端となるのでございます、右の如く今度は薩摩な

ごを頼まず、獨立で事を初めやう、そこで大將は誰に仕様といふと、藤本津之助主張して中山侍從忠光卿と極めた、さて此藤本津之助といふは、三總裁中第一の軍師でございます也、一寸其略傳を申し上げます。

此人元は備前東河原村といふ處ろの生れでございます、幼年の頃困窮のまゝ、片山佐兵衛といふ醸酒家の丁稚になり佐吉と唱へて居りましたが、至つて讀書が好でありまして、始終太平記を出しては讀で居る、或日の事、主人佐兵衛が「是々佐吉、又太平記か、問さへありやア讀で居やがる、フン可笑な野郎だな」

「一問の無いのに讀で居りまして、御用を缺たら濟みますまいが、問がありやア讀むのですから、お差支へはなからうと思ひまして」又そんな生意氣な事をいふ、何もわるいといやアしないが、どこがそんな面白いのだ」左様ですな、其中にも楠正成公が、後醍醐天皇に召されて出る處なんぞは、讀で居てもいふ心持でございますな」中々いふ事が變つて居やアがるから可笑い、然し楠といふ人は、とう／＼思ひ通り行かないで、討死をして仕舞たのぢやないか」

エ御當人は空しく討死なされましたけれど、末代迄忠義の靈といはれて、香ばしい名が遺りますれば、マア〜恨はございませんな」ちやア手前もさうなるつもりか」左様ごうかなりたいと思ひますな」手前の饒舌につり返れて、つひうか〜己も饒舌るが、萬一手前も若し立派な大将になつたならば、己の處ろへも顔は出せよ」〜それは戦の事でございませぬから、勝か負るかそれは分りませんが、ごも角一度は大将になつた姿を、お目にかけて、キツと出ます、それが先づ御恩返しで」ハ、アもうなるつもりで居るから可笑い、よしキツと約束したぞ」と互ひに冗談を申し合はしましたが、是が後日實際になりましたは、亦不思議な事でございしました、かやうな風で、未だ丁稚をして居る氣がないから、つひに眼を乞ふて上方へ行き、それから又江戸へ下り、諸方の學者に従つて、頼りと勉強致しました、一體器用な性でございませぬ、何をやつても進みが早く、和漢の學は申すに及ばず、軍學兵法武藝一通り、殊に歌を讀み書をかくといふので、殊の外諸方の氣に入られ、後には高名な先生となりました、書

方の名は鐵寒心史といつて、只今中々高價に賣れます、斯の如く歌だの書だの〜徳で、詳公卿方にも出入致しましたゆゑ、かの中山家へも度々上り、若殿侍從忠光卿とは別て入魂に相成た、そこで先づ此人の發言で、中山公を大将に仕録といふ決議とは相成りました。

(其十九) 同上

大將は中山卿、軍師は藤本、相駢んで松本、戦將は吉村と、大凡決議しました、旗揚の仕方は如何様に仕やうかと、そこは未だ決議に至りませんで居ると、折ふしてうご、學習院出仕眞木和泉守よりして、朝廷へ上書致し、何處へか行幸を仰ぐべしといふ事に爲たので、そんなら十津川邊が極よいと、此處で先々觸と決したのでございませぬ、さて此上書した眞木和泉守といふ人、どういふ人だと申しますれば、是亦非常の大英雄でございませぬが、是は長州一件を申し上でもすれば、其方で傳を述なければなりません、此では傳を略してお

きます、然し只一言申し上げておき度きは、此和泉守といふは筑後久留米の人で
 有名の水天宮の神職でございます、それも朝廷でも篤く思召され、水天宮と
 俱に祭れといつて、紫雲神社といふ御神號を下されました、それも姫嶋町水
 天宮の境内、隅の所に少く社が出来ました、なれど借い説、よく其譯を御存
 知ない方が多いと見ゆ、雖も參詣する様子もなく、庶だらけになつて居るは、
 誠に残念な次第でございます、そこで其上書した意味はといふと、第一は、是
 迄の時勢が違ふから、幕府にばかりお任せになつては不可といふ事、第二は、
 諸國に勤王の士も追々出来るから、此等で斷然幕府を退討爲れといふ事、第三
 は、京都で紛紜しては不可、何處かへ行幸の上御改革爲れといふ事、以上三ヶ
 條の計策をば委しく述立たのでございます、天皇も是を觀覽になりまして、大
 層御感動遊ばさせられ、然らば左様致して見やうか、といふ御内命をお傳へに
 相成りました、此に於て烈士一同大に喜び、それなら何處へ行幸を願はうかと、
 段々評議に及びますと、されば昔より 天皇が行幸に爲て事をお擧爲れるは

敵山より外はない矢張り敵山であらうといふと、藤本津之助進み出で「イヤそ
 れは宜敷ない、昔は敵山に大衆と唱へる坊主の剛者が居たから善つたが、今は
 それがないから何にもならん、それよりは大和十津川郷といふ所は、吉野山と
 高野山との間の郷だが、南朝の頃勤王をした連中の子孫が、皆寄集まつた所の
 跡で、今でも勤王の志さし有る郷士が澤山に居るといふ噂さ、シテ見れば、旗
 揚の場所とするは此十津川に限ると思ふ、さうして天子の行幸を春日山に仰ぐ
 といふ事にしたらば、宜しからうと思ふが如何」といふ説が最もであるから、
 盡どく是に同意しました、さて然らば誰か是を公卿方に通て、御催促申し上げ
 者が必用である、サア此役は誰に仕様と評議區々で居た處、此處に一ツの好機
 會が出来ました、といふのは此一黨の中に、因州の浪人磯前豊といふ男、剛氣
 活潑な人でございます、折角天子より御内命を下されても、事のはか行
 んのは、公卿に因循家が多いから有る、一ツ因循の公卿兩三人打切て、目を
 覺させ様といひ出した、すると同志の中で多辯に名高い飯居簡平といふ男が、

此事を藤井少進といふ人に話すと、少進も同志ではございませうけれど、至つて沈着た人でありませう。今左様な事は不可と、早速飯居同道でやつて参り、オノ磯前氏、足下エライ事をやるさうだが、大事の前の小事で、甚だ疎暴極まるではないか」「誰にそんな事を聞て来たか」「誰でもない。此處に居る飯居氏からさ」「是飯居、なせさうべらく多辯るのだな」といふと飯居も膝立直し「べらべらとは何の事だ、藤井君にいつたに仔細はないぢやないか」「誰なら宜い、誰なら構はんとして居ては、到底破れになる基だ、他言した者は斬るといふ、最初よりの約束もあるに」「面白サア斬られやう、然し只は斬れないぞ」と双方詰寄て来たから、藤井も關係で黙て居られず「何だ僕が聞た事から二人が刺逆つて死ぬ譯か、そんなら僕もお相伴しやう」と物好きなお相伴もあつたもので、同じくそれへツイと進み、刀の柄へ手を掛る、其内磯前飯居の二人は早鯉口くつろげて、既にかうよと見わたした時、傍の障子をカワリと明け、躍り込だる一人の武士、是なん藤本津之助真金、如何なる計ひに致すかは次回。

(其二十) 畏こき内命

不意に出かけた藤本津之助、先づ双方を制し止め「各々此で命を捨るとは、甚だ無益な事で御座らう、それよりは一ツ命を擲ち、誰か公卿方の御邸へ飛込、大和行幸に早く相成るやう、御催促申上ては被下まいか」「成程同じ捨る命ならば其方がよい、然らば三人で骨折て見ませう」と此で三人藤本よりの手紙を受取り、先づ近衛家へと出かけました、テ真木和泉の三策が既に畏こき邊に出て居る所へ、又此で近衛家の賛成がありましたも、つひに御決定と相成て、直ちに其周旋人の御召とは運びました。さて其周旋人とは誰かと申すに、是平野次郎國臣で御座います、全く此大和行幸と云一條、實に畏こき所の御内命を受て、平野次郎が周旋を致したので、それから又其身は但馬に参り、同く但馬へ事を起させるなど、皆平野の磁力から成りました様子、されど其身はあへ無く捕はれて花々しき事も無く終りましたは

如何にも亦た氣の毒なる次第、然し其捕はれたる後、全く自分ひとりの計畫から割出した様に言述て、大切な秘密の事を口外致しませんでしたは、實に先帝へ對し奉りて、天晴無双の大忠節、只此一ヶ條だけでも、厩正四位の値打は十分にあると、或方が話されました、テ其大切な秘密と申すは、即ち辱けなくも極内々の勅命を蒙つた事で、何せよ此秘密を知て居る者は皆死盡して、今は誰も知ん事でありませんが、故有て編者承はり及びましたも、此に纏て申述べませう、テ此頃學習院と云物が有て、地下の身分の者なりとも、志ある者の言は採用され、此に御行館と云も出来、主上此に出御まし、有志者の隠した所を、御聞遊ばさうと云事になりました、すると此へ差出した建白は、例の眞木和泉守が三つの計策、そこで是が御採用に爲り周旋方平野次郎を御行館に御召、因て次郎國臣御椽側の所へまかり出ますと、あたりの者盡く人拂ひと爲り、只二人遺つて居りますは、有名の薬傑學習院取締宮部鼎藏、并に書記藤羽文三郎、正面には御簾が下つて居りますのは、主上御出御と相覺しく、恐れ入

て國臣首を下げるに、上手の袂が左右へ開き、静々と立出ましたる二人の女官千種典侍に富小路典侍、しとやかに座に着かれ、先達て眞木和泉、及び其方共より近衛家を以て申上たる一條、御満足に思召れ、此度大和春日山へ行幸仰せ出さる、就ては御先發として志ある者先づ罷起す由、愈々威威浸からず、御手元より軍用金差遣はされるにより、難有頂戴致されるやう、と云て後ろを振向くと、是を合圖に非藏人の役人六人ばかり、よい、と云て（話した人の辭のまゝ）其處へ持出したのは、繩からげに致したまゝの千兩箱二ツ、次郎國臣ハツト云て又首を垂れたが、恐るゝより仰ぎ「不省なる一个の書生が申立たる事辱けなくも御採納と爲り、かく御恵みにあづかる次第、和泉は固より私共一同心魂に徹して恐入奉りまする、此上は臣等一同身命を懸ち、御皇室の御恢復を謀り可申、萬々一時至らずして、此身捕はれと相成ましたならば、皆浪士共一同が身に引受け、御思召より出でたる事は、決して口外仕りませぬ此段宜敷御上奏願ひ上奉ります」と云て早速引下り、どうして持て出たか其二千兩を二つ

に分け、一つは大和の方へ廻し、一つは但馬の方へ廻すやう、取計らつた申
しますが今日に至ては誰も是を知た者が無い、無い筈で此時立合た宮部照藤は、
其後間もなく空く池田屋に最期を遂げ、千種典侍以下も世を去られましたも
知た者と云ては無い筈で、所が只一人是を知て居た方が有つて分りました、

(其二十一) 五條の評議

平野次郎が辱けなくも、先帝よりの御内命を受けた一件、今日餘り知た人が無い
けれど、只一人是に立合たと云方が、今之を話し傳へておかないならば、つひ
に此美事が世に埋もれて仕舞うで有う、それでは如何にも平野に對して、可憐
事であるからと、わざ／＼編者を招かれて、此一條の話をば委しく聞して被下
た人がある、それは一體誰だといへば、即ち其時取次をされた福羽文三郎、即
ち今の子爵福羽美静君で御坐います、テ次郎に於ては、嘗て同志の者に向け
若芽さす春なからめや神無月、大内山は紅葉しぬとも」と作りて贈りたる歌の

心を十分實地に行なわうと決しました、そこで又此方は大和國五條に参り、醫
者を業とし傍ら劍術を教へ居る那須信吾段々近所の様子を見ると、大分有志家
らしい者もあるから、そろ／＼説出して見やうかと思つて居る處ろ、京都より
藤本の使者として竹下熊雄といふ者参り、サア急に人数を募るやうと申します
も、宜しい直取掛らうと、少し祝ひの事があるから拙宅へお集まり下さる度
といつて、近郷に名ある人々を盡く呼集め酒肴を數々出し皆少し酔かけた所ろ
を見て眞吾ツ、と進み出で「さて各々に一つ御相談申して見度い事がある、と
いふは外でもなく此大和國といふ所ろは昔し南朝の皇族方が恨を呑で潜まれた
所ろもある數萬の英雄が千歳の遺恨は猶此あたりに迷て居らるゝだらうと思ふ、
そこで今の將軍家といふは北條足利などの如く表て向悪逆は備かんが内實朝廷
を困しめて居る事は猶甚だしい所ろもある因て當朝廷に於ては、不日當大和へ
行幸爲れて昔しの皇族方を春日山に祭りかた／＼徳川此討のお旗擧になる、さ
うなれば先づ拙者等は一番にお味方を致すつもりだが各々方は固よりでござら

うな」といふと矢張り此邊の醫者仲間て井澤宜庵乾十郎といふ二人が「是は吾々の望む所何で異議のありませうや宜しうござる是よりのちは吾々の病家先で少し志ざしのありさうな者は皆説て味方に入れやう」と大いに勇み立たたは大變なお醫者が有つたものです、すると此時かの京都から使に参つたる竹下熊雄後ろの方より進み出で「各々忽ち御承引下されたは誠に喜ぶべき事ござるがシテ軍用兵糧等の事はよきお心當りがござりますか」といふと此時十津川郷士の家柄野崎主計といふ男「イヤそれはよい事がござる是より五六里向ふの村に桑田村と申す所がござるが、そこに水郡小隼人と名乗る日々作男の五六十人も仕う近郷第一の富豪者がある拙者参つて之を勤め軍用方を司ごらしめませうから其義は御配慮御無用で宜しい、そこで旗揚げはさういふ御都合、行幸前か行幸後か」「それは行幸前がよいといふ藤本松本兩先生の御説で、先づ此にて御同意有つた方々の中牛は都へお出になつて中山侍従をお伴ひ申し一旗揚て居る時分には恰度行幸と相成だらうにより、鼓輿を途中にお迎へ致しそれか

ら春日山へお供申すと、斯様な都合に致す心で」と竹下が答へたので一同之に一決致しました、それから直ぐ其翌日に野崎主計桑田村へ参つて右の趣きを勤めますると水郡小隼人忽ち同意した因て此趣きを竹下に告げ、くつけふの者十人ばかり撰んで竹下と俱に京都へ上り早速藤本松本等に遇ひ其話しを致しますと折ふしてうごかの磯崎豊等が近衛家へ申し上た一件、朝廷でも御採用に相成りました不日大和の春日山へ行幸遊ばし表て向は攘夷の御軍議といつて其實藤府征討の御評議を爲れ様といふ御内命が下りましたのるサアもう是で大丈夫何とか一つ名を付けて中山卿をお出し申し中國路へでも行く様に、わざと船で浪花を出かけ途中から不意に上陸して當國へ乗込む事に仕様と、スツカリ相談が定まりました愈々是からが全たくの旗揚。

(其二十三) 河内の發向

藤本よりの依頼を受た磯崎豊等の連中身命を抛つて朝廷へ對し御催促申し上げま

したにより朝廷も御採用遊ばされ大和行幸春日山御軍議といふ一件つひに表向
きおふれ出しと相成りましたる、サア最早御先發しても宜らうと藤本津之助、
松本謙三郎、吉村寅太郎の三人中山侍從忠光卿を大將と致し、十津川お進への
郷士を従がへ先づ大坂川口に参りて大和屋庄兵衛といふ御用達の家に遣入り、
是は此度朝廷の御内意を受けて密々に長州迄参る方であるから早船を一つ仕立て
くれるやう」といふので番頭を呼んで見ますると其お頭と見わる方は紫き
打ひもで茶筌鬚に結はれ、どう見ても公卿様に相違ないも直ぐ早船を用意致し
一同之に乗込れ木津川口より天保山の沖の方へ眞一文字に進んで参ると折ふし
日は全たく暮果て月は中天にさへ渡り凄絶たる景色に相成りました時、松本謙三
郎と立て船の船先に手をかざし「此壯快なる景に向つて一首ないといふは幾
念いざ先づ上の句を吐う「追風に月のいざよふ間も待す」と大音に吟じ出しま
すと中山侍從片膝立て船先に向はれ「早乗抜けよ木津川の口」と下の句を附ら
れましたから藤本津之助莞爾と笑ひ「イヤ是は即坐の秀逸威服く昔し源順朝

が名取川で「武士が今日の軍さ名取川」といはれた時、梶原景季取敢へず「君
共に徒渉りせん」と附たといふ事は願ふる人の稱する處ろだが夫は氣樂に上洛の
道歌三昧の時だから、さまで不思議とするに足ん今此手は勤王の爲めに命を抛
たうといふ折柄に此餘裕あるといふ物は胸間の清き事此月よりも清きもる此秀
逸を出したのかイヤ實に妙々」と扇を開いて稱賛したで一同愈々勇み立ち船頭迄
が勢ひに乗つてズン／＼進んで参りますと、もう此等でよい頃と松本が「時に船
頭實は吾々一同の者少し仔細あつて中國行を止め此處から上陸して河内を通り
抜け大和の國へ入うと思ふのだ何處か其邊へ着てくれ」「へーアは長州迄の支度
はむだで「イヤ上るのは此方の勝手だから貨錢は長州迄の物を遣はす」「左様でこ
ざいますかアは直ぐ着ませう」と現金な話して泉州の岸へ着ましたから其邊で
大家は何といふ者であると聞くに備前から此頃店を出した片山佐兵衛といふ酒
店が大きいといふから藤本津之助夫は妙だと思ひ込んで遣入込だ、此方は酒店の片山
佐兵衛奥で一杯飲で居ると店の子僧が飛で参り「へエ旦那へ佐吉殿といふ子僧

だといふ人が参りました」「幾才位か」「左様四十代でございませうか」「馬鹿め四十代の小僧があるか」「へー今は四十代でも大方小僧の頃は子供でございましてらう」「エやかましい見なければ分らないと佐兵衛が出て見ますと以前居た小僧の佐吉、只今は軍師藤本津之助、威風凛然と遣入て参つたが忽ちそれへ着坐に及び「お約束の如く小僧佐吉、大將の姿をお目に掛に出ました」「ヤア是はどうもく」と佐兵衛は躍つてさわざ立ち其晩は大層な御馳走で、それより山を越て河内白木といふ處ろに参り、その陣屋へ遣入込んで是は此度大和行幸につき御先發として参る者だといふことで宿り込まました陣屋の主石川若狭守少し怪しいとは思ひましたなれど、ぐづくいへば暴れられさうで、けんのんでございますゆる「何なりと御用仰せ聞られ下さらば應分のお手傳は致しませう」といひ出したので、然らば明朝は觀心寺へ参るにより明日一日だけの兵糧百餘人前と甲冑鐵砲などを運ぶ人足五六十人差出す様にと申し渡して其通りに調はせそれより千早村觀心寺へ参りました此處はかの楠公正成の故郷で正成の手習な

どを致した處ろ今に猶ほ寝て居ります一同是へ休息致して居ると住持の坊主出て参り「承まはれば此度は御先發として御出陣の由、誠に武門御冥加の事因て何なりと献納致したうございませうが御覽の通りでございませう、先づ手近にございまして品聊かおしるし迄に奉つります」といって差出したのは楠公より當寺へ寄進したる甲冑でございませう、一同大に喜んだと申します。

(其二十三) 縣廳の討入

觀心寺を出離れて少し参ると陟り三里降り三里の峠がございませう之を越して大澤峠、又千早越とも申しまして至うて嶮難な道でございませう其代り之を越れば直五條の町へ出ます近道でございませう、さて此峠へ皆々上つて、ヤット野賊に及びますと、かの先鋒の野崎主計一同の前へ進み出で「エー先達ても申しました通り此五條といふ所は元天朝の御領地でございませう、近頃幕府の領となり代官鈴木源内と申す者此所へ出張致し幕府の權威を笠に着て暴威を

振ふ事甚だしく土地の百姓共困り果て居ります處も、早速御談判然るべく衆には賄賂其外にて取築めたる不義の財寶山の如くにござります間之を取上て百姓等に施し遊ばしたらば至極宜しからうと存じますか」といふのでそれに一決し然ば是より直取掛らうと其手配りに及ばれました、先づ鐵砲組が二隊に槍組が一隊、鐵砲組の隊長は池藏太に半田門吉槍組の隊長は吉村寅太郎右三隊を先に立せ中山殿の本陣は静々と積き峠を越て櫻井に参りますと、とうとう夕七時半と爲りました即ち只今の五時でございますから極あつらへの時刻であると直取懸へて詰かけたが只此まゝ切込のも餘り亂暴のやうであるも一應應接して見やうと土州藩士島浪馬義親といふ人案内を乞て中に入り代官鈴木殿のお目にかゝり御相談申す事があるといふと暫くお控へ爲れといつて玄關の所に待し、やゝ立て出て参つた鈴木源内、もう討手の大勢が門前迄来て居るとは知ませんで高々十人位の浪人共と思つた様子で傲然とそこへ坐り込み何の用で来られたといふから島浪馬ズイと進み「外の事でもござらん此度雷圖へ行幸あらせられ

るに付御先發として中山侍從様此地迄お出でになりました、さてお氣の毒の御だが貴殿は是迄配下の百姓等を手ひどい仕向に爲れた由、因て速かに天誅に行へといふ説に相成たが若し前非後悔なされて、食らひおいたる金銀米穀盡くお差出しになつて此處を立退あるならば一命はお助け申す様計らはう」といへせも果てず大に怒つた代官源内「だまらつしやい荷くも拙者は公儀幕府より代官としておかれた者公儀より御さたもないに何で此處を立退ませう且今のお辭では何か拙者が非道の事でも致した様に仰せられるは心外千萬何を證據に左様いはれる」「イヤ夫等の證據は緩として宜しい早速の所ろは只今の義どうしてもお聞入ないか」「くごい事を、公儀よりの御さたさへあれば、いつ何時でも退ませう」「公儀く」といはれるが幕府ばかりが公儀でござるか王室に御縁遠からざる中山殿の仰せでござるか」「中山殿が何で有うが拙者は徳川家よりおかれた者で中山殿などの仰せは聞ん、殊に何だ中山殿は附たりで浪人共の仕事で有う浪人共が彼是いつたさて一々それを聞ては居られん」「然らば浪人なりと稱つてお聽入

ない譯か、シカとお聴入ござらんな」「チー金銀米穀を出せなど、強脅同前の事をいふからさ金銀米穀はさておいて一錢の合力もまかりならん」「合力とは無禮の一言」「無禮も何もいらんサ、早く歸らつしやい」といひ捨てツイと突立ち奥の方へ行て仕舞ました、島浪馬大に怒り、直追かけて斬うかと思ひましたが先づ皆を引入れて目に物見せ驚ろかしくれやうと、其まゝ玄關の式臺へと立上りました。

(其二十四) 同上

申し續きました大和の一件も今日の處が、最も愉快のところでございます玄關先に立上つた島浪馬大音上げて表の方へ向ひ「鈴木源内暴言のみ吐て一向命に應じませんから方々早くお討入爲れ」と呼はつたもる表の連中それ押込んで討取れくと門を破つて乗込來つた、家内の男女は驚くまい事か、あつちこつちの片隅へ、かたまつて震へ居る様子其中に用人の黒川儀助、同じく恒川正次郎手

代の長谷川泰助同じく高橋勇藏總元締役の木村祐次郎是等は早々逃る譯にも行ず、やむを得ず押取刀で廊下の處へ出て參ると此方は砲隊々長半田門吉同じく池藏太を先に保母建、永野一郎、水郡榮太郎、澤村幸吉、森下幾馬、田所養次郎などいふ勇士等切先揃へて乗込み參る、中にも眞先に進んだる保母建大刀キリと抜くよと見る間に長谷川泰助へ切附た、長谷川の方は未だと思つて、うツかり構へて居たから堪らん受る間もなく颯天から梨割に切付られ忽ちそこへどうと倒れる是はと驚いた高橋勇藏一足あとへ下る處を飛び掛つた森下幾馬續け打に打込んで行くど高橋も抜合してどうかこの一太刀は受たがあの二太刀で両肩斬れ是も同じくそれへ倒れた、恒川正次郎續いて出て來たが此體を見て少し臆しいやくとながら引こ抜と永野一郎躍り出で横なぐりにやつた一刀受たが追附ない十分にやられて恒川も亦それへ倒れる黒川儀助は逆もかなはんと思つたか奥の間の方へ逃げ出す處を水郡榮太郎田所養次郎後ろから切かけたやつで大げさに打放され亦横様にごうと倒れる此時襖をあけて來つた元締木村祐

次郎此男だけが此中では武藝の心がけがあつたから、禪掛鉢巻といふ體で飛出し、櫛大刀振上げいきなり田所へ斬付た心得たといつたけれど不意だったので、次郎受損じて一太刀やられた、それと見るより森下幾馬横合から打てかゝるを、勢ひ込だ木村祐次郎死物狂ひに振舞すのでさすがの森下も思はず少し切立られる様子後ろに控へ居た澤村幸吉いらつて前へ進み出で鐵砲取てズイと進む木村も是にはかなはんと思つたか横様に櫛から飛下りて木蔭へ進入らうとする内に、すかさず追出た澤村幸吉が直火蓋を切た一發脇腹ごとと打貫かれ木村はつたり倒れる處を森下以下五六人寄集まつて遂に止めを刺して仕舞ふ、さて是より先皆が戦つて居る間にかの島浪馬義親は代官鈴木を討てくれんと奥深く進み入り、あちらこちらと探しましたが何分にも見付らない、すると續いて參つた上田宗見といふ浪士「どうだ未だ源内は見付らんか拙者穴探しなら得手の事だキツト探し出して見せるぞ」きはどい處ろで冗談をいひながら土藏の脇の座敷へ目をつけ勢ひ猛く飛で參ると果して此處に鈴木源内最前よりして此處に隠れ進入て

來たらば斬拂はふと信長氣取に構へまして障子の蔭に身を潜ませる處へ飛んで來た上田宗見忽ち障子を蹴拂つたので倒れる障子の押に打れて源内どうと尻餅つくと飛かゝつて襟首押へ「怪しい者を引捕へた上田宗見正則、代官らしい奴を生捕た」と呼はる聲を聞くよりも飛込參つた島浪馬「ヤア遺奴源内だ、そこ放したまへ」と聲をかけたで上田にエイと突飛され源内よろ／＼とよめき出るを、ヤツと打たる島の太刀風鈴木首ははつたり落る、ヤア是で最早よいと、そこらを取片附などする内中山殿もお遣入りになり、あとの男女は皆助けて逃し勝どきを唱へ、酒肴を出し其夜は緩りと打くつろぎ御酒宴に及ばれたと申します。

(其二十五) 伴林の傳記

非道の代官鈴木初め悉く討果しましたゆゑ、あくる日早速縣廳の前へ桑首蓋を作り立て之へ一同の首を並べ其下へ木札を立掛け此者儀元來 天朝といふ事

を辨へず、幕府にのみ媚諂ひ良民を惱ます等罪惡甚だ大なるを以て、此處に天誅に行ふ者也、といふ次第を書記し此處に人數半を分け中山縣以下の頭分は又一旦櫻井寺へ引返しになり、かねて製へおきましたる禁地の菊の紋染出したる幕をば表門より左右へ引廻らし、大層の景氣でございますも、近郷よりお味方として参る者引も切らざるほどの有様其内に最初からのお約束であつた、伴林六郎といふ豪傑が漸やく参りましたも、早速記録方の頭取を命せられました、さて此伴林と申すは有名の人でございますから、一寸特別に略傳を申し上げます、此人元は河内國某寺の坊主で大雲坊周榮といつた者、佛學は申すに及ばず和學は大橋長廣大人の門人で中々の人でございました、處ろが現時京都邊へ参り、かの淀川の夜船に乗りました折、てうと乗合が少なうございまして退屈を致す處ろから、あつちこつちで色々勝手な話しが初まる周榮は脇に居た年の若い書生體の者と頻りに話し込んで居つたが、向ふが書生だと思ふから周榮わざと漢籍の話しをすると、向ふはまた佛書の手をわざと頻りに論じ出すで周榮

思はず感服して「失禮ながら中々貴下は佛書もお讀みになつた御様子通分其位にお察めであれば天晴一寺の住持になれます、が佛書は讀んでも坊主になるのはお忌とでも仰せられるのか」といふとかの書生荒爾と笑つて「イヤ佛書といつた處ろが、本の少々端だけを見たので中々住持などは思ひもよらん事、殊に坊主は大の嫌ひで坊主頭を見ても肝にさわります、ヤ是はお送合、失言の段は平に御免「イヤ」決して御挨拶には及びません、人には各々見る處ろの論があるもの、シテ何處がお氣に入りません後學の爲め伺つておき度物」「それを申すと永くなりませんが、先づ一寸かい摘んで申せば、佛法の方の初の教へにするに君より親より大切な目に見えない阿彌陀としてあるで、佛敵となれば時の天子へでも双向ふといふ了簡になるのが甚だ以て氣に入りません、極善し釈山の暴威には天子もお困り遊ばした事はんでも分つて居るが、近い事で織田右大臣信長大に勤王の功を建てられたけれど、石山本願寺が邪魔をするので、十分に朝廷を立派にする事が出来なかつた、ヤ観れば御坊も本願寺派と見ゆるな

「ア、此位にしておきませう」と辨を振って述べ終りますと周榮は何と思つたか、オイと立て法衣をぬぎ捨て川の中へぼちやり投込んだ。「オヤ坊さんが法衣を捨てた」「どうしたんだらう、気が違つたのか知ん」などと皆々驚いて見て居ると周榮びつたり両手を突き「私も佛徒ではございますが、和漢の書も少々は讀ましたが、只今仰せられた御論も少々心附ては居りましたが、今貴下が概淋漓たる快辯を伺ひ急にひどく感じましたも、只今より坊主を止め只今迄の罪亡ぼしに 朝廷へ徳迄も忠義を盡しませうから、どうか是よりは拙僧ではなかつた拙者を以て弟とお思召し、お引立て下さるやう偏へに願ひ上ます、シテ貴下は何處の方で、御姓名は何と仰しやいますか、お聞せ下さるならば有難き仕合せに存じまするが」と眞實面へあらはれて見られましたも、かの書生大に喜び「拙者は因州鳥取の藩士で飯田年平と申す者父は秀雄と申しまして聊か書籍の教授を致し居るので聞覺はに覺はりました事、貴君全く其お心ならば拙宅へ御同道致して参りませう」と是から二人つれ立て因幡國へと参りました。

(其二十六)

同

上

大雲坊周榮はスツカリ坊主が忌になり、此處で始めて一書生と變じ飯田年平の家へ這入りました、此時作つて書た詩といふのが名代の元足神州清源民といふ詩で摺物などになりましたのが、只今猶ほ諸方に賣て居ります、さて其内願の毛も漸やく延び、もう結べる様になりましたから、年平も大に張合がつか「何と君も最早坊主でもない事だから、何とか姓名をつけたまへな結髪で大雲坊もをかしからう」周榮莞爾と打笑ひまして「私も何卒左様致し度と存じて居るので、先づ私しの故郷班鳩村の氏神は伴林明神と申しますから姓を伴林と致し元六男でございますから、通稱を六郎とつけませう」「成程ついでに名乗は「左様さエーと私しの宗旨では光といふ字を容易に付ん事になつて居ります處を今其宗旨を止たのでありますから、其證據に光の字を取り又貴下の名乗年平の平の字を頂戴致し光平とは如何でせう」「ア、それでは伴林六郎光平か、こりや

成程立派な名だ、と年平も大に喜んだ様子。是から六郎、光平は愈々學問に心を入
れ間があれば亦武藝を習ひ、つひに天晴の武士となりました。だが別に家のあ
る譯ではないから矢張り飯田の食客であつた、そこでかういふ豪傑といふ者は
兎角入とは違ふもので、殊に此六郎のは中々ひどい暇があつたからといつて立
働きの用などは一向に仕ない、間があれば歌でも詠んで居やうといふので、サ
アそれもゑ内の女中などは悪くいひ切つて居ります、中にも女中頭のお正或日秀
雄の妻君の處へ参り、「アノ御新造様へ食客さんには困るぢやございませんか
今日は何にも御用がないつて朝ツから寝轉で居りますよ、何か御用を申し付や
うぢやございませんか」「ア一さうだねへ、それぢやア此處に半切があるから是
を繼でもらひませう」「ハイ夫が宜しうございませう」とお正先生半切を持って行き
「オイいそさん、オイいそさんてばねへ」と脊中を一つ食はされ驚いた伴林六
郎「ア一びつくりした不意打とは甚だしい」「だつて先刻から呼でるぢやありま
せんかね」「夫は磯さんといふ人を呼でるのだらう」「お前さんは真どうに氣樂だ

よ、いそさんてへのはお前さんのこつたよ、食客ぢやありませんか」「イヤ是は
ひどい名を下された、シテ何の御用があるので」「ナアニ大した御用ぢやないが
ね之を繼のは出来ますか」「左様さ糊で繼のなら出来ますが只繼のは出来ません」
「誰も只繼げとはいやア仕ません、矢張り糊で繼ぐのですよ」「委細異りました
ございます」と漸やく請合たから暫らく經て、お正が来て見ると、サア出来た
と出しますのを見てお正は忽ち投出して仕舞ひ「マアお前さんへ、こりや何と
いふ繼方です」「別に何といふ法の名もない」「嚴詰ちやア往ませんよ此處が決な
ら此處は裏又此處は表であとは又裏ついき、お負に此繼目の太い事、マア何と
いふ下手なんでせう」「ひどく喧しい小言をいふが、それでも字はちやんと書る
せ字さへ書れば宜いのだらう着物ではなし表も裏も構やしまし」「オイくいそ
さん、イへさ六郎さん冗談も程があります、私しのぢやありませんよ、お奥の
半切ですよ、字さへ書れば宜いだらうなんて、こんな繼方がありますか」と女
中頭のお正むきになつて怒つて居る處へ年平てうと参り合せ「何を仕たのだ

六郎君がどうか仕たか」と様子を探ねるから、かやうくと物語たので年平も笑ひ倒れ「紙の表裏を知らないとは成程君も眞の豪傑だ、戯言ぢやなからうよ、全くさういふ事は知んのだらう、豪傑といふ者も使うには不自由な者だのう」とあきれたと申しますが是が只の人の仕事なら、馬鹿といふ名を下されるのですが、伴林位の人となると、小事に拘はらぬ、英雄の本色だといつて是で通るから妙でございます。

(其二十七) 同上

大雲坊周榮改め伴林六郎光平暫らく因州鳥取に居りましたが、文武の藝俱に早上達致しましたゆゑ、一先づ故郷へ立歸り其頃河内に居られた所の中宮寺宮といふ宮様の御家來分となり、始めて眞の武士に歸し傍ら國學の先生で居りました然し始終河内に居る譯でもなく京都へ來り何かして居るので大分高名となりましたゆゑ、中山卿も心付れ是を味方にする時は至極重寶の男だと大和へ發

向される時、手紙を書て内々に伴林の方へ届けたなりで、お先へお出掛けになりましたから、六郎は一足後れてあとから驅付此處で追附たのでございます、さて是で先づ伴林の小傳は終り、是から又大和の本文となります。

先づ是で千餘人の同勢と相成ましたゆゑ、それぐに役割を定めたのが先づ、大將軍は申さず共知れた中山侍從忠光卿、次に三總裁と唱へるのが、藤本津之助、松本謙三郎、吉村寅太郎、監察が那須眞吾、酒井傳次郎、御用人が池田太、記録方が伴林六郎、勘定方が牧岡鳩平、兵糧奉行が水郡小隼人、小荷駄奉行が森下幾馬外に君側の四天王といはれたのが、澁谷伊豫作、岡見留次郎、磯前豊、尾崎添五郎、是等を屈指の人と致し假に自ら天誅組と名乗り、ひたすら行幸を待て居りました、所へ又かの十津川郷士野崎主計が郷兵八百人ほど募つて参りましたゆゑ、愈々大層な勢ひとなる、サア此處で御布令の通り行幸となりましたならば事十分に参つたでございませうが、其行幸がはづれたばかりで事皆破れになりましたは誠に遺憾千萬の次第、どうしてそれがはづれたと申せば、そこに

はむづかしい譯がある此處を篇と、よく御一讀の義を願ひ奉つります。

是迄京都の方の様子はいふと、前年迄は水戸連中が巾を利し大層な勢ひでありました處ろ、前中納言齊昭卿世を去れてから、ガラリと様子が變つて参りましたもろ、又之を恢復しやうと、代つて長州連中が大層入込第二の水戸が出来ましたもろ、勤王黨大に喜び大和行幸の儀など定まる様になつたので之を聞か

江戸幕府は大に驚き早速之を覆へさんければならんと、會津の大守松平肥後守殿守職に任じて入京となり速に長州連中を追返る事となつた、此處で長州加

據の公卿方は都に居れない譯になり、三條中納言初め七卿中國へ落たまふといふ大さわぎは所謂名代の七卿落でございませうが、此事は長州事件の方の事もある

此處では略しておきませう、是等のさわぎで會津藩の爲めに禁門すつかり取圍まれて仕舞大和行幸も何もおヤンとなりました、そこでかの行幸を勤めた役當

人真木和泉守大に驚き、夫なら一つ大和へ行って旗揚を暫く猶豫するやう取押へ様と思ひましたが、又七卿の御先途をも見届け度もある同役で兄弟の如くして居

るかの有名の平野次郎に己に代り大和へ行って藤本等によく諭してくれといひ置

て、自分は七卿のお供を申し長州へと下つて仕舞ました、そこで平野次郎國臣

は早速大和へ馳参り三總裁に對面致し、こたひ都の様子合すつかり變つた事を

話し此處で中止には成るまいかといふと、松本謙三郎進み出て「思ひもよらん

都の變事誠に歎息至極の事、なるほどこりやア少し早まり過た、然し最前日も

五條縣廳を襲ひ討ち代官初め斬殺したあだから、今更やめて兵をば散じた所

ろが幕府の者からは目指れて、到底罪科は免れまい、それなら寧ろやれる所ろ

までやつて刀折れ箭盡るの後潔きよく命を捨て他日王政復古の基礎となるのみ

さ、是より外はあるまいと思ふ」と決心して答へました、サア是からがどうな

りませうか。

(其二十八) 高取の城攻

平野次郎つくく」と聽て思はず、噫と歎息致し「どうも、それでは仕方がない、

やれる所ろ迄やりたまへ拙者もそれなら同意仕やう、然し此處で直ぐ一所になつて、一つ事をするも餘り智恵が無いやうだから、拙者は是から中國へ下り七卿の中で、誰方でも構はん近い方をお誘ひ申して、三丹州の郷士を語らひ山陰道で兵を擧げやう、其内には貴公方も京都へ攻入る事が出来やう、さうすれば拙者が山陰道から長州迄の道を開て、京都と長州其外と消息の通じるやうにする、是で先づ幕府征伐の下手にならうか、ア拙者の考へは斯うだ」といふので皆々大に喜び是非さうやつて戴だき度と此處で平野次郎は腹を告げ、京都の方へ立歸り直ぐ其足で中國へと下りました、是から平野の計畫で但馬に赤旗搦と相成りますが、双方一所に申し上げては分り悪くなりますから、是は大和のとて申し上ませう、さて平野の歸つたあと皆々又評議に掛つて居る處へ、かの伴林に續て招かれました、また一人の桑原北島四郎此處で加はりました、る一同大に喜び先づ是で手筈も整ふたし、狭山、石川、高野山などからも、それぐお味方申すといふ返事が來たけれど、高取といふ藩からは何共いつて來

ないゆる、是は一つ高取へ發向して様子次第攻かゝらうと、總軍先づ高取近くに参り段々様子を窺ひますと、十分籠城の用意でございすから、いで其儀ならば承知出來んと、先陣の隊將酒井傳次郎兵卒を引て攻掛りました、さて此高取へ無理に攻掛つたのは、少しどうも失策でした、此城は當國第一の要害といふ城なのに、籠つて居る大名が植村駿河守といつて幕府の小大名には珍らしい強藩でございす、前年編者が大和邊を遊歴の頃多武峰へ上りまして、ツ、と四方を眺めますと向ふに峨々と屹立した山が有て、其絶頂に城のやうな楯が見えますから、アノは何だと人に聞きますと、アノは土佐の山町と申す所の上のが高取の城だと申されました、成程どうもいゝ要害だあれでは、力攻に行ない苦と思ひました殊に此先陣をした隊將酒井傳次郎といふは、此戦争の前年迄編者の家に居た者で編者の誕生した時などは、お守を致したと申す事もある程更懐古の感がございしました、餘事はおいて此高取城は一に土佐山と唱へ山の上りに町家があつて、藩主植村殿平生はそこに居られ、いざといふ時は山の上の

本丸に這入て固めるといふ手筈が、チヤンと付て居る其上り口から本丸迄は直立五十丁といふ坂道、そこへ大砲小銃を備へ嚴重に固めて居ります。如何なる猛將勇士でも容易にかゝれる様子には見られません、されど死を決したる先手の兵の事も無二無三に攻上ると、夫ッといつて双方の坂道より大砲小銃つゞけ打に打下したので、先手に進んだ五六人やはに其處へ打倒されたので、少しひるんで見わたる様子、酒井傳次郎大に怒り、サア舌に續いて上れと、桃形の冑を猪首に着し十文字の槍を小脇にかゝり、ひた上りに上りて行く、トソと一發來たやつで創は受ませんでした、桃形の冑をクワンと打飛したので、打れて傳次郎思はずどうと倒れたが、直起上つて槍をそばめ又々進んで上りますから皆々寄て引止め「こりやとても力づくには行ん、マア一つ陣を引て、とくと方略を定めてからに仕やう」と頼りに申しましたも、止を得ず先づ城攻を休め本陣へと引上げて参りました、そこで一同集まつて陣に及び、再び攻かゝるといふ所ろは此次。

(其二十九)

同上

高取の城攻どうも思ふやうに参りませんから、一同集つて陣に及び「イヤ中々エライ要害で進もあれでは力攻に行ん」といふと一人が「それに妙だったは足のすべる一件どうしてあゝするか、よく氣を付て下を見ると竹の皮のやうな膜が、一面に敷てある、道が狭いにすべるといふのだから、進めない譯ちや無いか」と遂に城攻をする事は一先断念して仕舞ましたが、さて其すべる譯はといふと、是には妙な譯があるので、一體此高取といふ所ろは昔し竹取里と申して有名の竹取姫が出た村、今に至つても猶竹藪の多い所ろ竹箭の出る事大變でございます、そこで先祖の植村駿河守ふと考へ付、こりや年中に捨る竹の皮ばかりも餘程の物であるだらうが、取て置たら何かになるだらうと竹の皮を皆空庫へ納て置たのが、山の如くにたまりました、そこで家中へ布令を下し他日、若し戦が起つて此城に籠る様な事が有たらば此竹の皮を一面に敷け、敵が

必らず困るであらうからと、斯様な事になつて居た處ろ、今度の事が出来た
も進めなかつたのであります、是が勤王家の方で仕た事なら竹の皮の軍略とか
何とかいつて、名高い事になるのでありましたらうが、惜い敵敵の方の事だか
ら、さまでに人が稱しません。

夜に入てから吉村寅太郎、フイと立上りて部屋の外に出で始終自分の左右に附
て居る中垣健太郎、小川佐吉といふ二人の小隊長を密と呼び「さて各々今日の
城攻うまく行なかつたので、段々皆評議して見た所ろ、彼は到底力攻に行くな
いから、是は止て兵を引揚げ別の方へ掛らうといふ事になつた、然し此まゝに
引て仕舞は如何にも残念の次第であるから、今夜拙者の手勢だけで城を致し
て見ては如何、御同意を爲れるか」といふと二人も詞を揃へ「夫は如何にも望
む所ろ早速に押出させう」「シテどういふ手段にて何か方略がございますか」
「さればさ別に方略といふもないが、馬に與へるといふつもりで取寄た輩が、

澤山あるから銘々あれを引背負て搦手の方の間道を上り城に火を放さうといふ
考へさ」「是は成程面白いお考へ」「デハ早速出掛ませう」と是からそこに居る廿
餘人の手勢等に各々わらと薪木を負せ、山道へて指掛りました、さて是が旨く
行くと又一段面白事になつたのでせうが、又十分に行なかつたは惜い事では
にも亦段々譯がある、抑も此高取の城は大手の方に城主の居所があつて事あれ
ば植村駿河守直此處へ立籠り、そこで搦手の方を受持て居るのは神隠流の達人
で杉野四郎といへる人、是は大和國に一人といふ剣術家で一藩の者へ指南をし
て居る位な人物、今日の戦ひ大手の方で敵方志ろざしを遂なかつたから、殊に
よると今夜あたり夜討に來まい者でもない、來れてから防いで面白くない一
廻り城外を廻つて見やうと、門下の擊劍家五十餘人を引つれ山道へと見廻りに
出ました、かくとも知らず吉村等の一組は潜みに潜んで、やゝ山の半腹まで参
りますと、遮に聞ゆる人馬の足音、ハテ油断がならん事だと藪の小かげに身を
潜まし暫らく様子を窺つて居りました、彼方は心付て來たとはいへど、まさか

此處にもう来て居やうとは一向心づかぬものか、すたくいそがして此方の道へ参る様子、さて此處が大和事件に名代の激戦吉村寅太郎と杉野四郎が、一騎打といふ所になります、明日のお楽しみでございます。

(其三十) 同上

時は是れ何日だと申しますれば、文久の三年八月廿六日の宵闇でございますのに、左は竹藪右は杉林といふ所もある、成るべくは隠れてやり過さうと、片膝へと寄りました、殊にてうご大將吉村寅太郎が、此夜の出立と申しますは、黒草の小具足に黒鐵入の鉢巻、紫の小袴といふのでございますから、さうひどくは目立たせんと外は猶更の事、積古着だのと申すのでございます、隠れて居るには極宜い、其内愈々近寄て来た様子だから、そんと窺ひ見ますと固より夜廻り巡見の事とて、銘々腰指の提灯を持って居るので、五十人餘りの出立、スツカリ明かに見渡り、中には隊長杉野四郎は、排練の具足の

上に白茶黒緋の陣羽織を一着に及び長金山形の陣笠を戴き馬上もたかにかまき来る様子見るより吉村、もう耐へられない、どうせ早此處で出遇た以上は、今夜の夜討も是迄だから、せめて此奴等を盡殺しに仕やうと、忽ち二十餘人に撥し、どつと叫で突出したので、夜廻り連中一度は驚いたが、それといふ内立直し、開き迎へて戦つた、されど命を座并に比した勇敢決死の天味組此處を先途と決戦するので城兵つひに突立ちられ半丁餘り後へ下ると、杉野四郎大に怒り三尺餘の陣刀キヲリと抜き馬に蹴入て躍り出たるを、見るより吉村好敵なりと、槍をさして突てかゝつた此方は土州一藩に類はれ渡つた槍の達人、彼方は大和一國で、一といはるゝ擊劍家だから、とうといゝ組合せ、一上一下と戦つたが若し是で双方徒立で有たならば、吉村危うかつたかも知んのだが、何といつても馬上の方が太刀なのだから手元へ飛込といふ譯に行ん只受太刀のみでありますも、吉村得たりとヤ聲を掛け飛上つて突た一本受損じて杉野四郎横腹グサと一突やられて、馬上に耐らずと落た、吉村しめたと又取直して再た

び胸へ突込んだを突れながらもさすがは杉野で槍の鹽首引摺み、起上り様太刀
 振上げ、續け様に吉村を、五刀ばかり打たさうで、此時吉村が赤肌で有ば、て
 うぞ森蘭丸と安田作兵衛といふ所ろだが、そこは具足を着て居た徳で、一刀も
 中へ通らなかつた其間だ猶ほ吉村の槍は、杉野の胸に這入て居るので力を極め
 てるぐり付たから、つひに弱つてさすがの杉野も抜槍諸共どうと倒れ竟に息絶
 たと申します、吉村始めて息をつき暫らく休んで居りますと、此時どういふ通
 まちであつたか味方の打た鐵砲のそれ玉、ヒウと来て吉村の腰へ當つた最とも
 急所でも何でもないから吉村平氣で又進まうとした時中垣健太郎、小川佐吉馳
 來つて之を止め「今から夜討をした處が、もう今の討漏されが歸つて注進した
 でせうから、それに少しでもお怪我はあるし先づ敵將を討たのだから今夜は是
 で引揚ませう」と頼りに止めましたもる此處で先づ一同引揚て参り是から二三
 日療治した處ろ先づ平癒致しましたもる、さて之から如何仕様といふと何分此
 城只一つで手間取て居るも、むだゝからと此處でつひに城攻は中止と致し何處

かい、本陣とすべき所ろをと段々地の理を探究し大和紀伊の山嶺きの谷合天川
 辻といふ所ろを見立て、此處へ先づ本陣を据る暫らく様子を見て居りました。

(其三十一) 滋谷の使節

こちらは京都所司代大阪城代など、早飛脚を以て江戸表へ注進に及びましたる
 也へ、是は拾遺難い大事件、直様征伐に及ぶやうと、嚴しき下知で御座います
 から、それく各藩へ沙汰と爲り、皆軍勢を繰出しました、先づ紀州家よりは、
 水野多門を大將として七千人、高取口へ向ひ、彦根藩よりは、永野伊豆を大將
 として六千人、五條口へ向ひ、藤堂藩よりは、藤堂新七郎を大將として五千人、
 古市口へ向ひ、之に續いて發向致しましたるは各藩の兵で、高取の植村駿河守、
 一千人を以て今賀峠にかゝり、小泉の片桐主膳正、五百人を以て車阪峠に、岸
 和田の岡部筑前守、五百人を以て攝津寺に、其他狭山の北條相模守の五百人、
 芝村の織田筑前守の四百人、柳本の織田山城守の四百人、柳生の柳生但馬守の

四百人、尼崎の松平遠江守の三百人、別に郡山の松平甲斐守二千人を以て宇野に陣取り、いざと爲らば總軍一度にかゝらうと、此で双方暫くは睨み合と爲りました、然し天誅組の方は、今別に強て恨みも無い、大名達と戦うでも無いから、先づ一つ掛合て見やう、それに就ては先づ何處の陣が佳らうと、段々探つて見る處、紀州勢が最も大軍であるけれど、彼は後詰のやうな體、赤根と藤堂此二手が主力である、其中藤堂は勤王心もある様子だから、此へ一つ掛合をつけやう、誰が此使者に宜しからうと云ふに、中山侍従の左右に在て、四天王と唱へられるのが、澁谷伊豫作、尾崎濤五郎、磯前豊、島浪馬で、其中にも澁谷伊豫作實行と云は、辯舌も頗る達者である上、力は五人力有て、柔術家と云のだから是が適當だと云事に決し、そこで澁谷實行、二人の若侍を供につれ、藤堂の陣屋へやつて参り、「中山侍従使者として、澁谷伊豫作實行と申す者、大將に見参致し度」と言入れたので然らばと中へ通し、當陣の副將藤堂立書出て参り、「身供は藤堂立書で御座る御使者の趣き承はり度い、と述ると伊豫作は

扇を膝につき立て「此度吾々共、當地へ發向致したるは、辱けなくも御親征の先鋒を承けたまはつたので、然るに京都に於て會津中將等、兵れ多くも主上を押込同様に爲し奉り、吾々共先鋒の者を以て、賊の如く言ふらし、討手を向られるとは以ての外、事、吾々は朝廷の恩召に因て起した兵也へ、即ち官軍とも謂つべき者、御藩も勤王の御心ありと云事なれば、吾々共に合體なされて然るべきに、討手に向はれるとは其意を得ん」と述立るから立書に於ては「其御志は御最もの次第だが、公儀から建て置れる縣廳へ向ひ、火を放ち人を殺し、賊にひとしき所行を爲さるもへ、討伐せずには居られぬ、何と到底棄敵せず御座るもへ、今の中に降参なさらぬか、さすれば吾々共如何様にも剛腕致し、中山殿初め御助け申す工夫仕らう、如何で、降参は爲さらんか」「是はまた述べわくな仰せ御藩の人数はどうか勤めて、吾々共の味方に致さうと、かやう考へて参つた拙者に、降参せよとは意外千萬」「や左様な事を言れるならば、暫らく陣中へ御留申すが如何」「それは貴殿の御勝手次第、使者の役目相立ねば、拙者

再び本陣へは歸らぬ覺悟「御留め申す以上は陣中の法もへ、腰纏を付ますが御承知か」宜しいとも承知致した、不肖ながら此伊豫作、御手向ひを仕ると爲れば、五人や十人、投殺すは何でも御座らんが、それも無益の事であるから、尋常に虜と爲りませう、然し無禮の振舞爲す者あれば、其時は腕立致すかも知りません」と立派に約束して虜に爲りました、此で玄蕃も大に感心致し、どうか如此豪傑は、助けて置たい者であると、是より大切に致し置き、其後幕府の方へ向つて、放免の事を願ひ立ましたなれど、幕府つひに之を聽入ませんでしたは、如何共詮方なき次第に御座いました。

(其三十三) 伴林の風流

澁谷伊豫作首尾よく生捕となりましたにより此勢ひにて總攻にかゝらうと九月の三日藤堂家の本陣に於て大評定とは相成りました、先づ正面に控へたるは藤堂仁右衛門同じく新七郎同じく玄蕃、右の方には肥州家の大將水野多門、同じく

土佐左の方には彦根藩の大將永野伊豆、木俣莊左衛門少し下つて井びましたるは近邊諸藩の重役方郡山の岡部富之進、岸和田の安藤幸右衛門、藤所の藤原平之丞、芝村の吉村武太夫、柳本の林廉之助、小泉の渡邊新八郎、白木の眞木庄兵衛、狭山の梶山民部、柳生の近藤具、高取の荒川浪右衛門等各々膝を進まして様々の評議に及びさてどういふ事に決しやうといふと藤堂家の軍師水野彦助進み出で「拙者此程土地の者に付先づ敵の籠り居る天川辻の奥十津川と申す處の地理を賈しましたる處ろ、中々容易の處ろでござらん後ろは和田峠、地藏岳、左りは伯母岳右は大日岳三方絶壁峨々として屏風を立たる如き地形其の中で豎二十里横十里總て六十一ヶ村之を引くるめて十津川郷と申す由此間が皆天誅組になつて居るのてございますもゑ、うかと攻入る譯に參らん先づ大日川の邊などへ時々人を繰繰出して敵を誘びくやうに致し自然とつからす御工夫が先づ然る可きかと存じます」といふので皆之に同じ四五日おいて九月の九日藤堂新七郎大將となり橋本左源太多羅尾岡左衛門等一隊の兵を引率し大日川の淵に備を立て盛んに兵威

を示す様子近邊の百姓之を見て、いそぎ中山殿の本陣に参り此趣きを注進致し
ましたもる大將の中山忠光卿、「何敵が攻寄たと、それ誰か参つて退散せ」と下
知の下より郷兵共心得ましたといふや否や忽ち五六十人かけ出でたが誰か指揮
役といふ事もないから誰か一人指揮役をといふと此時侍從殿の後ろに候面一冊
控へ込で何か頼りに考がへて居た、かの牛切を繼ぎ損つた奇人伴林六郎光平「
よし拙者がまかり出やう」といふより早く脇にあつたる黒絲の小具足取て投か
け九尺柄の手槍を提げて馳せ出でやうと致すのを見て側に居つた若士が「イヤ
今日は重陽の節句此處で先生が御出陣あらば何か一首ありさうなものでござる
な」といふので六郎も莞爾と笑ひ、ひよいと振向て横手を見ると秋の半ばでこ
ざいますもる向ふの谷間に野菊の花が今を盛りと咲亂れて居るから長い杖を一
本ばつさと折り之を自分の襟に差し昔しの戦でいふ差物の體に致して「サ一首
出来たから、いひおいて出ますぞ」「何といふお歌で書留めておきませう」「身
を捨て千代を祈らぬ丈夫も、さすがに菊を折りかさしつ」といひ捨て出たとい

ふは實に風流の豪傑でございます、されば此處の處ろを若年翁が書て政新聞紙
の附録に出た事があり又小林永澄子も、たしか書た事があります然し両方共ど
ういふものか大層な白髮の老人に書てございしますが、六郎此時は五十歳ばかり
で、それほど老人ではございせんに何でさう間違はれましたか、どうか是
は實際の通りに書直させて後世へのこし梶原景季が旅の梅の園と古今の對幅に
でも致したらば面白い物になるでございませう餘事はおいて是よりは大日川の
合戦から及び下市の夜討と相成りますが次に申し上げると致しませう。

(其三十二) 大日川合戦

大日川縁迄討て出ましたる伴林六郎遙かに向ふを見ますと藤堂新七郎の率ゐ
る一隊早間近く相成りましたるもる、それつといふと鐵砲二三發打かけると向
ふからも同じく打かけて参り、やゝ暫らく戦かつて居る折續いて繰出した藤堂
玄蕃の手、横合から山を廻つて進み来る様子此時天録方よりは上田宗兒又一隊

を率ゐて参り今進み来た玄蕃の手を遮り此處に又一ヶ所の戦ひが始まる。すると彦根の軍勢此處を望み見て藤堂勢に計り手柄をさせまいと思つたのか木俣清右衛門、積山園對の二手上市の方より進んで参る、それと見るより此方よりは荒巻半三郎、國前豊福つけて之を喰止め此處に四五ヶ所の戦かひとなる時彼ればせに出た紀州家の人数及び郡山高取等の軍勢進々に四方より推詰て参り取り包まんとする工合之を本陣の山の上より遙かに眺め居りましたる天誅組の軍師藤本津之助、鐵石齋脇に居たる安積五郎武貞に向ひ「見たまへあの通り進々に敵の練出して来る體は畢竟是我兵をば平地に誘き出しておいて推包みに討うといふ計策であらう何しろ衆寡の違ひは非常だから包まれては難儀の次第早く引揚て仕舞がよい貴君一つお出向で引揚させて下さらんか」といふので安積五郎委細承知致したと有合ふ人数少々を率ゐて一散に驅出し味方の頭立たる者へ其趣むきいひ聞けましたるゆる然らばといふので伴林以下又荒巻等の手一同遙かに人数を引揚かける。と伊井家の大將木俣清右衛門鞍笠につゝ立上り「それ敵は引色なる

ぞ追討てく」と下知致し追すがらうと致す様子かくと見るより安積五郎かたへの山へ分上り手下の者に下知を傳へ鐵砲十餘發玉も何もなしのまゝト、くつと打響かし一度にツアツと鯨波の聲を揚げさせますと其聲山谷に響き渡つてエライ聲に聞けたので藤堂家の軍師水野彦助急に味方へふれ示しこりや或ひは敵方に伏勢あつての事であらう早く引すば過ち出来んと早々に推止めましたるも藤堂一手は人数をまとめ其處へ止まらば易々と引揚げ先づ相引の姿と相成たか矢張り此處に止まりましたから天誅組は易々と引揚げ先づ相引の姿と相成る其中早夕暮ともなり戦も是迄といふ體もあるそこに陣取て居るにも及ばんと藤堂井伊紀州等皆それくに分れました此時又天誅組の道案内者橋本若狭といふ人進み出で「今日の戦い段々様子を見ましたる處も藤堂の陣には然る可き軍師ある者か中々油断のないやうだが井伊紀州両手の兵は只大軍を頼みとして餘程油断の見ゆる様もある今夜一つかの陣へ夜討をかけ十分に驚ろかしてやらうではござらんか人知ぬ間道の案内は拙者が心のまゝでありますから」といふので一

同は勇み立ち「それ必らず面白からうと先づくし取りで出かけることゝ致し井伊家の陣へは橋本若狭、尾崎濤五郎、池田謙次郎、鶴田陶司、楠目清馬、紀州家の陣へは森下幾馬、島濱馬、前田繁馬、田所養次郎、荒巻牛三郎と手配定まり各々支度を十分に致しサア、直出かけるのだが腹が減っては仕様がないう粥を焚け湯を沸せといひ付たなり隊伍を調のへ立ながら粥をかッ込で其勢ひに天の川を飛出し下市町を挾さんで右と左りに陣取り居る井伊紀州の兩陣目がけとッと叫んで切込だから、イヤ幕軍の驚いた事、右往左往に亂れはじめました。

(其三十四) 下市の夜討

前申しました通り橋本若狭といふ人は、一體此土地に生れた人で丹生明神の神主をして居る時、屢々此邊を巡廻してよく間道などを存じて居りますゆゑ、一寸した小高い山を、はすかけに通り返すと、恰度紀州家の陣と彦根藩の陣との間の所ろに出ましたゆゑ、乃ち左右に引別れ先づ森下島などの一手紀州の陣へ

躍り込と、其狼狽は一方でない最とも此陣だからといつて、番兵もあり斥候もありましたらうが、正面天の川辻の方ばかり氣を付て居た處ろ、不意に横手の方から敵が来たのだから、あわてたに無理もない、夫ッと起て出やうとするど誰か帯を持って行て仕舞て帯とき裸で出る陣にも行ず、又或は馬に跨ったが、ちつとも馬が動かない、よく／＼視たら未だ紫いであるなんぞといふさわざ、其内早切立て突立られ手を負ふ者數知れず大將水野多門助はさすがに紫いであるなどには乗ない、馬を引出させひらりと乗たから、是は賊心と見て居ると一かく蹴入て驅出すや否、どん／＼後ろへ逃て行くので「己れ逆法者返せ／＼」と大音に聲をかけて森下幾馬追かけ來り、後ろから突出す楯に馬の太腹グサとやツたので馬は刎出す主の水野は眞逆様にどうと落た、是は大變と五六人踏止り森下を防いで、二三人打れた、其間に水野は漸やく遁出し、いづく共なく逃て仕舞ひ先づ是で此陣所は難なく没落と相成りました、さて又彦根の方へ向つたは橋本尾崎などの連中同じく、まともに切込だて彦根勢の周章狼狽矢張り紀州

勢と同じ様、防いで討るゝ者は少くなく、逃る所を後ろからやられたのが多かつたそう、頭立たる人々は吾先にと逃去る中、秋山右膳といふ物頭は逃れて馬に鞭打ち一散に出やうとする所へ、追かけて参つたは天誅組の山崎吉次郎左右に兩刀を打振て、ヤツと一聲かゝるが早い右の刀ひらめくと見へたが秋山高股切込れ馬より下へとうと落た、最も馬の上へ落やうはないが、其時又左の刀がびかりツと光るや否、秋山の首ハツたりと落ち是で先づ此手も皆敗れ兵糧武器は固よりの事、旗馬標其外共盡とく此處へ捨て、行たので、天誅組は勝どきを揚げ兩手合して悠々と十津川郷へ引揚て仕舞ました、此時また藤堂家の陣營では、ブツと遠く離れて居たので、かやうな目には遇すに済みました、又其代り語つまらない損をしたと申しますは、明日は三手總一同に攻かゝらうといふ約束で其總指揮役は藤堂家と役割が定まりました、そんならば今宵藤堂の本陣で徹夜して兵糧を焚出すにより御兩手はもつくり、休息なさるやうといふことで、紀州彦根の兩陣は、グッスリ寝込で仕舞た處ろ、かういふ目に

遇ひましたので藤堂家の方の陣では、そんな事とは一向知す明日の用意を致すのだといつて、大さわざをして兵糧の焚出しをやつて居ると夜半の頃と相成た時、遠かに下市の方に當つて大層なさわざが聞えます、さては彦根か紀州勢か抜がけして戦を初めたと見るは、よし是から出た所ろが間に合ふまいから朝になつて、もろりと出かけやうせと夜の明るのを待て、そろ／＼出かけて見た所ろ、イヤ抜がけ杯でなく味方の兵の大敗北で何だ是ちやア總攻所ろか、今日は其あと始末だらう、して見れば兵糧の焚損をしたかと、藤堂家の人々も大こぼしに愚痴をこぼしたと申しますが、成ほど是は賊につまらなかつたでございませう。

(其三十五) 和田の合戦

下市の敗北で翌日の總攻つひにおチャンと爲て仕舞ましたもろ、藤堂初め郡山高取等の人々は只此まゝ拾置事、何分にも残念だからと折々兵を出しては戦ひ

を挑みますので、大した烈しい戦ひはないが、一寸した小せり合は度々ござい
 ます、そこで天誅組も一ツ所ろには居らんで、あちこちと陣を轉じて居た然し
 兵刃何共仕方のないは京都の方が盡く變つたので、雖ももうお味方にと應じ
 て来る者がないから、一戦に五人なり七人なり討死手負が出来ますれば、それ
 だけ人数が減って仕舞ばかり最初から今日迄一度も負戦はございませんけれど、
 人数は初めより餘ほど減じて居る聞ば段々幕軍の方は、あとから後詰が来ると
 いふ事、殊に又戦將吉村寅太郎高取攻の夜誤って味方の鐵砲に當つた劍が漸や
 く直ると、又此間の小せり合に折悪く再び流丸中り大した創ではないけれど、
 取敢へず療治にかゝり其代りは那須眞吾が萬事督して居るやうな陣、是等の事
 から何分兵氣が振はなくなつたもゑ、藤本、松本等相駈して一同を自分達の居
 所に呼集め「さて各々方時の至らんといふものは、又どうも仕方のないもので
 京都の方が、スツカリ變つた所ろから一向味方が集まらず約束をした平野次郎
 殿も、どうした事だか音信不通此上は只此處に居て空しく討るゝもつまらん

る運を天に任して討て出で死ぬ者は死に逃るゝ者は逃れると致さう、何にせよ
 中山卿をさへ、どうかしてお落し申せば、あとは大抵死でもよい今は空しく死
 んやうでも他日時来りて幕府を倒す折の確には爲るであらう各々左様ではござ
 らんか」といふので一同皆承知致し然らば一つやつて見ませうと此處に陣一
 決となり乃ち總勢を引まとめ、天の川辻の陣を引拂ひ釋迦岳大峰山上などの半
 腹を越へ、和田村といふ所ろに参り藤本、松本、那須、池等くつひふの人々一
 ツに隊をなし、吉野の前へ向つて進み其方へ敵の氣を引つけ置て、中山卿以下
 近習の面々は紀州路へと落かゝりました、すると彦根の隊將積山圖書先度の敗
 軍で一旦逃げたのが、又引返して隊を整へ今此道へ差かゝつて来たので、此處
 を打見やり、さては中山殿ござんなれと、すさまじく追て参りましたもゑ心得
 たりと、近習の面々大返しに取返して返し此處に一搦の激戦を開くと、大將中山侍
 従に於てもけふを限りと思し召たか、馬上に一刀拔放し大勢の敵中へ馬を驅ら
 し切込で参られ、忽ち四五人を切て落した、お公卿様でまだお年若に渡らせ

られながら此お働きをなされたとは實に珍らしいお方でございます、是を見るより彦根の士大将伊藤彌右衛門といへる者、二人の若者を左右に従がへ中山へ切かゝらうとしたから、お側に居た半田門吉郎槍を拜取て引返し來り「ヤア推参なり控へ居らう」といふ聲諸共持たる槍で、ヒウと横に引拂うと、忽ち若徒一人は兩足蕪られてそこへ倒れた、是はと思ふ内又叩き付た一槍に又一人も倒れたので、伊藤彌右衛門大いに怒り勢ひ猛く切込で参るを門吉カツリと槍の鍵にからみ忽ち刀を巻落した、すると彌右衛門も、きかない男で其まにひらりと身を開き、柳槍巻をば引攫んでヤツとばかりに引寄ると、さすがの半田思はず前へ、引倒されそうになりました所へ又引返して來た天竺組の一人鶴田陶司道徳が横合から槍引しごき今力を極めて引寄居る伊藤の横腹ヲと突たので、彌右衛門どうとそれへ倒れ、再び突出す半田の槍で、つひに此處に相果てました、是で最早追て來るものもないから中山舞初め半田鶴田等離なく峠を打越して、熊野路の方へと落られました是からあどが越家口の大戦争藤本松

本、那須等の諸將が總討死でございます。

(其三十六) 藤本の碑石

大和の國と申す處ろは昔し山跡の國と唱へました位で山の事に關係した古跡ばかりあります殊に紀州の方へ出ます處ろは吉野山を中心として左りは大臺ヶ原叔母谷右は例の大峰山又前鬼後鬼などと實に嶮難まる處ろ昔し此邊の勤王家が大塔宮を奉じて旗を揚た時一旦敗れて紀州へ落ちるに此邊を通りました然る處ろ今又此勤王家が中山舞を奉じて旗揚を致し同じく敗れて此處を落たまふといふは亦不思議な因縁でございますさて此處で藤本總裁が中山舞を落しておいて、潔よく討死するといふ一席でございすが餘りそれではあッけなふございますから一寸此處で只一席其死後の關係を申し上げませう此一舉で總裁の隨一たる藤本津之助が都に居ります時は別號を鐵石と申しまして傍ら書師をして居ました、すると同時に別號半牧方士といふ亦一人の書師があッて藤本とは誠に

親しく致し俱に勤王の事に心を砕いて居た此半牧本名は村山秀一郎様といつて越後國の人であります、さて其内故郷越後に據ころない用事が出来て越後へ歸つて仕舞たで此の舉には出でこないました、そこで藤本事を擧る時妻子香族等を皆其方へ落して遣たので秀一郎異議なく引取り手厚く其遺族を養つておいた處ろ其内藤本等はつひに討死したといふ事が越後の方へ聞かれましたから秀一郎大に嘆息し然らばどうか藤本の爲めに吉野へ碑を建て大和一擧の主謀者は此人であつたといふ事を後世に遺さうと考へ付ましたが時が悪いのでそれが出来ずに居た處ろ時なる哉戊辰の戦争となつたから、サア我輩の志ざしは此處だと大いに勤王の徒を集め願ふる官軍の便利を致しましたるもる會津の兵士大に怒り官軍のまだ来ない内に大軍を以て村山を取圍みましたので捕へられては残念なりと秀一郎覺悟を定め立派に切腹して仕舞た其内官軍追々練込み會津の兵を打破り村山秀一郎事 朝廷よりお召になるといふ書付を以て来て見ると、もう切腹の跡でござましたもる、皆々大に力を落した但其代り其子の恒次郎へ終身

を賜はるといふ事になりました然し恒次郎未だ幼年でございしますので東京へ参り編者の家に居て色々勉強致し編者に一つか二つか年長位ゐの事もある至つて親密に交つて居りました、處ろ是が亦感心な志ざしでどうか父の志ざしをつぎ藤本の碑を建やうと或年大和國へ遊歴に出ました編者も此時分は二十歳前後の壯士でございしましたから同じく遊歴に飛出して行き殊に藤本は編者の先代と懇意にした者村山は亦右の通り親友もある一緒に京都邊の有志者に助力杯を頼みました其内編者は又九州邊を遊歴致し再び京都へ歸つて聞くと、かの碑も漸やく出来上つて恒次郎は大和上市の船津某といふ家に居るといふから参つて尋ねました處ろ同人は病氣で寢て居りましたが大層喜んで編者に向ひ「さて京阪の諸君が御盡力で近々建碑式を行ふ迄に運んだから、どうかそれ迄に全快して出席する心で居ます、それから此吉野川の水源叔母谷といふ邊は餘程景色のいゝ處ろで窟などがいくつもある由大昔し役行者が修行をした處ろで大塔宮も此處へ隠れられた事があり近頃中山卿も隠れたといふ處ろだから行て地形を見度思

ふが、とても行けない」といひますので「それなら僕が見て来て話しを聞さう」と
是から二日ばかりかゝつて其處へ行きました此處は大峰山の真下になる處で
所謂大壑ヶ原とて今日でも仙人の居るといふ處の横手妹山香山といふは即ち
此處の事、かの上るにも「古への神代の昔し山跡の國は都の初にて妹脊の始
め山々の中を流るゝ吉野川塵も芥も花の山實に世に遊ぶ歌人の言の葉草の捨所
ろ」などいふ名文句もある其川浴に岩石織々ど、いくつかく窟がございま
す牡丹窟、菊花窟、聖天窟、不動窟などいふ類、人家も何もない處ろですが只
一軒小さな小屋があつて窟案内といふ札をかけて居りますから先づそこへ行て
案内を頼みました是はマア自分の遊歴談して恐れ入りますが幾分の此事件に關係
した事でございませうから、もう少々御辛抱して御覽を願ひます。

(其三十七)

同

上

さて其窟へ片端から這入て見ました處ろ牡丹菊花などいふは皆鍾乳石の凝固で

ございまして天然其形ちに出來て居るは妙です其中不動ヶ窟と申すは這入るに
中々支度がかゝります先づ一寸餘の松明二三本と岩洞提灯一つとを持って行な
れば、とても奥迄は極められませんが、そこで仁田四郎忠常を氣取て段々這入て
見ますると、イヤどうも凄く處ろで、よくこんな中へお隠れになつたものと大
塔宮及び中山脚が御辛苦のほど察しられました、凡そ一丁も這入たかと思ふと
メツと低くなりなすので案内者の携へ來た繩梯子を掛け降ると即ち穴の底で
ございませうが、四方暗黒咫尺も分らんで只雷の如き響きのみ致しますから岩洞提
灯へ火を移して向ふを照すと奥に丸木の橋があり其上に一條の瀑布が懸り言
に絶た凄く景色此瀑には不動様の姿が見るので不動ヶ窟と名付たと、案内者
が申しますが、成程そんな姿が見ゆる、といふと不思議だが實を申すと不思議
でも何でもない案内者の松明と繩梯子を持って居るのが瀑に映じて見ゆるので然
し何しろ珍らしい處ろ瀑も随分諸國にあり窟も随分諸國にあるがこんな處ろは
先づ無類でございませう是等をスツカリ見極めて歸り其話しを恒次郎に聞せた

處ろ恒次郎大に喜び「先づ是で行て見たも同前だ、それに此二三日は體もよいから建碁式にかゝると申すので編者は別れて東京へ歸ると、すぐかの船津から手紙が参つた開いて見ると即ち恒次郎事編者と別れて吉野へ上り首尾よく落成を濟せると又病氣再發し、つひに死去したといふ報知實に編者も無常に驚ろきました然し志ざしは遂た後だから先づ遺憾はございませうまいが先づ是が山中卿大和落の辛苦を知る一端と村山父子義の爲めに生命を擲つた一端でございませう只今大和巡りをなさる方は藤本鐵石の碁とあるを御覽になつて、ア一立派な碁だと仰しやる方もございませうが其由來は皆御存知あるまいから此處に一寸申し上たのでございませう、さて先づ右の如き艱難の處ろを中山侍從忠光卿には金枝玉葉の身を以て風に沐し雨に浴し辛くして逃れられたと申すは中々容易ならん御艱難でございませう、お供を致したのは島浪馬上田宗兒伊吹周吉其外若徒三人以上七騎でございませう是が又妙な譯で昔しから落人といふと必らず七人に限りませう先づ源頼義の奥州落が七人次に頼朝公の石橋落が七人此頃三條公

の長州落が亦七人今中山卿の大和落が矢張り七人始終相場のきまつたは不思議な譯で、さて是より熊野に参られ、それから一巡してそつと大阪に入り土佐堀常安橋の坂田屋市次郎といふ家から船を一つ借り長州指て下られました。此方は又藤堂伊非紀州などの軍勢和田村で合戦が始つたが何處へか敵は退散したといふを聞て、よも中山卿とは心づかず然らば早く中山殿の本陣へ攻掛らうと、一同に押出し「何でも高く旗の手の見ゆる處ろが中山殿の本陣であらう」と天川辻の輿總門の邊の邊へ、どつと叫んで押入て見た處ろ、こはそも如何此あたり、敵などは影も見えず只旗ばかり山の上に翻へつて居りますから「何だペラ棒ナ素股を食たか」といつたかどうだか知らないが何しろ大に失望したと申します、すると下市邊に殘つて居た高取郡山などの陣から使が参り浪士の一組は吉野の脇を通り伊勢路の方へ行つつもりと見に鷲家口に陣取て居る様子だと詳らかに注進がありましたと、そんなら今度こそ總攻にしやうと總軍悉く此處を引拂ひ伊勢路の方へと追かけました慈々此次が鷲家口の大合戦烈士の總

討死でございます。

(其三十八) 藤本松本の終り

中山忠光卿主従の一組、もう落のびた頃と思ひましたも、是で早心がよりなしと鷲家口の中程に踏止まりたる天誅組、死ぬ者は死に逃れる者は逃れやうと約束の上、其兵を三つに分け、サア来い来いと待構へた真中の一組は藤本津之助、松本謙三郎を大将として吉田重藏、原田龜太郎、保母健、水郡小隼人等左の方の一組は吉村寅太郎、伴林六郎を大将として森下幾馬、野崎主計、安積五郎、酒井傳次郎、岡見留次郎、瀧崎豊等右の方の一組は那須真吾池原太を大将として穴戸彌四郎、林兵吉郎、勝將藏、山崎吉次郎等死を決して待構へ居ました、扱彼方は幕府の大軍先づ紀州家の大将水野多門同じく土佐守、柴山太郎右衛門、金森彌右衛門、津田楠左衛門、西又六郎續て柳本の林廉之助小泉の發達新八郎狭山の梶山民部高取の荒川浪右衛門等は真中指て進み来り、又藤本家の

大将藤堂新七郎同仁右衛門同玄蕃分部十郎左衛門、金谷健吉、藤本左源太などの手は左の方へと詰寄せ参り又井伊家の大将永野伊豆真名筑後木保東馬佐々木十郎、大館孫右衛門、野原勘右衛門等は右の方へと攻かより鐵砲烈しく打立て其下より槍を入れ三手齊しく戦ひ初めたが、互に今日を決戦なりと茲に一大激戦とは相成りました、扱て斯なると是非の無い事は俗に云ふ衆寡不敵で殊に鐵砲玉藥の充分あるのと誠に手薄になつたのは大層勝敗に關係して来ますで、さすが忠勇の天誅組も是には如何とも仕方なく目叩く間に大勢討れて仕舞ました、それに紀州の軍勢は最も多勢でございますも、四方より取包み柴山太郎右衛門、金森彌右衛門は左の方を烈しく突立て津田楠左衛門、西又六郎は右の方を續續に打惱ましたで吉田重藏、原田龜太郎、保母健、水郡小隼人等或は討れ、或は生捕れて仕舞ましたから、もう是までと藤本津之助鐵石齋、若徒瀧浦元吉と只二人切先揃へて津田楠左衛門の手の中へ面もふらずに切て入ると津田の組下大橋喜馬太十餘人の槍組を揃へ、どつと叫て突かゝるを藤本いらつて

二三人前後左右へ切倒したが、其身も餘多の手を負たので、ハツマリ其處へ倒れたなり竟に息絶て仕舞ましたを大橋喜馬太馳寄て首を取る國浦元吉も同じく供に亂槍の下へ倒れて仕舞ふ、松本謙三郎遙かに之を見て、いで吾も最期の一戦に及ばうと槍押取て金森彌右衛門の手を突抜け一息ついて居る折柄、飛來る一の流丸に眉間を少しかすられたもゑ、血流れて片目に入り、とても早かなはんと思ひましたから、とある松の木根へ腰かけ懐中の矢立取出し懐紙へ打附書に「君が爲めみまかりにきと世の人に語りつぎてよ峰の松風」と辭世の歌を書藏し之を松の枝にくよりつけ其下にて腹切て相果てました、紀州の兵士之を見付「此處に一人浪人組でも頭らしい者が自殺して居る何だか辭世が書てある」と其歌を見ますと歌の末に源の衝としてございますから、サア誰であらうと段々詮議致しました處松本謙三郎だと分り、それなら先討討たのが藤本で今又此松本の首を取る是で先づ總裁二人は當手へ得た、是はめで度事だぞと勝どき勝どき勇まれたと申しますが是は如何様敵の情では最もの事でございます。

(其三十九) 吉村伴林の戦ひ

藤本、松本以下の一手が紀州の兵と戦つて盡とく討死致しますと、同時に吉村伴林等の一手も藤堂勢と大いに血戦に及びました所が、此處は村のはづれでなだれの坂道でございますのに、勢ひ烈しく憤闘したので藤堂思はず突立られ、一丁餘り坂下を退き先づ此處で陣を立直して居る様子、此方は吉村伴林等先づ敵兵を退退ぞけ、ホツと一息ついて見ると吉村寅太郎は腰の骨へ、いつの間にかそれ玉が中つて居て氣が付とどうも腰が立ません、伴林六郎も此程より少し脚氣で居た處ろ今烈しく歩いたので此處に至つて何分足が利ない、そこで兩人もう是非がないと覺悟を致して居ります所へ、安積五郎、森下幾馬、酒井傳次郎、野崎主計等此所へ集つて參ると其時主計進み出で「さて此處で各々へ一言申し上る儀がござる、と云は外でもない死ぬのは何時でも死ねますから先づ一つ逃れる方向を取て見ては、今恰度敵方は兵糧をつかつて仕舞て休息して

居る所もゑ、此間に退けば退けるかも知ん、そこで今此山を越すと慈恩寺村といふへ出ます、それから三方に道がござるで運送る迄やつて御覽なされ」といはれたので皆々も然らば、ともかくやつて見やうと手負はそれく介抱して、ごうかかうか山を越して仕舞ました、藤堂方の軍勢は遙かに之を見て、それ敵は逃れるを逃すな漏すなど下知を傳へ、そこへ行くと大勢だから自由なもので八方に立分れ山上下から追かけた、野崎主計キツト見返りこは一大事と足止め先の近道を皆々に教へ、己は農兵を引まよめ其所へ止まつて追來る敵に渡り合ひ、暫らく防ぎ戦つたが、つひに敵ヶ所の手創を負ひ氣絶してそこへ倒れ暫くして目を開いて見ると、いつの間にか繩にかけられ、もう生捕になつて居るから、ア！最早仕方がない然しあとの者は如何したかと向の方を見ますると皆味方も討れて仕舞たか森下幾馬只一人慈恩寺村の藪を小橋に取り、ふみ止つて殿りして居る様子それを遠目に眺めながら、本陣の方へと引れて仕舞ました、さて森下幾馬茂時は率ゐて居た手下の者も残らず討れてなくなつたもゑ、只一

人そこへ止りサア誰でも向つて來い、冥途の土産に一勝負面白い試合を致して死なうと、大刀真向に振かより身構へて居る處へ藤堂家の土西座源右衛門槍押取て進み近より「天晴天晴組の勇士とお見受申し津藩西座源右衛門推参ながら見参致さう」いふ聲諸共突てかゝるを心得たりと、幾馬茂時迎へ合せて足掛を計り人交もせず只二人火花を散して戦つたが、何せよ敵刻の戦ひに身體疲れて居りましたから、さすが勇士の森下もつひに討れて終りましたは又どうも是非ない事でございました、そこで此間に左りの道へ逃れたは安積五郎に酒井傳次郎一息ついて居る處へ一方を破つて又逃れ來た、磯前豊、岡見留次郎、てうご此處で落合ましたるもゑ打つて山向ふへと下つて行た、又右の道へ逃れたは吉村寅太郎、伴林六郎の二人吉村はあれほどの勇士であるに仕舞際の血戦が割にすると、烈しくないと申し召方もございませうが、是は其最初から手創直ると又負ふといふ譯で、此時も十分に働けなかつたのでございませう、さて是から安積以下の召捕と吉村等の終りとなるのでございませう、それは是より

兩三日立てからの話してあります、矢張り兩三日あとの事に致し此日の合戦で最も烈しかった、那須池などの働きの方を次に申し上ると致しませう。

(其四十) 那須池の戦ひ

鷲家口三ヶ所戦争の中最も長く、最も烈しかったは那須池などの連中と、井伊家とのやり合で井伊家の隊長は永野伊豆、貫名筑後、木俣東馬、佐々木十郎、大館孫右衛門、石原勘右衛門等、天誅組の方は須那真吾、池藤太、穴戸彌四郎、林兵吉郎、勝將藏、山崎吉次郎等互ひに此處を先途として、一足たり共あとへは引かす追つ返しつ戦ひしましたが、何分衆寡の違ひがエライので追々日暮に至る頃には、もう天誅組残り少なくなり手當り任せ、八方に荒れ思ひひくに散りました、其中山崎吉次郎山の向ふへ下らうとする所を追かけて参つたは井伊家の土掘村五郎次槍を揮つて突てかゝる、心得たりと言次郎引返して渡り合ふ、同時に林兵吉郎山崎へ加勢しやうと引返すを見、井伊家よりは渡邊吉

右衛門亦之へ討てかゝり此處で二ヶ所に一騎打が始まる、然し如何せん天誅方は疲れ果て居ります、つひに山崎吉次郎思はず石に墜いて、どうと後ろに倒れる所を掘村五郎次が突掛た槍で倒れむべし、此處に落命しました、遂かに之を見た林兵吉や、山崎は討れたなと思たので力が緩んだか、渡邊吉右衛門の切込一刀受損じて竟に之も此所に最期とは相成りました、此間に向ふの陣へかけ抜た勝將藏初瀬路の方へ走りまますを追かけて参つた、杉島丈右衛門、若津武三郎といふ二人が左右から取圍んで突かけた、將藏今は死物狂ひで二人を相手に決戦致し、二人へ手創を負せられたれど何分矢張り衰れて居るから、つひに是も力盡きて最期を遂る事と相なる、穴戸彌四郎キツと見張り、よし同志も大抵終つたな、アア一つ潔よく討死して一方の血路を開いてくれ様と、血刀打振り飛で出で川添の堤を駆行く、井伊家の土安尾半太夫槍を捻つて突かける彌四郎少しもたぢろがず、突出す槍を發矢と討たる方に槍はオラリと落たで、こは仕舞たと半太夫一足あとへ飛しさる拍子に足を踏はづし川へぼちやりと落した、

彌四郎之をキツと見たが強て討つ氣もなかつたか、打捨て向ふへ又驅行く。此時遙か向ふの方の鎧砲組から、五六發打出した中の其一が驅行く矢戸の裏へ當つたので思はずよろけて、是も川へごぶりつと陥つた處ろへ飛で来た井伊家の士天方留之進といへる人槍取のべて、エイと突くと今浮上つて来やうとした矢戸の胸元へ十分に行た、然し彌四郎さすがに勇士だから息絶際に太刀振り上げ突れた槍をカッシと切り折り、折れた槍の柄諸共に深みへ落て、其まゝつひに最期と相なりました、サア是で愈々もう、味方のこりなくなつたから那須真吾と池藏太は、いざ是から兩人で敵の中央を向ふへ突切り一人討死するひまには一人はどうかして此場を逃れ、今一度中山公のおあとを慕ひ、お目通りかなつたらば今日諸烈士が討死した模様をば委しくお物語り申さうではないか、よしどつちが死ぬか、どつちが逃れるか分らんが先づ運を天に任して、一つやつて見やうぞと此處で兩人左右に立別れ敵の真中へと躍り込だ、サア是が愈々戦ひの結局でございます。

(其四十一) 同上

讀まきましたる大和一擧も、今日で愈々戦ひはお仕舞でございます、さて今左下に立別れた那須真吾と池藏太、中にも那須真吾と申す人は、いつぞや申し上ましたが天狗と間違られた位の人で、鼻高く目鏡ごく身の長技群に勝れて居りますに萌黄絨の具足を着け、白綾たゝんで鉢巻と致し三尺餘りの大刀を真向に振かざした體、どこから見ても非常にすぐれた剛勇と見えますから、近寄敵も、ぞつと怖れ道を左右に開いて通す、得たりと真吾荒に荒れ井伊家の第五番隊、大館孫右衛門の陣中へ、まつしぐらに躍り込み右と左りへ七八人目叩く内に切倒し隊長大館の床机前へ會釋も無く躍出た、大館怒つて床机を離れ刀の柄へ手をかける所へヤツといふて切付た、大館さすがに飛しざり抜合して、二打三打受流したが及ばない、大剛無双の那須が一刀何でう受止るべき、受損じた孫右衛門梨子割に切付られ、アットいつて後ろへ倒れ其まゝ息絶た様子真吾につこと打

笑ひ、先づ是でいゝ道連は出来たと其まゝそこを驅抜けて川岸の板橋に差掛り一息ほつとついで居る時大館の組の鐵砲方で川上順次郎、佐藤良太郎といふ二人左右から鐵砲取て、ねらひ打に致さうとした、眞吾見るより「心得たりサア打なら打て見ろ」と大太刀上段にふりかぶり眞一文字に飛來つた、此方の二人ねらひはねらつたが是には少し驚いた、鐵砲持てねらつて居る方へ、飛で來るとは大膽さも非常だから是に氣後れした物か、川上順次郎未だねらひの定まらん内にあわてゝ引金ひきましたら、飛出た玉は眞吾の上を遙か越して行て仕舞た、是はかなはんと順次郎は鐵砲擔いで逃げて行く、此時佐藤良太郎の方は十分ねらつて放ちますと、過またす那須の胸元を打た是で倒れるかと思ふと矢張り眞吾は大刀振て飛で來るから、ヤ良太郎も驚いた是はかなはんと亦同じく鐵砲擔いで逃出すを「己身怯者待居らぬか」といひながら眞吾が切かけた一刀、良太郎肩先ザツンと切られ、どうとそれへ倒れるを見ると眞吾も同じくばたりと倒れた、順次郎こわく立歸つて見ると眞吾は早死で居るが良太郎は漸く氣が

付た様子だから介抱して連歸つたと申します、然し何しろ此眞吾が討死は實に美事な最期でございませう、土地の百姓も大いに感し立派な墓を建てました、すると幕府の役人を見つて「賊の墓をなせこう立派に建たりなぞする早速取捨てゝ仕舞へ」といつて引抜て溝へ打捨させた、そこで翌日朝見ると、イヤソと故の如く建て居るので「ソリヤ衆傑の墓を崩したので那須殿の墓が出て建直したと見ゆる、こりや大變だ」と大さわざをするので役人も少し氣味が悪くなつたか、それぎり黙つて歸つたと申しますが、あとで段々聞て見ると諸國遊歴者らしいと見ゆる一人の立派な武士が通りかゝつて之を見付け早速建直させたのださうです、然して此武士は何者だらうといふと是を現今伯爵に叙せられた田中光顯君のなされた事だと申す人もございます、扱又池田太に於ては此間に傍の山を越て河州路の方へ逃げやうとしたが赤地の陣羽織に十文字の槍といふ中々目立つ出立でございます、井伊家の士渡邊市兵衛、待てつと後ろから突かけると槍術達者の土州壯士、中にも秀でた藏太の事もある何を小瀬と槍を合

せ一つ搦むと見わたるが、忽ち市兵衛の脇の下を十文字の槍で突切た、然し市兵衛も中々剛い屈せず進んで参りますを、再び探出す池の槍今度は肩骨がツキと突たで、市兵衛竟にどうと倒れた、それと見るより人見吉右衛門といふ、朋友續いて追すがるのを藏太振向様に引拂った、其勢ひに人見の槍は忽ち向ふへ刎飛され、是はと驚いて一足下り刀の柄へ手をかけて見ると、いつの間にか池藏太は傍への藪へ飛込んだ、こは残念と探したが知らない、どこをどうくぐり抜たか、どうくぐり池一人は首尾よく此戦場を逃れ中山郷のあとを追て、中へ下ッて仕舞ました、先づ是で此戦は終り、あとは其のこつた人々等の末を申し上ると致しませう。

(其四十二) 諸士の捕はれ

お話は少しあとへ戻りますが、かの藤堂勢と戦つて陣を破ひ四方へ散りましたる吉村伴林などの一手、中にも名に聞けた勇士安積五郎、岡見留次郎、岡前豊

酒井傳次郎以上四人の者に於ては山の向ふへ下りまして、一息ほつとついた處ろ何分疲れ果て居るので最早歩く勢ひもございませぬと云ふ、或一軒の百姓家へ這入て其夜はそこへ宿りました、すると此方の藤堂家の人々昨日の戦争勝は勝たが、名ある敵は一人も討たない聞は紀州勢彦根勢皆立派な敵將を討たといふから、此方も一つ功を立んければ成ん、夫八方へ逃た者を探せと、遂かに人数を四方へ出した中にも町井八郎といふ人十五六人の壯士を率ゐて、今其安積等の宿つて居る百姓家の前を通りかゝり、ふと四人の休息して居るを見付是ぞ敵將に相違ないと、やにはに中へ飛込で四人へと組付た、四人の所へ十六人だから一人へ四人當だ是ではどうもかなひますまい、殊には疲れて居る人達だから我念ながら押伏られた、夫でもさすが勇士の事二三人は取て投たから町井八郎それへ進み出で「各々方は天誅組で名ある方とお見受申すが、もう新様になつては是非に及ばん運の末と、お断念なされ拙者は藤堂藩の物頭町井八郎と申す者失禮ながら軍陣の事ゆる繩打は御免な敷る、サ潔よく繩を受けて下され」とい

れたので此方も仕方なく、つひに皆纏にかゝりました。さて此道中より少し後
れて此邊へやつて参りましたが、吉村寅太郎と伴林六郎、吉村は此程より度々の
負傷で大に疲れ居りまして、歩行に餘程困難の様子だから或山麓の百姓家へ行
て頼み、先づ當分此處に隠れ居る事に致し伴林だけ獨り別れて、河内へと進入
しました。處が此伴林も此程より少々脚氣であつたもる遠路に困つて居つた内又
山を越たり何かしたので早一步もあるけません、そこで木樵などの居ります小
屋へ参つて休息を頼みますと、落人と見ましたから木樵等十人ばかり寄集まり
やにはに六郎に組付て来た六郎はと思つたが、足が立たないから仕様がござい
ません、残念ながら賤男のために、つひにやみく生捕となり大阪奉行の方へ
送られて仕舞ました、さて吉村寅太郎はかの百姓家に兩三日泊つて居りますと
とうと其隣りが瀬興丁で山瀬を一つ持て居る様子だから是へ段々頼み込み大阪
迄やつてくれれば多分の禮をするが、といふとそんなら一つやりませうと此處
で其山瀬に載せ二人の男之を擔いで大阪の方の路にかゝり、一の峠にかゝつた

時「時に旦那へ此峠を越て仕舞と、もう家も何もなくありますから此上で食
をやつて参りませう」と瀬屋が勤めますから、それがよからうと承知致し其峠
へ上りつめて見ますと、なるほど一軒の家があつて一人の老婆が店先に坐り、
水菓子、駄菓子、麦などを賣て居る體、そこで此奥へ瀬を仰し「旦那少し出
てお休みはどうです」「イヤ己は此中でいゝ然し飯は己も食ふから早く支度をし
てもらをう」「へー宜しうございませう、オイ婆様飯の支度をお頼み申すよ」「何でも
いゝや鯛の附焼でも芋の煮附でも早い方が一番だ」といひながら瀬丁は行て仕
舞吉村は又瀬の中へ坐り込み、懷中から手帳日記の類又は友人の手紙などを取
出し、之を取まそめ初めた瀬丁は別にする事もなく至つて持のが返屈だから、
裏手の井戸の傍へ参り流し板の處へ腰をかけ、婆様は一生懸命に鯛を焼て居
りますのをながめながら休んで居りました、此あととは次回。

(其四十三)

吉村の最期

茶屋の婆様頼りに火を起し鍋を焼て居りましたが、一寸あたりを見廻して手招きを致しますゆる駕屋兩人参つて見ますと「チイお前様承知で載てお出のかへ彼はたしかに天誅組のお頭だよ」「エーそれは承知して居るが大坂迄首尾よく送り附ればの」「澤山禮をくれるといふから怒と相棒でやつて来たのよ」といふと婆様いやに笑ひながら「そりやアお前様とてもだめだよ」今朝藤堂様の御人数がね此處へ一寸お休みになつて、直此先のお寺へ陣取りをなされたよ、さうして是から天誅組の方々探んだと仰しやつて居たもの、是からお前様出かけて御覽直とつかまつて仕舞わね、澤山な禮所るかへ何にも取れるこつちやないよ」「さうかそれちやア仕様がねへな」「どうしたら、いふだらう」「何お前藤堂様の御人数は此先にきつとお宿りだらうから、そこへ一寸断人してお出な、さうすりやよ幾らか褒美が取れらア」と意地をつけられましたので、御丁怒まぢ心が變り「そんなら相棒さうやつて仕舞うかへ」と一散に驅出した吉村寅太郎左衛門な事とは、心づかず色々書類を取揃へて見ると京都大阪あたりの有志連中から

よこした手紙が段々あるので、ア一若し此身が此等でつかまれば此手紙の爲めに、あたらし有志者を連累させて仕舞ねば成ん、どこかで焼捨てても仕舞度ものと考へながら外を見ると、バヤ／＼と馳來る數多の人数、さては追手に出遇たかと思ふ間もなく一人の兵は瀕の所へ飛で來たから、坐つたまゝでもさすがは吉村小柄を取てヤツと投ると向ふ腰へ打込だから兵士は、アツと後へ倒れ是に恐れをなしたのか、あとの大勢は一ツ所にかたまり只わやくさわくばかり誰も近よりませんゆる、吉村乃はち其書類を集め、ツン／＼に引張破り押まどめて綿の如くに致し、もう是で宜しいと表の方をキツト見ると一人の隊長進み出で「拙者は藤堂家の五番隊長金谷健吉と名のる者でござるが、同役町井八郎事一昨日此あこの村に於て安積五郎、岡見留次郎などいふ人々を尋常に捕へましてござる、貴公も必らず由ある方とお見受申す御尋常にお覺悟なされて宜しからう」といふと吉村ホツと息して「さては安積等も捕へられたか然らば早是迄の事、身共は此度の擧に總裁をなしたる一人吉村寅太郎重頼である」と

いふや否、短刀引抜き破れのこりの手紙を取て口の中へ丸め込み、腹一文字にかき切て襦の中へハヤリ倒れるを見済し、健吉すかさず一刀引抜き其まゝ首を打落した、此時吉村が切腹した短刀は金谷健吉分捕と致したが、敵ながらも傑の最期を遂た品だからといつて、大切に秘藏して居りましたが一士族の家に
 おくよりは萬代不朽の所へおく方がいと、つひに金谷家より致して清國賊
 肚へ奉納致したで今猶九段の遊就館に、吉村寅太郎の短刀と書て、ナヤンと陳
 列してございますから、同館へお遣入になつた方は定めし御覽になつたでござ
 います、實にすばらしい太い短刀で、ア、いふ物を差て居た位だから吉村の
 大勇士であつた證據はあれを見ても大抵知れる事でございます。
 先づ是で鷲家村に遣つた諸士が討死の一段はお仕舞となりましたが、肥州路か
 ら中國へ落られた中山郷以下七人は長州へ送付れると、てうど鷲家口を透れて
 来た池藏太も追て参り此處で先づ藤本、松本以下が戦死の模様を委しく聽かれ
 主従暫らく潜まれて居る内亦一人かの伴林と共に召された、北島四郎といふ人

同じく亂軍の中を斬抜け此處へ来て、御一所に居る内七人の人は大抵皆死して
 仕舞た中にも池藏太は九州へ行くとて、玄界灘を通つた時折悪く難船致して死
 だ由にござります、さて大將軍の中山侍従忠光卿は長州深川の在に居れました
 時、不圖急病發したまひ、綾羅木村といふ所で、つひにあへなく終られた
 した、若し此時御喪去にさへならなかつたならば、維新の際には必らず大總督に
 も任せられる方でございますましたらうに惜い事でありました、そこで一人北島だ
 けが生のこり維新前後に又々色々と盡力されました所から、先年特に華族に
 列せられましたが猶形の際ぬのは澁谷、伴林、安積等でございます、是は但馬
 一擧の生捕と共に後京都六角に於て殺されました、そこを一つ申し上るには但
 馬一擧を申し上なければ分りません、是よりあと六七回但馬一擧を申し上
 ると致しませう。

(其四十四) 平野の計畫

大和一擧に應じやうと云て、少し後れながらも初めましたは、但馬の一擧で
ムいますが、地利がわるかつた所から、さまで愉快の戦ひもせず、つまらな
く亡びて仕舞ましたは、誠にどうも可憐事で、其くせ其人々はと云と、平野二
郎、川上彌一、美玉三平、戸原卯橋、其外白石廉作、本多小三郎など、大和の
方の連中に比べて、さして劣らん人々でムいます、然しどうも左様な陣で、餘
り面白い事無しに終て仕舞ましたし、亦傳も餘りさへませんから、只其大略を
五六回に申上ませう、先達て申上ました通り平野二郎國臣大和へ参つた節、藤
本等とちやんと約束に及びましたゆへ、早速京都に立歸り、かねて同志である
所の、東洞院佛光寺前に居ります、但馬の人で西村敬藏と云を呼び、さて西村
氏、貴公に一つ相談したい事がある、と云は外の事でもない、今度拙者は是か
らして、中國路へ馳下り、三田尻、招賢園に居られる七人の公卿衆の中、何方
でもいゝ御一人御伴ひ申上、山陰道の方へでも行て、一つ搦旗をやらうと思ふ
それにしては何處の邊がいゝか、そこが一つ相談だ、のゝ貴公は山陰道に明る

いからと言と西村藤を進めて「夫なら私直ぐ御案内致しませう、かやう申すと
何か自分の國を譽るやうで、甚だ如何でムいます、丹波丹後但馬、此三丹と
云所は、中々義勇に富で居る所でありますから、そふ云御思召が御ありなさる
なら、先づ但馬に限りますな、ここに此頃薩州の勇士美玉三平君、肥後の源兼
入江八千平先生など、農兵募集の爲めとかで先達てから行て居られます位、そ
こへ又貴下が御出でに爲て、種々御協議に爲たならば、至極御都合は佳らうと
思ひます」左様が然ばさうして見やうト是から二人つれ立ち、三丹の方へか
ゝりますと、もう幕府の方の手も廻て、道中が中々嚴重でムいますのを、但馬
城崎の温泉へ行く者と言てごまかしく通り抜け、さて先達てから参て居る、
美玉入江などにあひ、又段々評議をした處、何しろ三田尻の七卿を、御つれ申
して來なければ不長と、そこで此誘引方は平野、美玉と定まり、やがて兩人はい
そいで三田尻に参り、かねて同志である所の、川上彌一正義と云素傑にあひ、
右の計畫を申入ると、彌一大に勇み立ち「や夫は至極面白い、夫に丁度拍子の

い、事には、秋月の御家戸原卯精が、此頃度々御前へ行ちよるで、彼から一つ
 盡方させやう」と是を戸原に話し、戸原から三條中納言へ申上げ、三條公もや
 御得心に爲た所で、平野、川上も御前に出で、平野最も辨を振ひ、是非御同意
 被下様、さなくば何方なり御一人でもと申上ると、中納言うなづかせられ「成
 程感心な思立ちやが、今は毛利家からも此様に手厚くしてくれるのに、報告も
 せず出ると云譯にも行ん、然し七人も居る事ぢやから、一人位は行くと云者も
 あらうか」と云仰せでういしましたもへ、夫から東久世中將、深主水正と、順々
 に説て廻ります内、深主水正殿が先づ一番、行て見やうと云御憤發、そこで内
 々皆様に御相談に爲ると、皆一同御賛成でありまして「夫は至極面白さふぢや、
 先づ夫では主水正殿、一つ行て御覽なされ、様子に因て又あとの者も、續て行
 うやも知ん、然し毛利家の番士も居る事ぢやから、夫等に見附られんやう、旨
 く此を御逃れなされ」と皆先づ段々それとなく、見て見ぬふりをする事になり
 ましたもへ、早速此義を美玉三平に話され、旨く計らつてくれろよと仰せある

と、三平大刀の櫛を丁と叩き「不肖ながら三平御受合申す以上は、是にかけて
 大丈夫、イヤ此刀では少し如何だか、イヤ」却て大丈夫、必づ御氣づかひ爲
 されますな」と何か頼りて承知致しそれから川上、平野へ告げ、急々出奔の用意
 とは相成りました。

(其四十五) 美玉の逸事

さて此美玉三平が刀の櫛を叩て、此刀にかけ御受合申す、然し此刀では、イヤ
 却て大丈夫と言たのはそこに妙な譯があるので、此頃其譯を委しく聞きましたか
 ら、一つ此に申上ませう。

前に申述ました通り、櫻田の一條と云ものは、水戸薩摩兩藩同盟であつたので
 ありますが、薩摩連中は藩邸で押へられ、有村次左衛門を除くの外は皆出損つ
 て仕舞ました、三平も即ち其一人です、されば三田の邸の長屋に居た時、佐野
 竹之助などは度々遊びに参り、よく議論を致したさうで、或時赤竹之助と薩摩

悲歌を肴にして、頻りと酒を酌かはし、夜に入て猶飲で居りましたが、後には
 いづれも酔て仕舞ひ、其まゝ其處へ倒れたまゝと爲る、臺所の方には若徒が只
 ひとりで、折々烟の湯を暖める用などをやつて居たが、是も中々好酒家と見へ
 御烟をしながら頻りとやつたので、遂には是もそこへ倒れ、主従共に共潰れ
 と爲て仕舞ふ、其中に夜も更て來て若徒ふと目が覺たゆへ、見るとも無しに坐
 敷の方を窺くと、てふど今竹之助も目が覺めた様子、あたりをキョロ／＼見廻し
 て居るから、何をするかと窺て居ると、竹之助やがて向の方に在た、大刀スラ
 リと抜放したから、サア若徒驚きまして、さては佐野様何か内の旦那と議論の
 合はない事が有て、旦那を今斬る了簡と見へる、是は大變とは思つたが、自分
 もひどく酔拂つて居るので、腰は立すどうする事も出来ません、仕方がないマ
 もう少し様子を見やうと、こは／＼猶窺いて居ると、竹之助又此方の隅に在た
 別の刀を手に取て、又もヤスリ抜放し、三平の寢息をそつと伺ひヒウ／＼と
 振初めた様子、や愈々今度はやるぞ、サア大變と思て居ると、マサ直に斬か

けもせず、行燈の火をかき立て頻りに双色をながめ居たが、やがて今度は腕を
 出し、獨り／＼笑ひながら、何か書初める様子だから、ハアそれなら悪戯
 か、ト安心したので若徒先生、スツカリ又寢込で仕舞ひ、漸く目が覺めると早
 夜が明離れ日がカン／＼中て居るから、ツ、と坐敷へ進入て参り、三平を揺起す
 と、三平大欠伸をしながら立上り「ア、よく寢た、佐野はどうした知ん、いつの
 間にか歸たと見へるナ、己共の刀が無か」「ハ、ア、夫で分りました、昨晚妙な
 事がムいしました」と刀を抜た話を致すと三平ハテナと見廻したが、ふと目につ
 く一通の手紙、是で分るだらうと開て讀み「ウ、そうか面白い男だ」「へどう云
 譯で」「何こう云譯だ、佐野め自分の刀がどうも思ふ様で無か、所が己共の刀は
 自慢の名劔ぢや、因て彼奴考へた處、近々刀の必用があるぢやけん、交易し
 て行くぞ、こう書てある、ヤ旨くやり居つたわへ」と笑て仕舞たそふですが、
 其後三平京都の方へやつて参ると、賭博の有志等皆三平に向て「貴藩は櫻田一
 擧に御關係で有たそふぢやが、皆得遂んで御残念ぢやつたらう、貴公も矢張り

押込られの組か「イヤ、己共の體は出損じたが、魂は出て十分働いたぢや」「そり
 ヤ又一體どう云譯で」「サ己共の魂は體を離れて、腰間の秋水二尺七寸の中に籠
 て措た處、佐野竹之助の手に渡りて十分の働きをやつたてな、竹之助が當日の働
 言つては、大分世の評判だが、そりや己共の魂の助けも、たしかに二人前は有た
 ぢやらうと思ふ、シテ見れば己共が出たも同じぢやから、一向残念の事は無か
 ト言つて度々威張つたさうです、其後寺田屋の時も危ふく捕はれに爲る處を逃れ、
 西條藩の三浦休太郎は悪意にした舊友へ、此へやつて参りますと休太郎打笑
 ひ「君は勤王攘夷、僕は佐幕攘夷、少し心は違ふけれど、愛國の所は同じぢや
 で、先づ當分は此に居たまへ」トかくまつて置きました、即ち今の三浦安君で
 さて美玉は其内又此へ加はり、ヲ今其刀は變つて居るが、竹之助の遺物だから
 却て大丈夫と受合ましたので、それより平野、川上と、三人種々相談に及び、つ
 ひに澤野誘引にかゝつたのであります。

(其四十六) 銀山の旗揚

今日の世の如く郵便とか電信とか、今一つ進んだ電話など云類があれば、何の事
 も無いのであります、昔は中々左様参らん、此平野、美玉の澤野を誘ひ出した
 時が、てふと大和では中山郷以下敗れて四方へ散じた時であります、夫が此
 方に知たならば、此方も中止するでありましたらうが、知らない事は何分にも仕
 方が無い、最も幕府の大軍に圍まれ、危ふく爲たと云だけは聞へたので、そこ
 で勇氣活達の澤主水正殿、却て愈々憤發に及ばれ、或日平野、美玉を密に御呼に
 なり「聞けば大和の方の一擧、餘ほど危ふく爲たと云、夫を捨置と云は無
 い、逆も人を頼みにしては機を失ふから、今夜此を立去て山陰道へ行くでは無
 か」ト言れたで次郎勇み立ち「然らば直ぐ其用意仕りませう」と早速川上彌一
 に話すと、彌一は固より誓固の役をして居るのだから、宜い承知致したと、此
 で其用意を十分調へ、夜の更るのを待て居ります、其内時刻は十分に更渡りた

る、文久三年十月二日の夜、四の鐘も既に撞終り、宿り損ねた旅人も、大底宮市の驛へ這入た見へ、いと物静かなる處の、三田尻招賢閣の裏門のほとりに、ぶらりくと歩み來る一人の武士、極低い調子で今様を唄ひ出し、「七尺の屏風も飛ばなごか越わざらん、羅綾の袂も引ばなごか切れざらん」唄ひ切ると是が合圖で、門のくわいをソット開き、顯はれ出でた又一人の武士「宜いか用意は」宜いとも早く」と問答終て彼武士門内へ這入ると、此度は白装束をした者が一人出で來り、其あとから又五六人、一番仕舞に又一人門の所へ出たが、是はあとへ這つて四方へ氣を附て居る様子、前の數人は此人へ挨拶を致し、半丁ばかり向うへ參ると、四方からしてマラくと出で來た十五六人、かの白装束の人を真中に圍ひ、何處ともなく行て仕舞う、あとに這つた一人は、十分之を見届けて、門内へ這入て仕舞たと申す事、さて是は誰と誰であるかと云に、最初今様を唄つて合圖をしたのが平野次郎國臣、次に門を開いて一寸受答へをしたのが川上彌一正美、白装束が即ち澤主水正宣嘉朝臣、四方から出た十五六人

は、美玉三平親輔以下で、あとへ這つて見届けて引込だのが、東久世中将通陸卿です、なご言と現在其時見て居た様で、不善に思ふ方もありませうが、即ち其時現在見届けられた、東久世伯爵が、編者へ聞せられた談話で御座いますそこで平野、川上、美玉、此三人が總裁と爲り、秋月浪士戸原卯橘が最も剛勇であるから、是を以て先鋒の將とし、肥後の入江八千平が頗る軍略に長じて居るで、是を以て中軍の參謀とし、又下關の人で白石廉作が財産家でもあるもへ、是を兵糧方奉行と致し、播州路より但馬への國界、屋形村と云所にて人數を揃へ、夫より但馬の森垣村と云へ陣を取り、大に勢威を張りましたので、近郷の有志連中、追々集つて來る様子、然らば直に銀山へ行き、彼所を本陣と致すが宜しからう、先達てより西村敵藏が、中島太郎兵衛と云郷士に計り、大仕事か運んで居る筈であると、此で一同打立て生野銀山へと詰かけました、御存知の如く是は矢張り金銀銅鐵の出る所で、其爲めに代官所もあり幕府の出張役人も居ります、先づ是へ一談判に及ぶ事と、とにかく決議致しました。

ついでながら又一寸申上て置くは、此時分の浪士と云と、皆姓名が二つ位づゝあるので、何分間違易くて困ります、先づ此川上彌一の事など、變名の南八郎と云方が世間には聞へて居りますけれど、本名川上彌一で御座いますから、川上で申上げて置ませう、それから美玉三平は、高橋勇次郎と云方が本名なれども、後には美玉の方ばかり名乗て居て、御座位も美玉三平と出て居りますへ、此方に書て置ます、また入江八千平は、一に朝日健とも云ひ、又木曾源太郎とも云ひ、今日猶存命で木曾を名乗て居られますが、此時分は入江で居たと云ふから、其通りにして置きます。

(其四十七) 同上

生野銀山の代官所に於ては代官川上猪太郎といふ人、用事あつて關國へ参り總元締の江川藤七郎と申すが留守を致して居りますと遽かにかういふ事が起り其事の談判として、二人の浪士頭取兵を率ゐて早門内へ遣入て来たといふから藤七

郎藤七郎が仕方がない、其内最早兩人は座敷の上段へ通りました様子も、呉るゝ挨拶に出ますと、卯の花織しの腹巻に緋羅紗の陣羽織を一着に及び、左の方に坐して居るのが平野次郎、黒草織の具足に黄の陣羽織を着し、右の方に居るのが川上彌一でございます、藤七郎はびく／＼ながらそれへ出て「エー拙者事は當代官所總元締を致し居ります江川藤七郎と申す者、御尋来の御用は何でございますか、伺ひ度罷りました」ア左様でございますか吾々共はかねてお聞及びもござらう、此度朝廷の御内命に因り幕府征伐の先鋒として、わざわざ當所へ下られたる姉小路五郎九君にお附添申す、南八郎平野次郎と名乗る者、テ用と申すは外でもなく此度當地に下られたる主意、即ち勤王の旗揚を致すにつき、兵糧金銀等の入用もござるにより、それらをお頼みに参つたる譯米穀は固より申す迄もなく、當所に之れ有る金銀の中三千兩ほどお渡し之れ有る様、此儀直答を承まはり度、サお答へ如何でございます」と殿談に及んだから藤七郎「私し一存にも参り兼ます儀、マ少々御免を蒙りました」と藤七郎奥へ

這入り暫くして出て参り、「仰せの趣きは委細畏まりましたが、何分
 只今代官留守にござりますゆゑ、外に出て居る金銀の在所も早分り兼
 す、どうか先づ是で暫らく御用立下さる様、米穀の方は明日にも取捕へ御本陣
 迄差上る事に仕つりませう、此儀宜しく御執達願ひまする」といつてそこへ出
 したのが千五百五十兩ばかりありましたから「然らば先づ此趣きを大將軍へ申
 し上る間、後日の御沙汰をお待なさい」と是より平野、川上は手紙を書き、此由
 を山口村の陣所へ申し送りますと「代官留守ならば極都合よし早速代官所を本
 陣に仕様と戸原卯橋、美玉三平以下總人數盡とく銀山へ参りましたから、江川
 藤七郎は堪らんと、このりの在金引かへ早々此處を立退た、そこで先づ假
 りに掃除を致して表へは蒸の幕を張渡し、制札其外盡々く皆書改め總て事務は
 此處で取扱ふ事に致し、先づ其間は大將軍澤主水正殿だけ、入江八千平等の一
 組と別に離れて矢張り前の山口村に暫らく止り見て居られました、何しろ此陣
 でございますから、一時は中々の勢ひにて近郷近在多く靡き従ひ多田彌太郎、

伊藤龍太郎、白石正一郎、長野熊之允、小田村信之丞などいふ勇士連々集つて
 参つたゆゑ、皆喜んで居りました、さて此處迄の所ろに於ては、大いに大和一軍
 と事が似て居ります、然るに是が忽ち亡びた次第はといふと第一は大和一軍に
 相應じて双方から攻上らうといふ主意であつたのに、此處に大和が滅亡したと
 いふ噂さが来たので、ツ、と兵氣が挫けました、第二は大和といへば昔し南朝
 の居れた跡で、勤王の尊ぶべき事といふとは百姓迄染み込で居るが但馬國は只
 幕府の威勢がエライ事だけを知て居るのみで、人氣の餘りよらなかつたが大い
 に一體へさわりました、第三は中山郡あの通りの御氣象で、始終軍中に自から
 奔走し運盡る迄一所に居れたに、此澤郷は途中にして變心せられお立退になつ
 たのが、つひに事の破れた原で、さてそれはどうしてそんな事になつたかとい
 ふと、即ちそこに所以がある、そこで此由来をば、二三席申し上ると致しませ
 う。

(其四十八) 里見の履歴

一寸お話しが横道に道入りますやうで甚だ恐れ入りますけれど、大いに大體の成敗へ關係致した次第も、其おつもりで御覽を願ひます

かの浪士の面々が一寸一時休息致して、役割などを定めましたる森垣村といふ所に森垣清兵衛と名乗る庄屋がある、男女あまたの召使も居り中々の物持でございませう、所ころで其奥向の方の用だけを一人で受合て居りますは、お關といふ婦人であります、すると此村の粗頭に利右衛門といふ者がありましたが、家内に一人も女きれがないので、縁物其外誠に不自由だから少しの間お關殿に来て下されといふ頼み、そこでお關は利右衛門の方へ参り半年ばかり助て居りますと、又今度は清兵衛方から急に戻れといふ催促、そこで呉まりましたと又戻り相變らず働いて居りました、さて此お關といふ女は何者だと申しますれば、京都近在の邊に中々立派に暮して居た者の女でございませう、雨傘や類もなく

なつて仕舞ました也、有た所ろだけの金を身につけ少々の知達で此家へ参り厄介になつて居りましたが只遊んで居ても、をかした譯だといふので女中代りに手傳ひをして居るといふ身分、年はまだ極若いに願ふる美人でございませう、内々切込うと企つて居る若い衆も澤山あるといふ至つて危険な身體でございませう、すると或晩の事で主人清兵衛はいふ年をしながら、そつとお關の邊所へ進撃に及び、そろ／＼引張かけますと、お關は驚いてびたりと坐り形を正して町噺に手を突き「オヤ旦那様何か御用でございませうか、御用ならばあちらへ参りまして、ちやんと御用を伺ひませう」「是々お前も合點がわるいな夜中に来る用ならば大抵分りさうなものぢやないか」「イエ何でございませうか私しには一向分りません」「分らなければ云うけれど、何しろさう眞面目に大きな聲でいはないでもないよ」「左様でございませうか御免遊ばしまして」とわざ／＼と大きな聲をするので隣りの座敷に寝て居た、外の女もそろ／＼と目を覺した様な工合清兵衛是は往んと思つたから、そつと後ろの障子をあけて奥へのそ／＼行て仕

舞ました、お關はほつと安心致し其晩は先づそれで済み、あくる日になつて昨夜の事をいひ出されるかと、清兵衛はひやくして居る處ろ別に變つた様子もなく相變らず働いて居りましたが、碁方になつて清兵衛初め皆な揃つて居ります所へ、お關は靜かにやつて参り「只今利右衛門様からお使でお客が大層外から來たにつき、私に一才來てくれと御傳言でございますから一才一走り行て参じます」といふと清兵衛爺ハ、ア這奴め、今夜の夜討を氣づかつて逃るなと思ひましたなれど、皆の居る前だから止る譯にも行かず「そうかそれなら、ちつとも早く行くがよい」「有難う存じます、では一才一晩おひまを」といつて出かけて仕舞、それから日が暮ての後になり裏の戸をトック叩く者があるから、お關が歸つて來たのかと思ふと、さうではなくて利右衛門の所ろの作男でございまして「ヤ一今晚は外の事でもねへだがね、此方の内のお關さんさよ、今急に病氣起つてね、二三日はハア歸れまいと思ふから一すくらそれいひに來たハ、旦那によ一く、さういつてくんなさりますし」といひ捨て歸つて仕舞

たから是れを主人清兵衛に告ると、キヤツめ假病をつかつたなど察しはたしかにつきましたなれど、どうも病氣といふやつは強てといふ譯にも行ず、ア其まゝに致しておくと其次の日も其又次の日も一向歸つて來る様子もございませんから、清兵衛はもう堪へきれなくなつて、とうとう迎ひの者を差出させました。

(其四十九) 同上

お關の清兵衛方へ歸りませんのは病氣でも何でもないので、それなら如何の譯だと申せば、そこに意外な事があるので、かの利右衛門といふ者の子に利兵衛といふ息子がございしましたが、至つて學問の道を好み始終内にはかり坐つて居ります、處ろでかのお關此前半餘り此處に手傳つて居りました時、大層利兵衛と悪意になりました、おまけに只の悪意でなく、つひに特別の悪意と相成たそれゆる清兵衛の方へ歸つて來ても始終利兵衛の事を思つて居る位、處ろへ清兵衛が横戀慕ゆるお關忽ち利右衛門方へ参り利兵衛に遇て萬々の話しを致し、

二人で色々相談を遂げ、取敢へず先づ病氣といつて、暫らく遠退た譯なのでございませう、それから五六日立た或日の事で、かの利右衛門といふ男庄屋方へやつて参り消兵衛に面會致し「さてッア庄屋様へ、飛だ事はだかつたよ此内から来て居た、お關殿と私等内の利兵衛野郎と、ちよくり合つて居たと見れて何處かへッン逃げて仕舞た」といふと消兵衛は怒つたの怒らないの青筋を押立て「何だと己處のお關と手前の處の利兵衛と、ちよくり合つてッン逃たど、是利右衛門お關は十只の女中と思ふと違ふぞ、いはゞ預つて居るやうな者だ、それを連出されたり何かしちやア誠に早困るぢやないか」「困るのは御同前でございますが何も己が出した譯ぢやアなし、己に小言打は御無理だんべな」「イヤ、手前知て居て、わざと落してやつたのだらう」「冗談いつちやアいけましねへ己は何にも知りましねへ」「知なければ知らないでいゝから早く探し出し二人揃へて連れてこう」「チャア、マア一つ探して見ますべエが、しかと受合ふ譯には参りましねへ、イヤ飛だ目に遇は遇ものだ」と頼りにつよやいては居りましたが其

實全くは知てゝ逃したのか、強て争ひは致しませず其まゝに立歸り先づ暫らく事もございませんで、五六年は夢の如くに立て仕舞ました、さて是から七年餘り過たあとの事でございませう、此森垣村と山一つを隔つた隣の村と地界の事に就き、大いに紛争が出来ました處ろが此處は其公卿方の領地の交つて居る處ろだから、公卿様に少し口をきいて戴けば早くかたがつくであらう、森に澤三位様は少し此邊に御縁故もあるから行つて願つたら、宜らうといふので庄屋の事だから、かの消兵衛、村中の總代となつて上京致し早速澤家へ伺つて見た處ろ、それは執事に話す方が宜しい當時執事は里見外記といふ人で直お裏御門脇に、お小屋を頂戴致して居る此處へ行つて見るに限るといはれ、消兵衛は委細心得て夫々の手土産などを携さへ、のこゝ出かけてやつて参り、先づ其願書様の物を差出し、お目通りが願ひたいといふと此方へといつて奥へ通され、暫らくすると唐紙を開け出て参つたは當邸の執事役里見外記といふ人物此方は邊を一寸ほど下りびつたりと平伏致し「是れはく初めましてお目通り仕つりま

す、私しは但馬森垣村の名主清兵衛と申します者、委細は願書に記ためましてございませうが、猶又お目通りの上委しく申し上やうと存じまして御無理を申し上りましたる處ろ、お聞濟下しおかれ誠に以て有難い次第、へいへい恐れ入りましてございませう」とむやみにお辭儀をして居ると里見外記はくすくすと笑ひ出したが、暫らくして少し席を進め「是さく清兵衛、さう町摩では話しが仕悪い今家内も遇うといッて居るから、マア打どけてもッくり話せ」といふ折柄後ろの方より立派な御新造が出て参りましたから清兵衛は愈々恐れ入って仕舞た。

(其五十) 同上

但馬の山の中で生育たばかり外を見た事のない、森垣の清兵衛立派な座敷へ通されたので恐れ入つて居た、處ろへ又美婦人の出られたのも肝を潰して平伏致し「是はく興様で入爲しやいませうか、私しは清兵衛と申します田舎者でございませうが、どうぞ又お見識おかれまして」「是々清兵衛なせ左様に町摩に通

るのぢや貴様もう見忘れたのか」と度々いはれて清兵衛も、ハテ妙な事をいはれると思つて首をあげてよく観ますと、イヤどうも驚いた、里見外記と名のる人は、かの同村の組頭利右衛門の悴利兵衛で其御新造と申しますは、現在己れが召使つて居て後には口説いて弾かれた、かのお關でございませう然し外記夫婦因より清兵衛に對して、何も怒みのある譯でもないから氣を利用して酒肴など取出し段々昔しの物語りに及び、以前は互につまらん事で争ふ様な譯だつたが、今では何も彼是いふ處ろはない、私しも今はかういふ身分になつたが故郷の事でもあるからして随分骨を折てやらうと、此處で段々周旋致しましたので、此紛も首尾よく済みました、そこで清兵衛喜んで國へ歸り、さて今度地界の論の旨く此方の利になつたは是々かやうくの譯であつたと、かの利兵衛の話しを致し自分も最早年老て名主の役は勤められないからと、自分から退て隠居致し利右衛門を引上げて、名主代といふ事にしましたので利右衛門は大層な勢ひとなり、悴の自慢話しを充分にやつて居りましたは是最ももの事でございませう、然

る處ろ利右衛門も可なり年寄でございまして。又四五年立ますと何となく
よら病つきました。此事を京都に居る梓利兵衛即ち里見外記方に申し
送ると外記は大に心配致し、もう御奉公も随分仕たから此位の事にして是から
は、父の側に居やうと其趣きを申し上、お暇を願ひますと是迄よく勤めたから
といふので夫婦共多分の下され物を頂戴致し、本國但馬へ立歸り久しよりで父
利右衛門に遇ひますと、利右衛門大に喜びまして、ツツと安心したせいか二三
年は何共なかつたが、何といつても年寄の事のでつひに先づ穩かに往生致しまし
た、そこで其跡は外記が繼ぎ相變らず庄屋をして居りました處ろ、運がわるい
のか、いふのか例のお關といふ婦人、ふと頭つて亡くなりました此處に於て外記
大に打歎き、それからもう一間に籠つたまま、鬱々鬱々と塞ぎ切て居ると、遠
に起つた今度の騒動、ハテ何者が大將であらうと聞くと、澤三位様の御子息主水正
と仰しやる方だと、いふから外記愈々驚いて是はマア大變な事が出たぞ、心
配して居るひまもなく最早生野の代官所へお遣入に相成て、かやうくの御様

子だといふから、すぐあとを遣かけて参り元お家に召使はれ居りました、里見
外記と申す者お目通りの義願はしう存じますと申し上ると、それはくよくよ尋
ねて参つた早速に對面致すであらうと仰せられ、速かに御對面となりました、
外記も久しぶりの拜關もゑ初めの内は先づ通例の世間話を申し上て居つたが
あたりも靜かになつたる様子を、とつくりと見濟して「エー恐れながら伺ひま
すは今度是へお越しになりましたは只の事ではございませうまい、何か承まはつ
た所ろにては、公儀幕府を御征討の爲めお旗揚を遊ばしますとか、それは全く
でござりませうか」「全くなればどう致す何か其方に異見があるか」「御意にござ
います、それに就て申し上度わさくお目通りを願ひましたる際、何卒御心を
お鎮め遊ばしてお聴取の程願はしう存じます」といひながらズイと遣み出ま
した。

(其五十一) 同 諫 死

其時外記の顔色は青白く凄みを帯び死を決したといふ體でございませぬ、宣嘉朝臣も少し坐を進められ「然らば其方は止めに参加したのか」「御意の通り恐れながら御前に於けましては、殿中與深く御成長遊ばされ下々の事情御存知ございませぬ、何事も直成る事とお思召浪人などのいふ事を全くとお迷ひ遊ばし御身分にも似合はぬ亂暴、代官所に人数をつかはされ金銀米穀をお取上げになり公儀に敵對遊ばさうなごは以ての外のお思召、それも長く續いて戦ひでも出来ずれば未しもでございませぬ、既に姫路藩の討手二千八百人と申す者早兩三日中に参ります趣き、それが参れば浪人などは一支へも出来ませぬは知ましたる事、テどうか御前には今宵の中お立退遊ばされ何處ぞ大藩へお入りが然るべく此義申し上ます爲め是迄出向ましてございませぬ、然し此山越の道は御不案内でございませぬにより只今繪圖を作つて差上ませう、暫らく御猶豫を願ひ上ます」と獨りで辨じつけて次の間へ遣入りましたで、宣嘉卿も獨りつくづく「と考へられると成程外記のいふ所も一應道理に聞けるから、ハテどうした物か

とお迷ひになつたが、何しろどういふ逃道があるか其繪圖の出来るのでも見やうと、次の間へ来て御覽になると、こはそも如何に里見外記は腹一文字にかき切て相果、書置の如きものが前にひろげてありますから、宣嘉卿驚いて之を御覽になると、其文の大意は此處で御前をお諫め申し逃し奉つる計ひにした以上は、浪人共私しを以て事を破つた者となし、必らず助けてはおきますまい、又それを免れたに致せ亦幕府の方よりは御前を逃したといふ所ろから、矢張り捕へるに相違ござらん、因てそれらの耻を見んよりも切腹致して相果ます間、別紙繪圖を御披見にて一刻も早くお立退遊ばす様と、いと細かに織しありて繪圖もナヤンと出来て居ります、此處で宣嘉卿も是非に及ばず、先づ取敢へず御近習をお呼びになり、早速外記の死骸を隠し甚だ諸浪士へは氣の毒ながら此忠死を空くするでもないから、其通りに出て見やうと、お側に付て居た五六人の者を率ゐ、そこへにお立退となり山間の細道へとおかゝりにて、つひに逃てお仕舞なされました、翌日になつて軍師入江八千平、氣がついて大いに驚ろき直と

此趣きを代官所の陣へ申し送り、自分は只一人にて京都へ行く方の山中に分入り何處かで一ツ宣嘉卿を見付、俱におともして又此處へ歸るとも、又はそれから外へ行くとも、それは其時の様子次第何にしても今一度お目にかゝりたいものであると、急いで山中を驅あるいたが、どうしても宣嘉卿に遇ひません、遇ひない筈で入江の方は只むやみに山の中を駆めぐればかりであるが、宣嘉卿の方は外記の書てくれた繪圖によりて、うまく近道小道とあるいたのであるから人に遇ふやうな所ろは通らず首尾よく落のびてお仕舞になつた、して見ると此外記といふ人物中々感心な者でございますが、どういふ者か此人の事は餘り世間で稱しません、大鹽平八郎が事を起す時、同じく練めて死ましたる宇都木敬治の一件は皆人が譽ますなれど、此外記の事は誰もいはんのは勤王の事業を中止させたといふので人のひゐきがないのでせうか、又は何かそこに譽られない事情があるのか分りませんが先づ編者は聞たまふに、かやう記しておきますが、若し事實相違して居らば何卒御教示のほどを願ひます。

(其五十二)

農兵の反覆

事の敗れる時といふものは又どうも仕方のない者で折角旗擧進になつた、但馬浪士も大將の出奔には困りました、で右の注進取いそいで参り其事を委細に物語たので、代官所に居たる所の人々は是はどうも大變だと、即ち評定に及びました此時平野次郎國臣席を進めて皆々に向ひ「さて各々どうしたもので、最早かく相成ては、逆も事は敗れでござる敗れた後空しく徒死するよりは、一先づ此處を退散して再舉を計るが宜しからうと、此拙者は存じますが各々御思案は如何でござる」といふや否や坐の中央より戸原卯橋通み出で「イヤそれで逃れればよいが若し途中で賤き者等の爲めに捕はれでも致したらば、實に終天の辱でござる、それよりは一同力のつくだけ討手の者を切まくり、深よく割腹致す方がよからう、と此處に兩説が立ち、其論中々決しませんも、川上彌一と美玉三平と双方の間を取扱ひ「どうせ、かやうに相なつたのだから去る者は去り留る

者は留まると各々隨意にしたらよからう」といふ事に一決し其日の評議は相果
 ました、するとななるほどかの里見外記が澤郷にいつた辭も嘘でなく、姫路の兵
 二千餘人といふ者は早間近に來た、そのうへ出石の兵六百人と豊國の兵五百人
 とは、もう村界迄進んで参つた、此處で平野次郎に於てはとうでも是は早く逃
 れなければ、つまらん事になると思ひましたか、其夜遂に手廻りの兵少々をつ
 れて間道より脱走して仕舞た、既に大將の出奔で皆々力が落ちて居る處へ、又々
 謀師の脱走と來たから、愈々浪士の氣がぬけて仕舞ました、すると此近郷の村
 々には農兵といふ者がある、百姓兼侍人でございすが、幾組もく組をなし
 て居て、いざといふ時には兵隊にならう、といふ手合が此邊には澤山居ります、
 で矢張りかの大和の方でいふ十津川郷士といつた様な者、所ろがかの十津川の
 方のは、平生から朝廷の尊むべき事を知て居るのに、代官の鈴木源内が無道の
 者でありましたゆゑ、忽ち之が浪士に味方致しました、然るに此生野の農兵
 は、只幕府の有難いのみを知て居るばかりである上、代官川上猪太郎が仁心を

以て懐けておきましたから、是は中々浪士に應じません、そこで浪士等又々評
 議に及び、どうか此農兵を味方につけ度と、川上彌一の手の士が二三人村々を
 めぐり、説付て居りました處ろ、どういふ行違ひで有りましたか、ふと口論に
 なりまして百姓二三人手打にした、サア是が面倒になつて、何だ浪人共めいや
 に威張るな皆打殺して仕舞がいと」と農兵數百人といふ者が皆々鐵砲を取て、
 山口村より代官所一面に取圍み打かゝらうといふ景色、浪士の面々之を見てさ
 ては愈々一大事だが、何しろ此處では防戦も出來んと、村の端れに集へて居る
 妙見山と申します所ろへ、やにはに上つて陣を取た、次の日の朝になつて見ま
 すと、數百人の農兵共早ひしくと詰かけて、四方より鐵砲計かける體もゑ、
 己れ憎くき百姓原切散して道を開かうと、美玉三平親補、中條右京基好の二人
 長曾我部太郎、中原太郎の二壯士を従がへ、大太刀真向に振かざし群り立た
 る農兵の眞只中へ、チと叫んで飛込だ、それ浪人だ打ちめろと、鐵砲一度に
 打かけますを烟の下からかいぐり、忽ち二三人切て落すと、ヤこりや中々油

断は出来ん、四方から打ちめんと農兵サツと左右に別れ又々鐵砲打かけますを
 又々かいくつて切て入り、とうく一方の血路を開き中條、長曾我部の兩人
 は、一の小高き山に上り向ふをきつと見渡しますと、此山が即ち國界で、山の
 あなたは播摩の國の猪笹村といふ所ろでございますと、先づあれへ行て休息
 しやうと、兩人打つて山を下り猪笹村へとかかりました。

(其五十三) 諸士の最期

猪笹村の端れへ參つた、中條右京と長曾我部太七郎の兩人は、とある片崖へ道
 入込で休息致し居りますと、遂かに聞ゆる餘多の人聲生野の邊より跡を追て來
 た者か又は別に此處へ起り立た者か、矢張り農兵狩人共四方より攻來りまして、
 烈しく鐵砲打かけるから、もう是では是非に及ばん討死するより外はないと、
 二人忽ち太刀振かざし又もや此手に切て入り、八方に退散かし向ふをキツト望
 み見ると此中でも頭立た傳右衛門といふ百姓、片手に竹槍を立て片手に鬨りと

指揮して居る様情さも憎しと、中條右京太刀振て飛かゝつたから、傳右衛門驚
 いて逃やうとしたが逃る間なく後ろげさに割付られ、どうと計りに打倒れた右
 京莞爾と打笑ひ其死體に腰をかけ、跡から參る長曾我部を待合して居りますと、
 此時此邊の狩人で太藏力藏といふ二人の者一旦逃て其場を走り遙か向ふへ行過
 ました、今傳右衛門の切倒されたを見て傳右衛門旦那を殺しやアがつた、よ
 し敵打てあげべと、兩人小高き處ろに上り見て居ると恰も今長曾我部が遣付
 て中條と只二人何か頼りに話しをして居る様子、得たりと狩人兩人は平生猪を
 打なれた手で膝臺に取りねらひ初めた、こちらは一向それ共知らず話し込で居
 る折柄トノくと二發來た鐵丸、不意の事で避る間がなかつたか、太藏の放つ
 たやつは中條へ中り力藏の放つたやつは長曾我部へ中つたから、さすがの勇士
 も急所を打れて、あへなく其まゝ終つて仕舞ふ、さて又此二人に續いて切出た
 美玉三平、中原太郎の兩人は、木谷村といふ所ろ迄來た處ろ又々追かけて參つ
 た狩人等が、亂暴に打出した鐵砲の爲めに遂に此二人も打れて終つた、それか

ら亦少し後れて打て出た白石正一郎、伊東龍太郎の二人は共に敵ヶ所の手を負ひました也る、とある片蔭の藪の中に於て刺違ひて終りを遂げ、又中島太郎兵衛といふ勇士は餘り烈しく戦つて足に創を受けたので思ふ様に歩けませんから、弟にあたる黒田與一といふを呼び、「吾は此處で切腹するから貴様は介錯致した後、自殺する共逃る共してくれ」といつて腹かき切ると、與一すかさず首打落し自分も切腹致さうと短刀を取て坐り直す處へ、ばらくとかけ来た寄手の人数先づく切腹せずと、尋常に代官所へ来いと、つひに其まゝ引て行て仕舞た、さて此間だに又一方を切破り、一先づ妙見山の絶頂迄引上げた、川上彌一戸原卯橋等妙見の堂に腰をかけ、一息ほつとつきましたが、とても早仕方がない、潔よく一所に自殺しやうと、そこへヌマリと並びましたは川上彌一、戸原卯橋を初め、長野熊之允、下瀬熊之進、小田村信之丞、白石康作、久富重、和田小傳次、伊藤榮太郎、伊藤百合五郎、以上十人といふ者が各々姓名辭世等を堂の柱に書のこして、盡とく切腹に及びました、先づ介錯は川上戸原で、八

人の并んで代りく、に腹を切る處ろを、一々に首を打落し其後二人向ひ合て坐り各々小指を喰切て、着て居た白地の片袖へ書留めたる辭世の歌川上のは「後れなば梅も櫻に劣るらん、魁けてこそ色も香もあれ」戸原のは「思ひ立事は成ねど丈夫が、心たゞしき末の道かな」といふ二首で此時も農兵共は間近まで、寄て参りましたなれど、餘り皆々の覺悟が立派だから、見物して居りますと、二人は悠々とそこらを片づけ、さて靜かに腹かき切り、返へす刀を口へ突込み岩上より飛下りて相果てたは、さすがに大將の最期だけあると、心なき農兵等も感服したと申します。

(其五十四) 殘將の退口

さてお話しは少しあとへ戻り、最初先づ澤柳が落のびられました折、跡を退て立出た軍師入江八千平に於ては、いくら探しても澤柳に遇しませんから、然らば此處で死ぬのもつまらん、今一度京都の方へ逃て見やうと、只一人山岡を歩

いて、二三日其あたりに迷ひ居りますと、早妙見山の事もスツカリ済んだので、何でも此處等の山中に落人が這入たらしい、といつて大勢の農兵共山の三方を取圍んで居る様子だから、是はどうも困つたなど、先づ自分の姿を見ますに、まだ飛出した時のまゝで、黒絲絨の具足の上に淺黄羅紗の陣羽織を着し、茶柄朱鞘の大刀に白革箆巻の采配を差して居ります、そこで一寸考へ付よし／＼一つ兵法を以て彼奴等を救いてやらうと、腰にさげて居た麻繩の様な物を、幾つも木の枝へ結び付、其繩の端を片手につかみ、一段乾立して居る處の岩の上に突立上り、キツト向ふを見ますと、一かたまりになつた農兵共等、頻りに此方を見て居る様子だから、先づ懐中より呼子の笛を出し、ピーピ、と吹鳴しておいて、繩の端をグイ／＼引張たから、ザツ／＼／＼林が動き初めた、之を望み見て居た農兵共「ヤアエラー大將か何か合圖をして居るだぞ」「ア！大變木が動くせ大勢隠れて居るのが出てくるのだんべエ」といつて居る内八千平は腰の采配取出して前後左右に振廻し初め、何でも餘ほどの大勢が後ろにでも

居るやうな體をする、「そら指揮を初めやがつた後ろへでも廻られちやア堪んねへ」「早く向ふの廣嶺へ出て、もつくり様子を見てからに仕べエ」と一閃に引揚る様子、先づ是でしめたわへど八千平岩の上より下り、山道をメソ／＼と参ると向ふの谷の上の處ろに狩人體の敵が一人居ります、是即ち矢張り農兵で七兵衛といふ男、河でも際立た手柄をするには獨り抜がけしなれば行んど、先刻から此處へ参り落人の來るを待て居たので、所ろがあいにく入江の方で先へ早く見付ましたゆゑ、此奴使つてくれやうと林を一つそほつと廻り、後ろの方へ近よるのを、七兵衛先生一向氣が付かないで、鐵砲を脇の岩角へのせ、隠んで草鞋を直して居る處ろへ、不意に飛出した入江八千平、先づ突なり足をあげて鐵砲を蹴飛ばしたから、鐵砲はガラ／＼ガランと、横手の谷間へ落ちて仕舞た、是はと驚くひまもなく、やつといふと胸ぐら取れた、然し我武者の七兵衛だから大手をひろげて組付たがいけない、柔術名代の肥後藩で然も指南をして居た入江先生、狩人の及びやう譯がない、エイといふ聲諸共に引かつくと向ふの處

ろへ、七兵衛トウと投出された、起る間もなく背中の上へ入江馬乗に跨つて「
 カアどうだ恐れ入たか」ア一恐れ入ちまひました、どうぞ命だけはお助けを」
 と頷りに詫るから、先づ是はしめたわへ、道奴を使つて道案内をさせ、うまく
 間道を逃れやうと、八千平腹の中でスツカリと勘定を定めて仕舞たが、猶一つ
 威しておいてからでない信用が薄からうと、そこで左の手に七兵衛の胸ぐら
 シツカリと押へておいて、右の手を後ろへ廻し、永正祐定の右手指を、キツリ
 ツと抜き放しました。

(其五十五) 同上

今祐定の短刀を抜放した入江八千平、其まゝ七兵衛の胸元へ押當「サアトウマ
 此處に一つ相談がある十分に聴入るか」ア「へー」もう何とでも仰せ次第に致し
 ます」然らばいはふが、是から一つ人に遇ない様な極むづかしい間道を今日明
 日と二日の間案内して己を首尾よく逃させれば命を助けてやるのみでなく此處

中に致し居る軍用金を半分遣はす若し又聽入んといふならば直此短刀が胸へ行
 くぞよ」ア「へー」仰せ通りに致しますからどうぞ命はお助けを」よしそれなら
 助けてやらう」と其まゝ引起し又麻繩を取出して七兵衛の腰へ結び付「サア」
 先へ立て歩け」七兵衛どうも驚いたが、かうなつては仕方がない命あつての物
 種だから止を得ず、是から二日の間間道の案内を致しました、此に於て入江は
 到頭國界を首尾よく出で、因みの外となりましたから、約束の如く七兵衛には
 多分の金を遣はして別れ、姓名を朝日健と改め夫から賭方を巡り廻つて、御一
 新の時召出され一時大に勢力がありました、其後又官を退て閑居し、又姓名
 を改めて木曾源太郎と名乗り、只今猶存命で居られます、さてお話しは別口
 なり浪士組が生野代官所へ押入た時、別隊を一組組立て近在の方へ出しました
 其頭は本多小三郎、多田彌太郎といふ二人で、然る處方山口村の陣が敗れたと
 聞て、此手も皆散亂して仕舞ましたるゆゑ、本多多田の二將相談致し此處で死
 んのもつまらん様だから、一先づ逃れるだけ逃れて見やうと、左右に立別れま

して、先づ本多は京都を志ざし或田畝道へ差掛りますと、誰か告げたる者があつたと見ゆ、姫路の藩兵二三十人ばかり、八方より追かけ参つて五六人づゝ一組となり、一人立の田畝道を、すき間もなく攻かけて来た、小三郎之を見て、さてはもう是迄か、然し只は捕へられんぞと、一刀すらり抜放し片々の細道へ其一文字に飛で出で、先に立たる藩兵へ、やつといふて切付たから、それ中々剛者だぞ取圍んで生捕れくと突棒取て打かゝるを物ともせざる小三郎、忽ち一人の突棒切り又一人の片腕切た、で一人は横道へ逃出し一人は深田へトウと落た、跡に控へ居たる高坂某己れッ、といつて狼牙押取り無二無三に打てかゝるを、小三郎一足進み切下した一刀に高坂肩口切付られ仰向に打倒れた、此時田畝道にはよくあるやつで、本多の踏で居た所の土が、ヌルくと崩れ落て片足すぶりと踏込と、腰の所迄通入て仕舞た、ヤ失策たかといふ間もなくそこを附込む五六人、忽ち上へ折重なり遂に繩をかける事になつた、さて又多田彌太郎の方は故郷が出石でございますから、そつと出石へ立寄たが運の盡き、同藩

士の爲に見付られ大勢で取圍み、オア多田氏もう仕方がない尋常に御處分をお待なさいと、取敢へず牢内へ送られました、すると間もなく京都の方の幕府役人より沙汰が参り、多田彌太郎事は此度の擧で屈指の者であるから引渡す様にといふ下知状、そこで其計らひにならうとしたので、彌太郎キント覺悟に及び同じ死ぬなら京都に於て首をさらされるより此處で自殺した方がよいと、或夜そつと番士の部屋へ忍び込み刀を一本盗んで参り、つひに切腹して仕舞たさうにございます、愈々是からあとの處が平野以下最期の結局。

(其五十六) 平野の就縛

さて又此一擧の第一主謀人たる平野次郎國臣に於ては、どうかして今一運送れ去り又々再擧を計りたいものだ、一番先に脱出まして兩三日其邊を徘徊して居ると、つひに味方は盡く敗れて仕舞ひ、一同切腹したといふ評判でございますから、もうそれでは致し方がない、上方の邊へでも行て見様かと只一人よら

りくと歩き、或時に差かゝりますと頂上に一軒の茶屋があるから、そこへ這入て休みますと輿の方に五六人旅の武士といった様な輩の者、同じく休んで居りましたが、今しも次郎がひとり居るのを見、頻りと話しを仕かけますので、次郎面倒だとは思ひましたけれど、さうすげなくも致されませんと「イヤ拙者は周防の者でござるが、少々體が悪うござりますので、かやうに遊山をして歩きはから一つ湯の島の温泉へ参らうと思つて居る所ろでござる」と出任せをいひますと向の五六人大層に喜こび「それはよく都合で私共も揃つて湯の島へ参る者、テハ是非から失禮ながら御同道申ませう」といはれて次郎少し困つたが又段々考へて見ると、かうやつて獨りで歩くよりは此連中に頼つて行く方が、幕府役人の咎めを免る都合にもなるのであらうから、同道しやうと決心しましたは次郎一期の誤りでありました、そこで自分も役ばしげに「左様でございますか、テハ是非御同道願ひませう」と是から連立て峠を下り船橋宿と申しまする、さうやかなる宿に参り或宿屋へ泊り込まました、さて此五六人の旅の

武士は何者だと申しますれば、是は豊岡の京極藩士であるが忍びに此邊を探索し居る者で、今や次郎の様子を窺ひ是必らず浪士中有名の者に相違ないと、かねて代官所より出してある人相書に合して見ると、是ぞ今度の主謀人平野次郎に違ひありませんと、こりやよい者に出遇たわへ、とは思つたが名におよ平野次郎の事五六人では仕様がなから夜半人定まつた後、そつと宿屋の主人に耳打致し其宿で方のある男を十二三人ばかり招き集め、次郎の寢て居ります所ろを窺ひ、夫ッといひ磯取圍み中にも勘介傳兵衛といふ兩人、やにはに飛付て押付ると次郎の方にも油断はない、懐中して居た合口を取るより早く上に乗り居る、勘介の胸元グサと突いたので、アツトいつて後ろへ倒れる其間に又取直して傳兵衛の横腹ぶつり通した、是で傳兵衛もどうと倒れ、あとの者は驚いてバツ／＼と下り、十七八人一所になつてかゝらうといふ體だから、次郎は直に起上り何か得物と思つたが何にも側にもございませぬと、いきなり障子を引ばづし横なぐりに前なる捕手を其所ろへ拂ひ倒し、續いて飛出やうと致した時

十八人の中から誰とも知れず、短筒を放した者があつて是が足へ中りました。次郎は思はずバツマリ轉ぶと夫しめたツと十四五人どか／＼とかけ来り、とう／＼繩をかけて仕舞たは亦残念の次第でございました。さて是で豊岡の藩士達は殊の外喜こんで早速之を京都に送ると、京都在住の幕府役人式の通り之を受取り先づ大和の方で行方知れずが、北島四郎但馬の方で同じく入江八千平はだけが漏れて居るが、あとは大抵手に入れたから大いに安心致した、扱大和但馬兩方の囚人皆一所に處刑するつもりで、其頃京都六角の裏通りにありましたる、牢内へと打込でおいたる處ろ、かやうな者共を長く助けておいては後來の爲めに相成んから、成るべく早く殺して仕舞方が宜しからうといふ會津藩より申し立たる建議を、幕府つひに採用ひとなりましたは、實に早奈何共致し方のない事でございます。

(其五十七) 獄庭の惨刑

天の時の未だ至らざるには、どうしても人力の亦如何共する能はざる者でございます。いまして、さしも忠義一途に思ひ込たる大和一擧の諸烈士達牢内に居る者も數多あるので、早く殺して仕舞方がよからうと守護職會津家より申し出した、是が其會津の人だからといつて、悪い了簡で左様計らつた譯ではない、矢張りかの井伊大老が數多の名士を殺したのと同じ意で徳川幕府を萬全にしやうと思ふ所ろより、ひゞく此諸烈士を憎んだので有ります。因て竟に元治元年二月十六日に、かの牢内に捕へおきましたる伴林六郎、澁谷伊豫作、安積五郎、岡見留次郎、尾崎濤五郎、磯前豊、酒井傳次郎、中垣健太郎、精田胸司、荒巻半三郎等以下盡く斬首に致して仕舞、猶少し遺つた人々は斬首か流罪か未だ決しませんが、其まゝ捨おき又但馬一擧の方は關べる間がないから、是は皆一同只牢内に入置き、ゆるりと調べるつもりで居る内かの七月十九日長州藩と會津藩とが、

給御門の大戦争となつた。すると此戦で火事が出來有名の六角堂池坊へと燃付た、サア大變だと火の付た立花或ひは花生を裏口の方へ運び出すと直其裏が六角の獄屋だから獄屋の格子へ火が付た、是を望み見た會津藩士并に幕府の新撰組「ヤ彼所には名代の浪士で平野次郎などいふ奴等が大勢居るといふ事だ、獄が焼失して彼等が出る様になれば必らず長州勢に加擔するに違ひない、ア、今の中に斬て仕舞がい」と相談一決に及び會津藩士并に幕府の旗下等提督げて牢内に亂入致し「是々其方等仔細有つて只今斬罪に行ふから早々是へ歸り出ろ」と亂暴な申し渡して、仔細有つて斬罪なんぞと、そんな刑法が何處の國にありませうか烈士の面々はハツツと怒り「元より吾々一同の命は覺悟の上であるなれど、それ〴〵法通り處刑するなら怨む所もなく斬れやうが、獄の焼失を恐れて、やにはに斬るとは無法とやいはん暴戻とやいはん、他日天の時來るなれば必らず其方等にも報ふで有うぞ」「エ一尊々いはずと覺悟に及べ」「覺悟は固よりして居るは、サ、勝手に斬れ」と少しも驚く體裁なく泰然と坐して居

るを見て「いゝ覺悟だ早く」といふ下知で大和の殘黨は乾十郎、石川一、水郡小隼人以下、但馬の黨は平野次郎、本多小三郎、横田友次郎、伊藤龍太郎以下何十人といふ烈士、皆空く獄庭の露と消へたるは、無慘と云ふも餘まりありで、此時平野次郎國臣は、振返つて幕吏に向ひ「いかに殺人、今此大和國臣が今際に違す一言を、よく心に銘して置き、元來我輩等の徒に於ては、到底一死を免かれ難き事、豫て期したる所なるが、此國家多難の時に當ては、恐らくは敵味方の別なく、貴様達も亦いつか首の座に直る時が來るで有う、其時の心得に、我輩世の一首よく覺へて居れ」と言て高聲に誅じたるは

見よや人嵐の庭の楓葉は

いづれ一葉も散らずやはある

と云歌で、其まゝ首差延て討れました由、いづれも可憐人の中、就中此人などは非凡の人で、最も編者の感じましたは、其牢内に居た時に、志のほろを留て置うと思つても、筆も墨も無い獄中の事、如何共仕方無つたが、幸ひに鼻紙

は澤山ありましたゆへ、紙よりを捻つて少く切り、是で字の形を造り、飯粒を取て置て糊と爲し、右の字を半紙へ張付て一冊の書物と致しました、後年は獄中より出でたる處、是非天覽に入れやうと言て、宮内省へ差出しますと、殊の外に叙感あらせられ、つひに右の薄汚ない書物が、御物の中へ御加へと相爲たは、國臣が靈魂いかばかりか難有存じ居る事で御座いませうか。

(其五十八) 結 末

以上の如き始末で有たから、之を聞た諸藩の人々、大に怒み憤りましたそうで成程大和各所の戦争に、井伊藤堂などの手に、討れた者も餘多ありますけれど是は互に命をかけての勝負の上ゆへ、討れたと言ても怒む所は無いが、今度の處置と云ものは、半内に束縛されて居る者を、片端から斬殺すと云は、實に情ある武士の爲す可き所で無い、テ段々其時の事を聞て見ると、會津藩の留守居役、萱野機兵衛などが言出した説、所へ亦人を殺す事飯より好きだと云、斬殺

組の近藤勇等が、養成して此に及んだと云ふ噂で御座います、テ一體大和事件には土州人が多く、但馬には長州人が多かつたから、此二藩の人々殊に其各烈士の兄弟親類等は、會津及び新撰組を、警として窺ひ居たる處、天運巡坂時有て来りて、慶應四年伏見に於て、双方の衝突と爲ると、かの諸烈士を無慚に殺した新撰組は、會津の部下に屬して出陣するに、長州土州の隊長等は、大和但馬に關した死士の血縁及び門人等だから、つひにかの如き結果に至りました譯(此伏見戦争の事は、今此には述盡せませんゆへ、是は又追て申上ませう) ついでゆへ申上て仕舞は、彼新撰組の近藤勇で、伏見の一戦敗れてより、東國へ走つて又事を企てたが、逆も早通れる所無くなりました、されど剛毅の男ゆへ、ユリヤ一番ごまかして、官軍の陣中へ遁入込うと、流山に屯して居る長州の兵營へ参り「拙者は幕府の旗下大久保大和と申す者で御座るが、降参致しますにより、陣中へ御留置を願ひ度」と言入たは佳つたが、彼の運の盛る時か、京都で近藤が威張て居た時見知たる、加納某と云者てよど此營に居たゆへ、長